
プリンセスは芝生の上

冴木 昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンセスは芝生の上

【Nコード】

N3671W

【作者名】

冴木 昂

【あらすじ】

ミハルは高級クラブに勤めるホステス。ある日店のゴルフコンペのためにゴルフ練習場へ行った彼女は、そこで王子様のような容姿の青年と出会った。彼はどうやらレスンプロのようだけれども、ゴルフ初心者のミハルに向かって無遠慮にへたくそなどと言う。いけ好かないと思うが、ひょんなことから彼にレスンを受けるはめになり・・・

ハーレクインロマンスみたいな定番の恋愛ものが書きたくて書き始めましたが、なかなか難しいです。でも、しっかりそれなりにラ

ブシーンは入れていく予定なので、好きな方はぜひ読んでみてください。
よろしく願いいたします。

ハーレクインみたいな出会いって、こんな感じなのだろうか？

1

「そうよ、これでいいのよ」

ミハルは自身に言い聞かせるように声に出して呟き、目の前の白球に全神経を集中した。足を肩幅に開き、両腕のひじを伸ばす。ゴルフクラブのヘッドはやや左寄りに置き、そのまま上半身をひねるようにして振り上げる。

「チャー」左ヒジを意識して、ひねりきったら僅かに止める。

「シュー」そのまま体のねじりを解くようにして、自然にクラブを振り下ろす。

「メン！」ブンと風切り音がしたかと思うと、ミハルの体がよろけた。

「あー」彼女は独楽のようにくるりと一回転すると、そのまま勢い余ってぶざまに尻餅をついた。涙目で尻をさすって、ようやく周囲のざわめきに気づく。昼下がりのゴルフ練習場に居る、ほぼ全員が彼女に注目していた。

「あなた、大丈夫？」

隣の打席から中年女性に声をかけられ、ミハルは慌てて立ち上がった。スカートの尻をはたきながら、「大丈夫です」と蚊の鳴くような声で応じると、さざ波のごとき失笑が広がった。顔面が紅潮するのを感じ、顔を伏せると、足元には彼女をあざ笑うかのように、打ち損じた白球が鎮座していた。ミハルはがっくりと肩を落とした。運動神経にはそこそこ自信があった。高校時代はソフトボール部のキャプテンを務めており、尚且つ不動の四番バッターだった自分が、何故止まっているゴルフボールを打つことができないのか。まったく、信じられないことだった。

ミハルは絶望的な気持ちになってきた。ゴルフコンペは来週に迫

っており、どう考えてもそれまでになんとかなるとも思えない。

事の起りは数日前。ミハルの勤めるクラブ『エレガント』では、常連客がいつにも増して金をばら撒いていた。金融業を営んでいる金原という中年オヤジだった。聞くところによると金原は、頭にヤのつく人たちと深いつながりがあるらしいと噂されていた。店では、金原に対して人一倍気を使うようにホステスたちに言い含めていた。それならば、ご来店を丁重にお断りすればいいのにとミハルは思うけれど、今どき湯水のように金を使う金原は、店にとって超一級のVIPなのだ。

金原はまだ宵の口だというのに、赤ら顔をいつそう赤くして、したたかに酔っ払っている。なんでも大きな商談が成立したとかで、とにかく機嫌がいいようだった。金原はミハルを隣にはべらせ、たるんだ腹を揺らしてつまらない冗談をとばしている。彼の太い指がミハルの腰のあたりをさ迷い始めたので、彼女はシャンパンのお代わりを注文すると言って、ようやく金原の居るボックス席から抜け出した。

「まったく、下品なオヤジ。やたら金をばらまいてさ。何して儲けてるか知らないけど、うちはそういう店じゃないっつーの」

ミハルはカウンターに入って接客している店のママに小声で文句を言った。

「気持ちわかるけど、ミハルちゃんもちょっと我慢しなさいよ。大人なんだから」

「だって、キモいよ。それに、気を使わなくちゃいけないから、ひどく疲れるんだもの」

ミハルとママが、カウンター越しに小声で話していたときだった。「何をして儲けたって、金は金だ」

銀縁メガネのブリッジを押し上げながら、どこからともなくフロアに現れたスーツの男性が低い声で言った。クラブのオーナーだ。彼はいつもブランド物のスーツに身を包み、インテリ然とした空気を漂わせているが、腹の中では損得勘定が渦を巻いているような人

間だとミハルたちホステスは知っている。

「金原のような男が居るから、キミたちはお給料がもらえるんだよ」
オーナーの言い分もわからないではない。しかし、実際に接客するミハルたちは、毎回神経をすり減らすことになる。万が一にでも、ヤのつく方々と揉め事など起こせば、この町では生きてゆけない。そんな状況の中、オーナーがママとミハルに向って言った。

「春一番とともに、今年も例のイベントの季節が到来した」

女性二人が顔を見合わせた。ゴルフ好きの金原は、年に数回、ゴルフコンペを開催するのだが、ミハルの店からも毎年オーナーとホステスの誰か一人が参加することになっているのだ。昨年までは、ママと先輩ホステスのユカリが交代で出ていた。けれど、昨年ユカリが寿退職してしまったのだ。

「困ったわねえ」

ママは頭を抱えた。それというのも、先月ママはうつかり転んだ拍子に左腕を骨折してしまったのだ。毎日の業務には支障がない程度に回復しているが、とてもゴルフができる状態ではなかった。ホステスたちの中にゴルフのできる娘は居ない。そんな中でオーナーがミハルに目をつけたのだった。もちろん、決め手は四番打者。履歴書にあんなこと書かなければよかったと、後悔しても遅い。接客業だけに、個人の趣味は詳しく記入して欲しいと言われ、素直に書いたのが災いした。

「球を打つという行為は一緒だ。ミハルちゃんなら出来る」

「でも私、ゴルフなんてやったことがありません。道具も持っていません」

「大丈夫だよ。ミハルちゃんはその店のナンバーワンだ。ゴルフが出来なくなつて、お愛嬌さ」

オーナーのお気楽発言に後押しされて渋々引き受けたのはよかったが、やってみて思い知った。見るのとするのは大違いとは、まさにこのことだった。

ぼうつとして打席に立ち尽くしていたミハルは、中年女性の声に

思考を引き戻された。

「ねえ、あなた。ゴルフクラブ」

「へ？」

声のほうに振り返ると、中年女性が自分の持つているヘッドの大きなゴルフクラブを持ち上げ、さらにミハルを指さした。ミハルは何も無い自分の手元をじっと見た。二、三回目を瞬かせ、ようやく中年女性の言わんとしていることがわかった。金原からもらったおこづかいで、昨日購入したばかりのブリヂストンのチタンヘッドドライバー（4万8千円）が無い。

きよろきよろと辺りを見回していると、突然ゴルフ練習場内にアナウンスが流れた。

『ご利用のお客さまにお願いいたします。ただいま、クラブが飛びました。回収いたしますので、しばらく練習を中断してください』

ミハルはぎょつとした。緑の人工芝が一面に貼られた午後の練習場を、隅から隅へと見渡すと、紺色のスタッフジャンパーを着た男性が、ミハルの前方100ヤード地点に向かって走ってゆくのが見えた。彼は何かを拾い上げる仕草を見ると、そのまま真っ直ぐにミハルに向かって駆けてきた。男性の手の中に、4万8千円の新品ドライバーを認めた瞬間、彼女のこめかみに汗が一筋流れた。男性を目で追っていた客たちの視線が、ミハルのほうへと流れる。男性スタッフは軽やかな足取りであつという間にミハルの打席に到着した。ゴルフボールではなくゴルフクラブを飛ばしたのだ、という羞恥心が一気にミハルを混乱させた。黙ってゴルフクラブを差し出す男性スタッフに、ミハルはふるふると首を横に振った。

「え？ コレお客さんのじゃないんですか？」

意外にも張りのある若い声に、ミハルは男性スタッフを見上げた。と、突然ふわつと、若草の薫りに包まれたような気がした。日に焼けた顔に、はらりとかかった前髪。気の強そうな眉の下、釣り上がり気味の目がじっと彼女を見下ろしている。ミハルは、こんどは違う意味で頭の中が真っ白になってしまった。彼の顔から目が離せない

い。艶のある若い肌は、まだ二十代になっていないように思われた。すっと通った鼻筋から無駄な贅肉の一切無いアゴのラインを辿っていると、彼の口角が片方きゅっと上がった。CMのような白い歯がこぼれてドキリとした刹那……

「お客さん？」

男性が怪訝そうな顔になった。ミハルは彼をガン見していたことに気づき、慌てた。

「あ、何でもありません。あたしは、別にっ」

言いながら、何度もかぶりを振る。

「じゃあ、違うんですか」

男性はふうと小さくため息をついたあと、ぼそりと言った。

「へたくそ」

「え？」

形の良い唇から吐き捨てられた言葉に、ミハルは現実世界へと叩き出された。男性はにつこりと微笑んで言った。

「ったく、へたくそだな。いったい誰でしょうね、クラブ投げるなんて」

「あ……」

「どうもおじゃましてすみません。失礼いたしました」

男性はミハルに向かってぺこりとお辞儀すると打席から離れてゆく。その手にはミハルのドライバーが握られているが、いまさら声がかかけられない。

どうしよう……

逡巡していると、男性がふいに立ち止まってこちらを振り向いた。彼はミハルを見つめてなぜかニヤリと笑い、次いで、ごく小さな声でつぶやくように言った。

「あ、そうそうお客さん。……そのかつこつはちょっと、まずかつたですよね」

「え？」

ミハルは自分の姿を見下ろした。ゴルフなどやったことがなかっ

たから、店のママさんに借りたウェアを着用していた。マンシングの黄色いポロシャツに、スリットの入った紺色のミニスカート。スポーツソックスにバイザーをかぶったこのスタイルの、どこがいけないのだろうか？

『ご協力ありがとうございました。練習を再開してください』

練習場内にアナウンスが流れると、男性は右手にドライバーを握ったまま、流れるような動作でミハルの打席から離れていった。

男性の姿が見えなくなっても、なんだかソワソワと落ち着かない気分だった。ミハルはものすごい勢いで道具を片付けると、逃げるようにして打席を離れた。ママから借りたゴルフバッグを背負って、これまた借り物の歩きなれないスパイクでがしと通路を歩いていくうちに、ふつふつと怒りが込み上げてきた。

「なんなの、あのガキ！」

そうだ、まさにガキじゃないか。青空に向かってすすくと伸びている、緑色の麦の穂みたいだった。二十五歳の自分から見れば、彼は明らかにケツの青い子供だ。しかも、お客に向かってあの態度はないだろう。

へたくそ

あれは、明らかに自分に向けられた言葉のような気がする。そんなことを言われる筋合いはない。確かに止まっている球も打てないほどにへたくそではあるが、だから出勤前にも拘らず、こうして時間を作って練習しているんじゃないか。球よりもドライバーが飛んだからって、あんなこと言わなくても……

とにかくドライバーを返してもらわなくてはと、ミハルは練習場の受付へ向かった。通路の先に五段ほど階段があり、クラブハウスに通じていた。入ってすぐ右側の受付カウンターの女性事務員に、ミハルは腹立たしげに事情を説明した。

「打席係の男の子が持つて行っちゃったのよ。だから早く……」

ミハルが言いかけたとき、練習場へと続いている入口が開いて、紺色のスタッフジャンパーを着たさっきの男性が来た。手にはまだ

ミハルのドライバーを持っている。女性事務員が何か言いかけたのを無視して、ミハルは彼の方につかつかと歩み寄った。

「ねえ、返してよ。それ」

彼は何かかというように目を見開いたが、どういうわけかクス…

…と笑った。

「オレ、さっき聞いたよね？」

「え？」

「あんた、コレ自分のじゃないって、言ったじゃないか」

ミハルは反射的に彼の持つゴルフクラブに手を出し、シャフトの部分をつかんで引き寄せた。……つもりだったが、逆にすごい力で引つ張られて前につんのめった。

「キャッ！」

仔犬のような悲鳴とともに、ミハルは彼の腹の辺りにしがみついていた。

「安定が悪いんだよ、足元」

頭上から声が降ってきて、ミハルは慌てて飛びのいた。心臓がバクバクする。一見スリムに見えたが、抱きついた腹のあたりは、鍛えられたがちがちの筋肉が感じられた。慌てて離れると、手書きの名札が目に入った。

『早乙女』と斜めった文字で書かれている。顔を上げると、日に焼けた若い顔が見下ろしていた。彼の表情には、なんの感情も読み取れないが、べつにバカにしているような空気もなかった。

「ご、ごめんなさい」

とつさに謝りながら、何故私か？ と心中で自問する。早乙女はミハルを上から下まで見た後、ドライバーを彼女に返却し、いきなり足元にしゃがみ込んだ。何かと固まっていると、彼が言った。

「このスパイク、サイズ合っていないでしょう？ そんなの履くくらいなら、運動靴のほうがいいよ」

跪いて、ミハルの靴に手を掛ける早乙女をつむじを見下ろしながら、止まっていた彼女の思考がようやく動き出す。これって、アド

バイスの言葉？

「それから……初心者なら、きちんと習ったほうが上手になる」

早乙女はゆっくり立ち上がると、ミハルの顔を真っ直ぐに見ながら笑顔を見せた。

「あ……」

ミハルの心拍数が跳ね上がった。彼の笑顔は、今までに一度もお目にかかったことがないような爽やかさだ。白い歯がこぼれる様は、まさにプリンス。こんな顔をしていたのかと改めて見つめると、惚れ惚れして何故だか感動すら覚える。

「がんばってくださいね」

さっきの態度とは180度違う好感度を残し、彼は練習場へと消えて行った。

ミハルはたつぷり一分ほども、ぼうっと立っていた。何だか夢をみているようにフワフワとした気分でロビーを横切ったとき、ふと壁のポスターに気付いた。

『プロがやさしくご指導いたします。初心者歓迎！ 1レッスン5000円』

文字の下にある写真は、アイドルのように完璧な笑顔を向ける早乙女だった。いきなり夢から現実へと場面が切り替ったようだった。「なによ！ さっきのあれって、新手の勧誘じゃないのよ！」

ミハルはポスターに向かって、思わず声を荒げていた。いきなり優しくなったと思ったら、こんな下心があったとは。世間の恐ろしさをつくづく思い知った。まったく、油断も隙もあったもんじゃない。どうもおかしいと思ったのだ。不愉快な気分のまま、ミハルはゴルフ練習場を後にした。

翌日、ミハルは再びゴルフ練習場へ来ていた。自宅に帰ってから、改めて思い直したのだ。やはり、このままではマズイ。大事なお客とのコンペなのに、止まっているボールが打てないのでは、迷惑どころか競技が始まらない。

駐車場に停めた愛車のヴィッツから、借り物のゴルフバッグを下ろすと、ミハルは自分の服装をチェックした。今日は上下セットのトレーニングウェアにした。髪は高い位置でポニーテールにして、足には白のスニーカーをはいた。昨日、早乙女に笑われたのがとても気になっていたのだ。

あ、そうそうお客さん。……そのかつこうはちょっと、まづかったですよね。

何がどうまずいのかまったくわからないが、とりあえずゴルフウェアがダメならば、あとはトレーニングウェアかジーンズしか考えられない。

ミハルはバッグを背負って練習場の受け付けロビーに向かった。受け付けには数人のお客が並んでいた。みな中年の女性で、手に紙切れを持っている。近くに寄って見てみると、どうやらレッスンの申込書のようなだった。彼女はロビーの壁に貼ってあるゴルフレッスンのポスターを眺めた。アイドルフェイスの早乙女コーチが、ミハルに向かって微笑んだ。彼女はちらちらとポスターを見ながら、気付けばレッスンの申込書に手を伸ばしていた。こんなにレッスン希望者がいるのだから、きっと早乙女は優秀な先生なんだろう。自分とはにかく時間がないから、いいコーチにレッスンしてもらわなければ。彼に対する印象はあまり良くなかったけれど、今の自分には、プロのアドバイスが必要なのだ。でも……。

相場がわからないけれど、正直五千円は痛い。申込書を手にしたまま逡巡していると、受付で中年女性がわめくのが聞こえた。

「いっぱいって、どういうこと？ あのパスター、二日前に貼られたばかりじゃない」

「申し訳ございません。夜の時間帯なら多少の空きが……」

「私は主婦よ。夜は来られないわよ。わかるでしょう？」

受け付けの女性事務員に食って掛かるオバサンを見て、ミハルは申込書を元の場所に返した。主婦じゃないが、夜は仕事だ。レッスンは受けられない。ミハルはそのまま打席の使用だけ申し込むと練習場へと続く階段を降りて行った。

練習場の打席に立って周囲を眺めた。ゆるやかなカーブを描いて設けられた打席は、ほぼ全部埋まっているようだった。平日の昼どきだというのに、意外にも混んでいる。緑色の人工芝が貼られたフィールドは、練習客が打ったボールが散らばっていて、雪のように見えた。カッソカッソといい音をさせては、ぱらぱらとボールが降り注ぐ。

ミハルはもう一度打席に立つ人々に目を向けた。昨日は練習場に来たのも初めてだったし、ゴルフクラブを握るのも初めてだった。だから、周囲を気にするゆとりも無かった。しかし、今日あらためて見回してみると、みなミハルのようにブンブンと力任せにクラブを振り回している人は皆無だった。当然、「チャーシューメン！」などと怪しげな掛け声を出している者も居ない。ゴルフを始めるにあたって、店のママや金原からいろいろとアドバイスをもらったのだが、そのときに金原がしきりに言っていた掛け声がそれだった。

ミハルちゃん、とにかくリズムだよ。チャーシューメン！
ってね。

あのと金原やママは楽しそうに笑っていたっけ。ひよつとしたら、からかわれていたのかもしれない。そもそも、チャーシューメンとはいったい何なのだ？ おまじないか？

ミハルはゴルフバックの中から一冊の雑誌を引っ張り出した。表紙

にはプロゴルファーの宮里アイちゃんが載っている。昨夜ボーイフレンドたちに電話をかけまくったが、ゴルフができる者は一人も居なかった。仕方なく、ミハルはコンビニでゴルフ雑誌を買ったのだった。

「やっぱり自分で勉強するしかないよね」

ぱらぱらとめくると、横峯サクラちゃんのスウィングが、コマ送りで掲載されていた。昔から手本を真似るのは結構得意だった。ミハルは足元に雑誌を置き、見よう見まねで構えてみた。そのままボールを置いて、打ってみる。ヒュン、と良い音がしたがやっぱり空振りだった。

「ほんの少し、指の太さくらい、短く持ってごらん」

「へ？」振り向くと、ミハルの打席の真後ろに、早乙女が腕組みをして立っていた。大人気でレッスンの予定がつまっているというのに、なんでこんなところでウロウロしているのだろう。

「早く、やってみなよ」

戸惑いつつも、声に促されてミハルは先ほどと同じようにクラブを振り上げた。そのまま勢いだけで振り下ろす。

キン！ 金属音がして、手のひらに手ごたえがあった。

「あ、当たった」

ボールの行方はわからなかったが、初めてクラブがボールを打った感触は、思った以上に気持ちよかった。ミハルは嬉しくなった。

振り返ると、早乙女がにこっと笑った。ミハルの心臓がトクンと跳ねた。

「姿勢も本どおりに出来てるし、スイングも悪くない。あとはクラブの握り方だけ……」

そう言って、早乙女はミハルの打席に入ってきた。もっと教えてくれるのだろうか？ あとから五千円を請求されたらどうしよう、などとセコイ考えが頭の中を掠める。

「もう一回、アドレスして」

言われて、ミハルは首をかしげた。アドレスして、とは何のこと

だろう？

「メアドが、必要なんですか？」

問い返したミハルを、早乙女はまじまじと見つめた後で、プツ吹きだした。そのままツボに入ってしまったように、彼は体を二つ折りにして笑い転げた。よく通る笑い声が、真昼の練習場に広がった。ミハルはわけがわからずに打席で突っ立っていたが、周囲の目が二人に注がれているのに気付いて、だんだんと腹が立つてきた。

「ひー、おもしろえ」

涙目で腹をおさえる早乙女に歩み寄ると、ミハルは彼の滑らかな頬に平手打ちをしてやった。乾いた音が響き、見ていた人々が、一瞬ざわめいたかと思うとすぐに自分たちの練習に戻っていった。けれど、ミハルはみなが背中でもこちらの様子を伺っているのがよくわかった。それでもいい。黙ってはいられない。

「ちよつと、失礼じゃないの？」

早乙女は夢から醒めたみたいに頬を押さえて佇んでいた。そんな姿を見ると、まだ年若い彼は、まるで母親に叱られた子供のように見えた。ミハルは少々罪悪感を覚えたが、罪の意識をふりはらうように、まくしたてた。

「あなたが私をばかにするからよ。ゴルフのことなんて、何にも知らないんだから、仕方がないじゃない。それに、昨日だって、あなた私の服装、ばかにしたじゃない」

「べつに、ばかになんて、してない」

ぼそりと言い返した彼の言葉が弱々しかったので、ミハルは逆に勢いづいてきた。

「どうしても、今週中にゴルフができるようになりたいのに、ぜんぜんわからなくて。レッスン受けようと思ったら、いっぱいだって言われたし」

なんだか言っているうちに興奮してきてしまった。声が震えるのがわかったが、どうにも文句が止まらない。日頃からストレスが溜まっていたのだと、こんな最中に自覚するなんて、まったく自分が

なさけなかった。

「私だって、どうしたらいいのかわからないんだもん」

ああ、これじゃあまるで小学生だ……。自分の言葉でますます自己嫌悪に陥りそうだった。それでも、意思に反して言葉は口から出続けた。

「アドレスって何よ。どうしてゴルフ場でスカートはいてはいけないの？ 教えてよ！」

早乙女に向かって、一気に言葉を吐き出すと、ミハルは肩で大きく息をついだ。ふと背の高い彼を見上げると、早乙女はつり上がり気味の目を大きく見開いたまま固まっていた。再び罪悪感がミハルを襲った。彼女は小さく嘆息すると、彼に背を向けた。

「練習するから、邪魔しないでください」

ミハルはバツの悪い思いでクラブを握ると、打席に立って構えた。大人げないことをしたなと思う。きっと、嫌な女だと思ったことだろう。足元の白球を睨みながら、先ほどの早乙女に対する暴言や、気軽にコンペの参加を承知してしまった自分の軽率さに、今さらながらに後悔した。もしもコンペに出ないと言ったら、きっとオーナーは怒るだろう。金原も機嫌をそこねて、拳句に自分は店を解雇されてしまうかもしれない。ますます憂鬱だった。こんな気分に参加したって、きつと疲れるだけで楽しいはずがない。

練習とはまったく関係の無い事を悶々と思っていたときだった。キユツと床を踏むゴム底の音がしたかと思うと、ふわりと背中から抱きしめられた。

え……？

もう彼は居なくなってしまったと思っていたから、いきなりのこととミハルは飛び上がりそうになった。いったい何事が起きたのか、状況がわからない。かろうじて悲鳴を上げずに済んだのは、ホステスという職業柄、セクハラ慣れしているからだが、こんなに明るい太陽の真下で、しかも大勢の目の前で男性に抱きしめられたことなんて、一度もない。ミハルは眩暈がしてきた。

早乙女はクラブを握るミハルの手に、自分の手を重ねた。耳の辺りに吐息を感じてどきりとする。

「あ、あの……」ようやく声をしぼりだすと、彼は低い声で言った。「これがクラブの正しい握りかたです。脇をしめることを意識して練習してください」

「あ……」彼はミハルから離れると、ぺこりとお辞儀をして言った。「アドレスというのは構えることです。それから、昨日は、ころんだときにスカートの中が見えたから……」

言いにくそうに語尾を濁し、彼は足早に立ち去った。ミハルはぼんやりと早乙女を見送った。

あ、そうそうお客さん。……そのかつこうはちょっと、まづかったですよね。

昨日は、ころんだときにスカートの中が見えたから……

彼の言葉を脳内で反芻して、ミハルは後悔にさいなまれていた。全部自分の勘違いだと気づくまでに、まったく時間はかからなかった。アドレスしてください、とは、打席に立つてくださいということだ。それをメアドと間違えたんだから、彼が爆笑したのも頷けるおまけに叩いてしまった！ せっかく親切に教えてくれようとしたのに、なんて悪い事をしてしまったんだろう。ミハルはひとり、青くなったり赤くなったりした。 > i 3 0 2 9 1 — 3 8 8 8 <

しばらく球を打ったあとで、早乙女の姿を探すと、彼は中央付近の打席で中年の女性客にレッスンをしていた。彼の周囲には、数人のおばさんが群がっている。どうやら受講者の友だちのようだった。彼は声がかかるといちいちそちらに顔を向けては愛想よく対応していた。自分の母親ほどの女性に、きちんと丁寧に指導する姿を見て、ミハルの中で彼を見る目が変わった。

おばちゃんたちは、とても楽しそうだった。手の届かないヤマピ―やカメナシくんよりも、五千円で独占できる早乙女くんのほうが、現実味があつていいのかもしれない。年下はまったく射程圏外だが、

ミハルもこのことに関してだけは、おばちゃんと同じ考えだった。さっきのことを謝ろうかと思ったが、早乙女は仕事なので帰ることにした。ミハルは道具を片付けると練習場を出た。昨日は道具が重くて辟易したが、今日は何故だか軽く感じられる。早乙女にほんの数箇所アドバイスをもらっただけで、昨日とは別人のようにボールが打てるようになったことが驚きであり、また嬉しかった。ロビーを通過しながら、彼のおかげだと感謝しつつ、ミハルはポスターの中の早乙女に向かって深々と頭を下げた。

マンションに戻り、シャワーを浴びた。築15年の賃貸マンションは、最近シャワーの出が悪い。ミハルは悪態をつきながら、ボディーソープの泡を洗い流した。そのままシャワーの温度を上げて、白い背中を流れ落ちる湯の心地良さに目を閉じると、先ほどのことが思い出された。抱きしめられた感触が肌に甦る。いや、べつに彼はミハルを抱きしめたわけではないんだけど。グリップの握り方を教えるためにしたこととはいえ、不覚にもかなりドキめいてしまったことは事実だった。ナンバーワンホステスともあるう者が、自分よりうんと年下の坊やにクラリとするなんて。

「きつとどうかしてたのよ」

ミハルは独り言をつぶやいて、バスルームを出た。今日は金原と同伴だから、いつもより早く出なければならない。近頃オーブンしたマリーナの中にあるレストランでごちそうしてくれるらしいが、いくら美味しい料理を出されても、あの中年と二人では食欲ゼロだ。

白いミニ丈のワンピースにカシミアのコートを羽織った。衿元と袖口についたファーを取り外そうかと一瞬悩んだが、待ち合わせの相手を想像したら、どうでもよくなった。それでも一応客商売だから、クリスマスに金原からもらったシャネルの香水くらいはつけていこう。本当は、香水は好きではない。女性のくせにと思われるかもしれないが、これも自分のしている仕事に対する嫌悪の表れなの

だろうと、ミハルは思う。美しく着飾って、男性に気持ちよく酒を飲んでもらうのがミハルの仕事だ。けれども、それだけでは済まないことは、わかりすぎるくらいわかっている。

昨年の秋口あたりから、金原は執拗にミハルを誘う。なんだかんだと理由をつけては断っているが、今夜あたりは危険かもしれない。ホステスをしているからといっても、ミハルは決してお客と親密な間柄になったことはなかった。それだけが自分のプライドだ。ただ、嫌いな仕事が辞められないのは、金が必要だからだが、金が欲しいならばプライドなどかなぐり捨てて、金原のような男と積極的に交際する方が得なのかもしれない。

（そうそう、プライドとかなんとか言って、結局お客との関係を仕事と割り切れない。要は、お子様なのよ）

ミハルの耳元で、もう一人のミハルが意地悪く囁いた。

「でも、お金のために金原とそんなことをするなんて、ムリよ」

ミハルは小蠅を払うように両耳のあたりを激しくこすった。

（できるわよ。あなたもプロでしょう？　たいしたことじゃ、ないわ。目をきつく閉じて、代わりに足を開けば済むことでしょう？）

悪魔のミハルは、今日は饒舌のようだ。ミハルは自分の肌を金原の太い指先が這い回るヴィジョンを想像した。首筋から胸をかすめて脇腹におりてゆく醜く肥えた手のひら。その軌跡を追うように、分厚いタラコ唇が湿った感触でミハルをついばむ……

「うつ……」ミハルは急にえずいてしまい、目を白黒させた。冗談じゃない。絶対に耐えられない。今にも吐きそうだった。こんなふうに思っていることを知られたら、きっとオーナーはプロ意識が欠如していると言うだろうけど、はたしてそうなのだろうか？

（お客とは寝ないっていうけれど、じゃあ、あの坊やがお店に来たら？　彼に迫られても、客だからってことで断るの？）

「そ、それは……」

（彼とは寝るのに、金原はダメなの？　それは、まったく子供のわがままと一緒にじゃない？）

「そんなんじゃないわよ」

（同じことよ。ミハル、あなたは、お金が必要なんでしょう？）
クク……と笑いを残して、もうひとりのミハルが消えた。

エレベータで一階に降りると、ガラス張りのエントランス前で、呼んでおいたタクシーに乗り込んだ。行き先を告げ、シートに深く沈みこむと大きくため息をついた。

対向車のヘッドライトがちかりちかりと白い光を投げってくる。うざったい。ミハルは目を瞑ってみた。瞳を閉じると、光は目蓋の血管を透かして赤くフラッシュした。光の中に、早乙女の顔が浮かび上がった。まるで太陽のように眩しい笑顔。夜の世界に属する自分とは、まったく違う健康的な匂いに惹かたのかもしれない。

また対向車のライトがミハルの顔を掠めた。

明るい日光の下で笑う青年は、真つ赤なフラッシュを浴びた瞬間別の人物に変わった。

信じて！ オレはやってない！

白いシャツを血に染めて、青年が涙を流す。警察官がよつてたかつて彼をミハルから引き剥がしてゆく。分厚いガラス越しの対面。死んだようにやつれた目をしているのは…… あれは、あれは私の……。がくと体が前にのめった。ミハルはハッとして目を覚ました。タクシーが目的地に到着したようだった。なれない運動をしたせいだ、知らぬ間に居眠りをしていた。

「嫌な夢……」

ミハルはタクシーを降りて、大きく息を吸い込んだ。マリーナからの潮風が、ミハルの髪をなぶる。彼女は背筋を伸ばすと、レストランへ続く赤レンガの遊歩道を歩いていった。

遊歩道の両脇にはつつじの植え込みがあり、その中にキノコ型の照明が設置されている。20メートルほど先に、小ぢんまりとしたマリーナのレストランが見えた。秘密の隠れ家のような建物に入ると、もう金原は来ているとボーイが告げた。

ガラス張りのレストランは、湾岸の夜景が見渡せる隠れたデートスポットのようだった。窓際の席は、愛を語らう恋人たちで満席だ。ミハルは、窓際の席のひとつに金原の巨大な背中を見つけて、小さくため息をついた。自分と金原は、他人の目からどんなふうに見えるのだろうか。ふと、そんなことを考えてしまい、気持ちが沈みこんでゆく。

ミハルはバッグから手鏡を取り出してチェックした。丸い鏡の世界には、完璧に化粧をし、夜の匂いをまとわりつかせたホステスの「ミハル」が完成していた。ミハルは商売用の笑みを作ると、コロネ風に巻いた髪をゆらしながら金原のもとへ歩いて行った。

「こんばんは。遅くなってしまって、ごめんなさい。ゴルフの練習に夢中になってしまって、つい……」

しなをつくるようにして上目遣いでみやると、金原はデレツとした顔になった。

「そうかそうか。ミハルちゃんは熱心だね。コンペが楽しみだよ」「私事です。今日も、金原さんに教えてもらったとおりに、チャーシューメン！っていうリズムで一生懸命練習したんですよ」

ミハルがそう言って席に着くと、金原は目尻を下げてうんうんと頷いた。

「どうだい、うまくいったら？」

「ええ、そりゃあ、もうバツチリです」

これをきっかけに、金原は上機嫌でゴルフの講釈を始めた。ミハルはホッとした。ゴルフの話をさせておけば、苦痛な二人の時間も無難に過ぎてゆくだろう。ミハルはバターの風味豊かな白身魚料理をつつきながら、適当に相槌をうつてやりすごした。

食事が済みコーヒーが運ばれた頃になって、唐突に金原が言った。「そういえば、ミハルちゃんと『エレガント』のオーナーって、特別な関係なの？」

ミハルはコーヒークップを持つ手が震えてしまった。中身をこぼさないように、懸命にソーサーに戻す。

金原は、どのあたりまで知っているのだろうか……？　とにかく、滅多なことは言わない方がいい。

ミハルはナフキンで口をぬぐうふりをしながら、金原の出方を伺った。金原はさすがと音をたててコーヒーをすすると、ポケットから名刺を取り出し、ミハルの前にそれを押しやって言った。

「私は、ミハルちゃんと会って、どのくらいになるかなあ？」

ミハルは名刺を受け取りながら息を詰めた。金原の意図がつかめない。

「たぶん、ご指名を頂戴するようになって、一年くらいでしょうか？」

慎重に言葉を選びつつ名刺に目を落とす。そういえば、金原から名刺をもらうのは初めてだと、今さらながらに気付いた。

四角い紙片には、金色の文字で『ゴールドデンファイナンス』と社名が記されている。

代表取締役社長・金原権蔵。その実体は、Y組系に資金提供をしていると噂される、黒い金融業者。ミハルは心の中で名刺に唾を吐きかけた。ヤクザか暴力団か知らないが、どっちにしても似たようなものだ。ミハルにとって、そういった連中は嫌悪の対象であることに違いはない。内心をおくびにも出さず、ミハルは阿呆のように満面に笑みを浮かべて見せた。

「金原さんが私を指名してくださったときは、嬉しかったです。あのとき、私、ドンペリを初めて飲んだんですよ。おいしくって、もう感激でした」

金原は目を細めてミハルを見ていたが、ねちっこいしゃべり方で言った。

「私のところに来れば、ドンペリなんて飽きるほど飲めるよ」

「いやだ、金原さんったら。引き抜きですかあ？　金原さんがお店を出したなんて話、聞いていませんけど？」

脇の下が汗ばんでくる。うまくはぐらかせただろうか？

「ふふん、かわいいね。キミのそういうところがいいんだよ。オー

ナーに義理立てしているんだろうけれど……。けど、借金を申し出るなら、オーナーではなくて、私にしたほうがいい。なんとって、私は金を貸すのが仕事だ」

「な、なんの話でしょうか？」

ミハルは声がかすれてしまった。知っている。金原は、たぶん知っているのだ。

ミハルは懸命に笑顔を作った。

「ご存知だったんですね。恥ずかしい。実は私、とてもひどい浪費癖があつて、カード破産しちゃったんですよ。それでオーナーに、店で一生懸命働くことを条件に、お給料の前借りを……」

「それにしちゃあ、ちよいとヘビーな金額みたいじゃないか」

ミハルの顔から笑みが引いてゆく。金原はにやりと笑って言った。「オーナーも気にしている様子でね。先日うちに来られた際に、ミハルちゃんの相談に乗ってやって欲しいって頼まれているんだ」

ミハルは大きく目を見開いた。オーナーが、自分を金原に押し付けたんだと気付いた。

ミハルの脳裏に、銀縁メガネの奥の冷たい目が浮かんだ。あの腺病質の男は、金が友で、恋人で、命の次なのだ。数回に亘って給料の前借りを申し出たが、そのせいだけではないのだろう。ミハルは唇を噛んだ。あの店で一番稼いでいるのはミハルだが、前借りの金額は稼ぎとは釣り合わないほどに多額だ。それでも今まで解雇にならなかったのは、ミハルが金原という金ヅルをゲットしているからである。オーナーは常に何かを秤にかけている男だ。その彼が、金ヅル付きのミハルを見限ったということは、もう、これ以上貸せる金はないから、自分でなんとかしろということなのか？

ミハルは自分の顔から血の気が引いてゆくのがわかった。黙っている彼女に対して、金原は舌なめずりせんばかりに擦り寄った。

「ミハルちゃんさえその気なら、いつでも相談にのるけど？」

ミハルはなんとかこの場を誤魔化そうと努力したが、顔にはひきつったような笑みが浮かんだだけだった。

「あの、確かにお金が必要なんですけれど、でも何とかなりそうですから。ご心配には及びません」

金原はテーブル越しに太い腕をのばしてくると、ミハルの白い手をむぎゅつと握った。とっさに手を引っ込めようとしたが、無駄だった。

「お互い、子供じゃないんだから」と言いながら、金原はミハルの指先一本一本を撫で回した。気持ち悪くてたまらないが、ここは我慢だ。彼女の手のひらをするりと撫でた金原は、「おっ」と言っただけで急に目を見開いた。

「ミハルちゃん、ちよつとだけマメができてるよ。本当に、キチンと練習しているんだね。いやー、感心感心。はやくゴルフに行きたいでしょう？」

「ええ、まあ」ミハルは俯いて相槌を打った。

「そうだ、明日は仕事が休みだから、私がレッスンをしてやろうか。初心者のミハルちゃんが、私のためにこんなにも頑張っているのだから、是非応援してあげたいなあ」金原はうつとりと目を細めた。

ミハルはそれを聞いて目を剥く。

だれがあんたのため、なのよ！　そもそも、あんたがムチャなこと言っただけだろうが！

喉元まで出掛かった罵声を、理性によって懸命に封印すると、心にもないセリフがすらすらとこぼれ出た。

「うわあ、ホントですかあ？　コンペの前に一度どなたかに指導していただかなきゃって、そう思っていたから、是非お願いします」

金原は肉厚の唇をだらしなく半開きにした。

「じゃあ、明日はミハルちゃんに良く似合う、ゴルフウェアも買ってあげようね」

「そんな、お気使いなさらないでください。……でも、ミハル、すごく嬉しい」

営業スマイルを向けると、金原は見た目でもわかるほどに鼻息が荒くなった。

ああ、やりすぎたかもしれない。ミハルは心の中で、また後悔した。

女子ってどんなシチュエーションが「萌え」なのか、あれこれリサーチしてそれ

3

翌日、ミハルはいつもより少し早めにゴルフ練習場に向かった。早乙女に声をかけて、昨日の非礼を詫びなければ気が済まない。いやそれは口実で、本当はただ彼と話がしたいだけなのかもしれない。昨夜、金原は上機嫌だった。彼はしつこくミハルをくどいていたが、終いには酔っ払って寝てしまったので、オーナーがタクシーを呼んで自宅へ送り届けた。ミハルは身の危険を回避できて、ホッと胸を撫で下ろしたのだった。

ロビーで受付を済ませ、打席のあるフロアを歩きながら金原の姿を探したが、彼はまだ来ていないようだった。酷い二日酔いになってもなっていて、来られなくなればラッキーなのだが、それはないだろう。金原はわりと酒に強い男だ。

打席に着いてゴルフバッグを下ろしたときに、営業用の携帯が鳴った。メールの着信表示が出ている。金原からだった。金原は、奥さんの手前があるらしく、会社に寄るふりをしてから来るらしい。そんなに奥さんが怖いのなら、ホステスなんかに手を出さなければいいのに。男というのは、本当にどうしようもない生きものだと思う。ミハルはシルバーの携帯をパチンと閉じた。色気のないその携帯電話は、店から支給されているものだ。顧客とのやりとりには、必ずこちらの番号を教えるようにときつく言われている。オーナーは、そういう点はきちんとしている男だから、ホステスたちの間での評判は悪くない。ただ一点文句があるとするならば、毎月の通話料が個人負担ということくらいだろう。前にも言ったが、オーナーは金に細かいのだ。

ミハルは打席に備え付けられた椅子に座り、買って来た缶コーヒのプルトップを開けた。ひと口飲んで、白いスニーカーのひも

をきつく締める。エロジジイの金原に言われ、今日は初日と同じゴルフ用のミニスカートをはいてきた。ただし、初日と違うところは、中に黒の一部丈スパッツを着用している。

「これなら万が一ころんでも大丈夫よね」

ミハルは太腿をパンと叩いて立ち上がった。無意識に、打席の端から端までを目で追って、早乙女の姿を探してしまふ。今のところ、打席に彼の姿は見えない。ミハルは少々落胆しつつ練習を開始した。昨日のようにゴルフ雑誌を足元に置き、横峯プロのショットを真似て素振りをしてみた。

「ふん、悪くないんじゃない？」

自画自賛しながら、五十球ほど打ったところで、後方からの賑やかな声に気付き、ミハルは顔をそちらに向けた。

昨日のおばちゃん集団に囲まれて、早乙女が歩いて来た。どうやらこれからレッスンをするようだ。ぺちやくちやとやかましくしゃべるおばちゃん四、五人をひきつれて、早乙女はミハルの横を通り過ぎると、三つ前の打席で足を止めた。こちらにまったく気付かなかったことに、ちよつとがっかりした。

五人の中で一番体格がよくて、一番声の大きなおばちゃんが打席に立った。早乙女はこちらに背を向けて、おばちゃんと並んだ。仕草から、ボールと立ち位置の関係を説明しているようだった。ミハルの脳裏に、ふと昨日のことが甦った。早乙女は、おばちゃん相手にも、彼女にしたようなやり方で指導するのだろうか。ぼんやりしていると、目の前でパツとフラッシュが焚かれた。ミハルは我に返って前方を見た。おばちゃんたちが、かわるがわるに早乙女と並んで写真を撮っている。まさに、おばちゃんのアイドルだ。他の打席のお客が迷惑そうな顔で見つめているが、おばちゃんたちはまったく気にしていないようであった。カメラに向かって笑顔を作る彼を見ているうちに、なんだかむかついてきた。ミハルはなるべく彼らを見ないようにした。

打席に立ち、ドライバーをブンブンふりまわして、白いボールを

ひっぱたく。ボールはどれも会心の当たりで青空に吸い込まれた。黄色いポロシャツの背中が汗ばんできた頃、金原がやってきた。来なくてもいいのに。

「いやあ、ミハルちゃん。遅くなつてごめんね」

金原は赤ら顔に満面の笑みを浮かべてミハルの打席に入ってきた。酒臭い体臭が漂った。

「どれどれ、見てあげるから」と言つて、金原は打席に備え付けられた椅子に、どっかりと腰をおろした。よく見れば、彼は手ぶらだ。しかも、アイロンの効いたブランド物のシャツを着用し、よそゆきのようなスラックスに革靴を履いている。

「あの、金原さん、ゴルフバッグは？」

尋ねると、彼は曖昧に笑った。その顔を見て彼がゴルフを教える気なんて、さらさらないのでということにようやく気づき、ミハルは自分の愚かさを呪った。金原にしてみれば、いつもつれない態度のミハルが、同伴でなく外出をOKしてくれたのだから、当然デートのつもりでいるのだろう。下手をすると、真昼間からホテルに連れ込まれるかもしれない。

まずい。非常にまずい。出勤時間は夕方だから、まだ時間はたっぷりある。なんとかこの練習場で出来る限り時間を稼がなければならぬと思ったが、怒りに任せてさんざんゴルフクラブを振り回したので、もうへとへとだった。ミハルの戸惑いに気付いたのか、金原は媚びたような笑みを浮かべて立ち上がった。

「あ、あゝ、せっかく練習場に来たのだから、ミハルちゃんのスイングを見せてもらおうかなあ」

白々しいセリフを吐いて、金原はボールを打つよう促した。ミハルがショットすると、ボールは綺麗な放物線を描いて150ヤード地点に落ちた。

「ほお！　なんだなんだ、上手じゃないか！」

今のセリフは、心から褒めているようだった。褒められれば、相手が金原でも悪い気はしない。

「金原さんのアドバイスがよかったから」

ミハルは心にもないお世辞を言ってから、また後悔することになった。金原はにやりと笑って彼女の背後にやってきた。にわかに嫌な空気が漂う。

「もうちよつと、このへんをひねるといいよ」

そう言つて、彼は背後からいきなりミハルの腰をつかんだ。

「ミハルちゃんは、こう、下半身が回っちゃってるから、ときどきダフるでしょう？」

頷きつつチラリと肩越しに見やると、なにやら金原の息が荒い。

彼はミハルの腰を強く引き寄せた。

これはいったい、なんなのか？ セクハラか、指導してくれているのか、イマイチよくわからない。でも、早乙女との一件もあることから、早とちりしたら金原に失礼だろう。

「ダフらないためにはね、腰をこう安定させて……」

金原はミハルの腰をまさぐっている。これは絶対にセクハラだ！ そう思い始めたとき、酒臭い息がミハルの首筋に吹きかけられたかと思うと、太腿のうらに何かよからぬものが当たった気がした。

「ギャッ」ミハルは思わずつぶれた蛙のような声を出してしまった。周囲の視線が、一斉にこちらに向けられた。三つ前の打席を見ると、早乙女とばつちり目があってしまった。彼は驚いたように瞳を大きく見開いた。ミハルは一気に気が遠くなった。中年オヤジに背後から抱えられて、太腿にナニを押し付けられているところを見られるなんて！ ああ、消えてしまいたい……

蒼白な顔を伏せたとき、雷のような声が轟いた。

「あなた！ いったいここで、何をなさっているの？」

「う、うわああああ！」

金原が化け物でも見つけたように叫んだ。

三つ前の打席で、いちばん体格の良いおばちゃんが目を吊り上げていた。おばちゃんは体当たりで早乙女を押し退けると、どすどすと地響きをたてて突進してきた。

「今日は、お得意さんと視察を兼ねて新しいリゾートホテルに一泊するからって言っていたじゃないですか！」

「あ、いや、その」

金原はミハルの後ろに隠れるようにしてじわじわと後ずさった。

「マージャン大会を開催しなきゃならないとか、おっしゃってましたよね？」

金原の奥さんは、迫力満点だ。体格は熊だが、目つきは獲物を追いつめる猟犬のようだった。彼女はじろりとミハルを見た。

「あなた、どなた？」

ミハルはお伺いを立てるように背後を振り返った。金原は口が利けない様子で、ただ弱々しく首を横に振っている。

「あ、私は新しく入った事務員です。今度社長さんのコンペに出るんで、ちよつとだけゴルフを教えていただいていたんですよ」

こんなことでは、たぶんこの奥さんは誤魔化せないだろうと思った。奥さんは「事務員さんですか、ご苦労さまです」と丁寧に言った。旦那に対する口調とは違って、とても穏やかだったのが、かえって不気味だ。奥さんはミハルの背後で震えている金原の腕をむんずとつかむと、そのままひきずるように受付ロビーのある建物に消えた。彼女のあとを、おばちゃん連中がひと言も口をきかずに付いて行き、あたりは元の静けさを取り戻した。

まるで嵐が去っていったようだった。後ろを見ていたミハルは、ふうと大きく息をついて、目線を前方に戻した。

三つ前の打席で、早乙女も狐につままれたような顔をして突っ立っていた。その様子がなんだかおかしくて、ミハルはプツと吹きだした。彼女に気付いた早乙女は、外国人のように肩をすくめたかと思うと、にやりと笑った。彼はなんとなくそのままミハルの打席にやってきて、備え付けの椅子に座った。

「あの人たち、知り合い？」

早乙女が尋ねた。

「ええ、お店の常連さんなの」

ミハルはあえて隠さずに言った。さっき的一幕を見れば、金原とミハルの関係は、なんとなく想像がつくはずだ。変に誤魔化して、あらぬ誤解をされるよりは、自分が何者かということを明確にしておいたほうがいいと思ったのだ。

「よかつたら、来てちょうだい」

そう言つて、ミハルはヴィトンのミニポーチから名刺を取り出して早乙女に手渡した。彼は受け取つて一瞥すると、すぐにミハルの手に返してきた。

「受け取つてくれないの？」

軽いシヨックに囚われる。早乙女は屈託のない笑顔を向けた。

「ああ、名前だけわかればいいよ。……ミハルさんっていうんだ」

「ええ」ミハルは目を伏せた。やはり、彼のような健全な若者にとつては、水商売の女性など眼中にないのだろう。それでもどうにかして彼の気を惹きたいという衝動に駆られた。

「来てくれたら、サービスするわ。それほど高くないのよ、うちの店」

「いや行かないよ。オレ、酒ダメだから」

「そっか。残念ね」

ミハルはひどく落胆したが、彼に悟られぬように、ゴルフクラブを握り締めて打席に立った。酒が苦手ならば仕方がない。少しでもたしなむ人なら、『エレガント』という店がそこいらのキャバクラと違って、かなり格式のある店だとわかつただろうけど。

ミハルは気をとりなおして練習を再開した。早乙女は腰を上げる様子もなく、まったりと椅子に座っている。彼がミハルの飲みかけの缶コーヒ―を勝手に飲み干してしまったので、とうとうたまらずに声をかけた。

「あの、いつまでそこに？」

彼は立ち上がるとにこつと笑った。ミハルはにわかに緊張した。よく笑う男だと思った。

「あのおばさん、帰つてこないな」

「え？」

「いや、オレさ、今日一日あのおばさんのレッスンに付き合うことになってたんだよね」

午前中は練習場でレッスンし、午後は近くにある9ホールのショートコースを予約してあるのだと早乙女は言った。さすがに金持ちは違うなと思った。金原だけでなく、奥さんも趣味にとことん金を使うタイプなのかもしれない。

「なんか、修羅場だったから、きつとキャンセルしたんだろうな」
ミハルもつられて微笑んだ。奥さんの出現がなかったら、今頃はとんでもないことになっていたかもしれない。自分の身が無事だったことを神様に感謝しつつ、もう帰ろうかと道具を片付け始めたときだった。

「ねえ、お店って何時から？」

問われて、ミハルは自分が何かを期待しているのを意識した。けれども、すぐに思い直した。酒が苦手な人にわざわざ来てもらう義理もない。

「店は夜8時からだけど……」

「そう、じゃあ、これからオレとゴルフしない？」

「は？」

「レッスン空いちゃったし、ショートコースキャンセルするのも、もったいないし。ね、いいでしょ？」

ミハルは早乙女の整った顔を見上げた。

「決まりだね」

日に焼けた顔に、白い歯がこぼれた。ミハルは手袋をはめた左手で胸を押さえた。心臓が早鐘のように打っている。

これって、もしかして、デートですか？

ヴィッツの助手席に早乙女を乗せて、車で十分ほどのところにあるショートコースにやってきた。コースは9ホールのパブリックで、誰でも気軽に利用することができる。広々とした絨毯張りの受け付

けロビーでゴルフシューズに履き替えて待っていると、早乙女は白い半袖のポロシャツとゆるめのチノパンというラフな格好で更衣室から出てきた。

「ねえ、ゴルフやるのに、服装はそれでいいの？」

なんとなく気になって尋ねると、彼は自分の格好を見下ろした。

「動き易ければ、何でもいいんだよ。ただし、襟の無いシャツとジーンズはダメだけどね。他人が見て、不愉快にならない程度の格好なら、何でもいいんだ」

ミハルは、自分がなんだか難しく考えていたのだなと思った。

「じゃあ、女の子も、もつと自分らしいオシャレな格好をしてもいいのね？」

「当然！」

「でも……」と、彼は意地悪い笑みを浮かべて言った。「見掛け倒しは余計に恥ずかしいぜ」

このひと言で、ミハルの闘志が燃え上がった。やってやる。絶対に、上手くなってやる！

受付を済ませてからゴルフバッグをかついで外に出た。低い生垣の彼方に、鮮やかな緑の世界が広がっていた。コース内のあるところどころに配置されたバンカーの白砂がアクセントを添えている。青草の薫りの風が、彼女の頬を優しく撫でて吹き過ぎた。前を歩く早乙女の白いポロシャツに、春の陽射しが反射する。夜の世界に属する自分が、こんなにも明るく心地良い場所に居るのが、なんだか場違いなようであると同時に、その分、まどろんでいるような錯覚にとらわれた。

彼の広い背中を眩しげに見つめて、ミハルは新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んだ。

一番ホールは幅の広い平坦なコースだ。フェアウェイの中央に、大きな木が植わっており、それがコースの難易度を上げているようだった。早乙女は、手本を見せるように先にティーグラウンドに立

って打った。打球は高々と上がって、ピン方向へと消えた。流れるような美しいフォームに、ミハルはぼうっと見とれていた。

「ここは真っ直ぐだから、ミハルさんはあの木を狙うといいよ。使用するクラブ、ぼくはアイアンを使ったけれど、ミハルさんはドライバーで。そうそう、1wってやつね。ボールは左寄りに置いて」早乙女はレッスンプロらしくミハルに細かく指示した。ミハルはドライバーを持ってティーグラウンドに立ち、アドレスしてみた。練習場と違って、とても緊張する。

「大丈夫。練習だから、失敗してもいいんだよ。なんなら、チャーシューメンって、一緒に声かけてあげようか？」

クククと笑う早乙女に、ミハルは青筋を立てた。

「また、バカにして！ よく見てらっしゃい」

ミハルの第一打は、見事なまでのボテボテゴロだった。がつくりと肩を落とすミハルに、明るい声援が飛ぶ。

「いいよ、それで。前に進んでいれば上出来だ」

またバカにされたかと睨むように振り返ると、早乙女は温かな眼差しを向けていた。ミハルは柄にもなくドギマギした。なんだかエスコートされているような気分になってくるから不思議だ。あれこれと世話をやいてもらい、何をやっても褒めてもらうなんて、いたい、いつ以来なんだろう。

「私、来てよかった」

ミハルが素直に言って笑顔を向けると、彼はニツと歯を見せて、彼女のゴルフバッグを差し出した。

「じゃあ、元気出して行こうか」

「は？」

「練習ラウンドでは、自分のバッグは自分で運んでもらう。おばちゃん相手でも、これは一緒だから。けっこうキツイけど、がんばりましょうね」

うへ！ 前言撤回。プリンセス扱いじゃ、ないじゃん。まさに、飴と鞭か？

なんで細腕の自分が、こんな重たいバッグをかついで回らなきゃいけないのだろう。カートとか、あるだろうに。

その後、右に左にとあらぬ方向に球を転がしながら、緑の中を駆け回った。こんなに歩いたのは、本当に久しぶりだった。三番ホールを終えた頃には、ミハルはすでににくただった。それでも、疲労感が心地良いのは、爽やかな青空の下にいるせいかもしれない。「ちよつと、休憩しましょうか」

絶妙のタイミングで、早乙女が声をかけてくれた。彼は四番ホールの脇にあるベンチにミハルを座らせると、自分のゴルフバッグからコンビ二の袋を取り出した。

手渡されたのは、おにぎりとペットボトルのお茶だった。「本当は、こんなところで飲食しちゃいけないんだけど」と前置きして、自分も袋からおにぎりを取り出した。

「外国のパブリックゴルフ場は18ホールを通して回ることが多いんです。だからサンドイッチや飲み物を載せたカートが行き来していて、ラウンドしながら食べてもいいんですよ。日本はダメですけど」

「へえ、そうなんだ」

「ピクニックみたいで、いいでしょう？」

そう言われて、ミハルは前方を見渡した。ティーグラウンドの脇で、黄色いフリージアが可憐な花を咲かせている。形良く刈り込まれた灌木の茂みや、コースを囲む木々を見ると、心が和む。ミハルは目を空に向けた。ところどころに浮かぶ薄い綿雲の中でひばりが歌っている。幼い頃に、家族で花見に出かけたときのことを思い出させる、そんな空の色だった。ミハルたち一家が、一番幸せだったころのことだ。それは遙か遠くの出来事ではないが。清涼感のある沈黙に包まれて、時の経つのを忘れそうだった。ラウンド中だったことを思い出して隣を見やると、早乙女はベンチの背もたれに体を預けて、気持ち良さそうに目を閉じていた。長い睫毛が切れ長の目元に陰を作っている。若い滑らかな肌には、ニキビひとつ見

当たらない。

ミハルは、ふと形の良い彼の唇に、触れてみたい衝動に駆られた。そつと手を伸ばしたとき、なんの前触れもなく彼が目を開けた。自分に向かつて伸ばされたミハルの指先を怪訝そうに見ている。ミハルは慌てて手を引つ込めた。

「あの、今、蜂が飛んできたから……」

「ああ、ありがと。虫はいつばい見るよ。夏になるとね。バツタとか、すげえデカイの」

表情をくずしてにまつと笑うと、彼はとても幼い顔になった。ミハルは思わず目を伏せた。彼のひとつひとつの仕草や表情に、いちいち反応している自分を自覚すると、たまらなく苦しい。

「早乙女さんは、若いのにプロゴルファーだなんて、すごいですね」「え？」彼は面喰らったようにミハルを見た。

唐突だな、と思ったが、言わずにはいられない言葉が、ミハルの口から滑り出る。

「ゴルフって、なにかとお金がかかるでしょう？ 幼いうちからレッスンが受けられたってことは、きっと早乙女さんのおうちは裕福なんだなと……」

「まあ、貧乏ではないけれどね」

そつけない答えに、ミハルは無意味な質問をしたのだなと、後悔した。彼の全身を包み込んでいる、明るい太陽の匂いを嗅いだときから、自分とは住む世界が違うのだとわかつていたのに。

おにぎりを食べ終えて、ペットボトルのふたを閉めた。ピクニックごっこはおしまいだ。今日、偶然にも早乙女と一緒に居られたことだけで、満足しなければいけない。

「さてと」

立ち上がろうとしたとき、一瞬視界が暗くなった。

「あ……」

隣の早乙女に倒れ掛かるようにして、ミハルはもう一度ベンチに座り込んだ。目の前が歪んでいるような気がする。

「大丈夫？」

もたれかかった形のミハルを、早乙女が抱きかかえるようにして覗き込んだ。

「顔色、悪いね」

「大丈夫です。ちょっと、立ちくらみがただけなの」

きつと、慣れない練習で知らぬ間に疲れがたまっていたのだろう。睡眠不足もたたっているかもしれない。彼はミハルを抱えるようにして、涼しい木陰の芝生に連れて行った。

「後ろから、次の組が来ちゃったから、彼らが行くまで休ましましょう」

早乙女はゴルフバッグからスポーツタオルを取り出すと、ミハルの後頭部に当てた。そのまま彼女の頭を自分の膝に乗せた。ミハルはぼうつとしていたが、さすがに膝枕の状態には反応してしまった。

「あ、そんなしなくても、ホント、大丈夫だから」

慌てて起き上がろうとするのを、無理矢理押さえつけられてしまった。

「いいのいいの、これはサービスだから」

茶目つ気たつぷりの顔を下から見上げて、ミハルは一気に赤面するのがわかった。客とのたわむれで、逆はしょっちゅうあるけれど、自分がされたことなど一度もない。

「目、つぶるといいよ」

そう言つて、彼の大きな手のひらが、そつとミハルの視界を覆い隠した。ひんやりした感触に、彼女はうつとりと目を閉じた。すると、急に体の下で芝がちくちくするのが感じられた。視界を奪われると、その他の器官が目覚めるというが、まさにそんな感じだった。頬の下にある彼の体温が、タオルを通してでも伝わってくるようだ。発達した太腿の筋肉や、額に当てられた手のひらのしわ一本一本まで、まるで見ているように感じ取れる。額に当てられた手のひらが、ミハルの頭へと移動した。そのまま優しく撫でられて、ミハルの心臓が大きく打った。彼が自分を見下ろしているのが、閉じた目蓋の

うらからもよくわかる。自分は今、どんな顔をして横たわっているのだろう？ そんなことを考えると、とても休まるどころではない。今、自分は明らかに彼に欲情している、そう思った。髪を撫でられているだけで、体の奥が潤んでくるのがわかる。こんな気分になることが、とても恥ずかしく、そして虚しい。同じようなことをしていたからわかる。自分がそうだったように、たぶん、彼はミハルに膝枕をしても、なんとも思っていないのだ。今まで客に対してたわむれにしていたことが、こんなにも罪なことだったなんて、知らなかった。

爽やかな風に混じっている、彼の汗のにおいまで嗅ぎ分けられそうで、ミハルは深く息を吸いこんだ。

遠くから、ざわめきが流れてきた。かちやかちやとクラブが触れ合う音と、複数の足音。そして楽しげな笑い声。

「ナイスショット！」

掛け声のあとに、パチパチと拍手が起きるのを何度か聞いた後、辺りはまた静けさに包まれた。

ミハルはそろりと体を起こした。

「よくなった？」

聞かれて、ミハルは曖昧に微笑んだ。体中で彼を意識している、そんな自分の変化を悟られないように、さっと彼のそばを離れた。

気だるい体に鞭打って、残り5ホールを終えたときには、なんともいえぬ達成感と疲労感に包まれていた。日が傾き始め、花の咲く小道をゆく二人の影が長く伸びた。受け付けのある建物に向かって歩きながら、ミハルはどんどん気持ち沈んでゆくのを止められずにいた。真夜中過ぎに、シンデレラが小汚い娘に変わるように、日が沈めば自分は夜の世界の「ミハル」に戻る。自分があの練習場に通わなくなれば、もう早乙女との接点はない。ミハルは足が止まってしまった。この時間を引き延ばすには、どうすればいいのだろう？

「ミハルさん、元気ないね。疲れた？」

立ち止まって黙りこむミハルを気づかうように、彼がミハルの肩から重いゴルフバッグを取り上げた。

「あ、大丈夫よ。ちょっとくたびれたけど、楽しかった」

本当に、夢みたいに、楽しかったよ……

思いを込めて、ミハルは精一杯微笑んで見せた。彼は満足したようにうなずくと、ミハルに向かって右手を差し出した。

「お疲れさまでした。とても上達したと思いますよ」

早乙女は、レッスンプロの言い方で言った。なんだか、その言い方がよそゆきすぎて、とても嫌だったので、ミハルは差し出された手を握り返して、つい心にもないことを口にしていた。

「ねえ、これってレッスンでしょう？ 代金は、幾ら払えばいいのかしら？」

早乙女はミハルの手を握ったまま、じつとこちらを見下ろしていたが、そつと彼女の手を離して目を伏せた。明らかに傷ついたような表情を見て、ミハルの胸に罪悪感が込み上げる。彼は何も言わずに背を向けると、二つのバッグを背負い直して大股で歩き出した。長い足の歩幅に遅れまいと、ミハルは仕方なく小走りで追いかけた。帰りの車中、彼は終始無言だった。なんとなくふて腐れたように、大きな体をまるめて助手席に沈み込んでいる。ミハルも疲れていたので、そのまま無視しておくことにした。

もつすぐ練習場につくというところで、彼がおもむろに口を開いた。

「レッスン代金、もらうことにする」

ミハルは黙って頷いた。

「でも、金じゃなくて違うものがいい」

前方の信号が赤に変わり、ミハルはブレーキを踏み込んだ。

「メアド……。ミハルさんのメアドと電話番号で手をうつ」

「は？」何を要求されるのかとドキドキしていたミハルは、拍子抜けしてしまった。思わず失笑を漏らすと、彼もクス……と笑った。

ミハルは練習場の前で車を止めると、ポケットをさぐった。指先

が、店から支給されているシルバーの携帯をつかんだ。……が、取り出そうとしてやめた。ミハルはヴィトンのポーチからパールピンクの携帯を取り出すと、赤外線通信を操作した。

「ありがとう。あとで、メールするから」

彼は車を降りるとひらひらと手を振った。ミハルは頷くと、車を発進させた。夕陽をバックに微笑む彼に、胸が震えた。バックミラーに背の高い彼が遠ざかる。

「この携帯に替えてから、誰にもメアド、教えてないんだぞ」

一人になった車内で、ミハルはピンクの携帯を握りしめて、小さく呟いた。

いよいよのラブシーンあります。嫌いな方はスルーしてください。

4

マンションに帰ってシャワーを浴びると、ひと心地つく間もなくもう出なければいけない時間になっていた。ミハルは行きつけの美容室にヘアセットの予約を入れると、レザーのスプリングコートを羽織った。クリーニングしたてのドレスが入ったボストンバッグを手に、ミハルは部屋を出た。

いつものようにマンション前で待たせておいたタクシーに乗り、美容室の名前を告げた。

「運転手さん、ヘアセットは20分くらいで終わりますから、店の前で待っていてくださいね。いつもそうしてもらっているの」

ミハルは運転手に向かって後部座席から声をかけた。運転手は目深にかぶった帽子のつばを僅かに下げただけで車を出した。ときおり愛想のない運転手が居るが、彼もそのようだった。仮にも客商売なのだから、返事くらいすればいいのにと、心の中で運転手の背中に向かってアカンベーをしたとき、ふと違和感を覚えた。ミハルは後部シートから身を乗り出すようにして助手席を覗き、息を飲んだ。助手席に人が乗っている！ 肌着姿の男性で、眠っているようにガクリと首が肩に乗っていた。ミハルは恐怖に顔を引きつらせた。

「あ、あ、あう……」

震える唇から動物のような声が漏れてしまい、ハッとして口元に手をやったときには遅かった。運転手がバックミラーの中からミハルを睨んでいる、……ように見えた。縁の無い細長のサングラスをし、鼻と口を花粉症の人みたいにマスクで覆っているので、実際にはまったく顔がわからないのだが。それでもミハルは、気配で運転手の男が自分を見ているのがわかった。全身が凍りつき、口が利けなくなってしまった。運転手の男も黙ったままステアリングを握っ

ている。予約済みの美容院は、とつくに通り過ぎていた。

タクシーは、交通の流れに乗って、いつもの街並みの中を走り続ける。空調が効いているにもかかわらず、ミハルは体中にじっとりと汗を掻いていた。自分は、誘拐されたのだろうか？

『誘拐』という単語を思い浮かべた途端に、恐怖がピークに達したのかもしれない。ミハルは後部座席のドアに飛びついた。

「いやあ！ 降ろして！」

がちゃがちゃと激しくドアの取っ手を引くが、運転席でロックされていて開かない。ミハルはパニックに陥った。

「あんた誰よ！ 私を降ろしなさい！」

喚きながら運転席の椅子を蹴りつけると、その反動で助手席に座らされている肌着姿の男性が動いた。ミハルは片足を上げたまま固まった。

男性は人形のようにずるずると運転席側に体を倒してくると、がくりと頭をのけ反らせた。青白い顔が見えて、ミハルは悲鳴を上げた。

「きゃああああ！」

死んでいるのだろうか？ わからない。

車の揺れに合わせて、のけぞった首がぐらぐらと揺れているが、いつこうに目を醒ます様子がない。ミハルは吐き気がしてきた。

運転手が手を伸ばして、のけ反った男性の頭を助手席のシートに戻した。

「騒ぐと、この運転手みたいに、痛い目にあうぜ」

初めて運転席の男が口を利いた。この言葉で、ミハルはようやく事態を察した。肌着姿の男性は、このタクシーのドライバー。そして、今運転している男が彼の服と車を奪った犯人なのだ、と。ミハルがポケットの携帯に手を伸ばしたとき、運転手は車を路肩に止めて振り向いた。

「余計なこと、しないほうがいい」

低い声で言われ、ミハルはポケットから両手を出した。男の手に

スタンガンを認めて、ミハルは両手をさらに頭の位置まで上げた。

「そう、それでいい」

「ひどいこと、しないで……」

蚊の鳴くような声で言うと、男はふつと笑ったようだった。彼女は混乱する頭で懸命に言葉を選んだ。

「バッグを、置いてゆきます。中にはアクセサリーと現金が入ってるわ。だから、お願い。ここで助手席の人と私を降ろして」

今度は、ふふ……と小さな笑い声が聞こえた。

「金原にはもつたいない女だな」

「え……？」

金原？ 何故ここに金原の名前が出てくるのだ？

「あんたには直接関係ないんだけどね、金原に連絡をとりたい」

「なんで、そんなこと……？」

ミハルが涙目で問いかけると、男はスタンガンのスイッチを入れた。闇の中で、ジジジと小さな音がして、ミハルは息を飲んだ。

「質問はするな。お前が金原の女だってことはわかってる。あいつの携帯に、直接かけるんだ」

ミハルは目を大きく見開いた。なんてことだ。金原の愛人だと誤解されているなんて。

「そんな、違います。私は……」

男は運転席から後部シートへ身を乗り出してきた。
「早くしろ」

スタンガンの持ち手の部分で肩先を小突かれて、ミハルはポケットからシルバーの携帯を取り出した。震える指先で、金原の番号に発信する。着信音がして、金原の応答する声が聞こえた。

ミハルちゃん？ どうしたの？

今ここで助けを請えば、なんとかなるのだろうか？

迷っているうちに、のど元にスタンガンが押し付けられた。男の指先は、いつでもスイッチが入れられるようにオンオフボタンにかかっている。ミハルはのどの奥で悲鳴を噛み殺した。

「あいさつして、代われ」

低い声で指示され、ミハルは素直に従った。

「金原さん、こ、こんばんは。ちよつと電話代わります」

力の入らない腕を伸ばし、携帯を渡した途端に手首をつかまれた。

「あ！」

そのまま引き寄せられ、運転席のシートに額をぶつけたとき、脇腹に衝撃が走った。焼けるような痛みを感じながら、ミハルの意識はフェードアウトした。

目覚めたとき、ミハルは勤め先のクラブ『エレガント』の奥にある、個室のソファに寝かされていた。

「ああ、ミハルちゃん、よかった……」

女性の声に首を巡らせると、間接照明の中にほっそりとしたシルエットが浮かび上がっていた。ミハルはゆっくりと身を起こして、女性を呼んだ。

「ママ？」

『エレガント』のママが心配そうにミハルの顔を覗き込んだ。

「どこか、痛いところはない？」

そう尋ねられて、すぐに先ほどのショッキングな事件を思い出し、ミハルはママにすがりついた。

「あ、あたし、変な男に……！」

恐怖が甦ってきて、ミハルは言葉を詰まらせた。ママはミハルの体をしっかりと抱きしめて、幼い子供にするように、その背中を優しく撫でた。

「ミハルちゃん、可哀想に。怖い目にあったのね」

ミハルはママの温かい体温を感じて、急激な安堵感に涙が込み上げてきた。嗚咽を漏らしながら、それでも気丈に、ことの顛末を彼女に話した。

「警察に言わなくちゃ。あたし、誘拐されたんですよ。あのタクシ
ーの、本物の運転手さんだって、どうなっていたのか……。ひよっ

として、死んでいたかもしれない」

ソファから立ち上がったミハルを、ママが引き止めた。

「ミハルちゃん、座って」

「でも、早くしないと。あいつを捕まえてもらわなきゃ……！」

「ミハルちゃん！」

聞いたこともないような鋭い声で、ママはミハルを叱りつけた。

ミハルはビクンと肩を震わせて店のママを見下ろした。今、まさに目の焦点が合った、そんな感じがした。見れば、ママの顔は蒼白で、しきりと個室のドアを気にしている。

「ママ……？」

ママはミハルの手を握り締めると、彼女の唇に、人差し指を押し付けた。

静かにして。

彼女の仕草に、ミハルは背筋がぞくりとした。さっきの事件が、まだ続いているのだ。漠然と、そんな空気を感じ取って、ミハルは戦慄した。壁にかかったアンティークな時計に目をやると、まだ開店の時間には早い。けれども、静まり返った室内に、微かな人声がさざ波のように漏れ聞こえてくる。

「店に誰がいるのですか？」

「オーナーと、それから……」ママは口ごもった。

「もしかして、金原さん？」

ママは困ったような目を見ると、口を開いた。

「金原さんは、見てないわ。今店に居るのは、柄の悪い男たちよ。

たぶんあれはヤクザか何かじゃないかしら」

ミハルは大きく目を見開いた。いったい、何があったのだろうか？

「じゃあ、わたしを誘拐しようとしたのは、もしかしてそのヤクザ？」

「さあ、わからないわ」

そう言ってママは目を伏せ、ソファに深く腰掛けた。ミハルはママの隣に座ると尋ねた。

「ママ、私はいったいどうしてここに……？」

ミハルの手を握ったまま、ママは言った。

「一時間ほど前のことよ。男の声で店に電話が掛かってきて、店の前にあなたが居るから引き取れって」

出してみると、ミハルが店の壁にもたれるようにして気を失っていたという。衣服に乱れはなく、バッグやアクセサリーもそのままだったことから、とりあえず本人から事情を聞こうと店に運び込んだらしい。いったい、どうなっているのだろうか？

「あなたを見つけてから、いくらも経たないうちに、彼らが店に乗り込んできたのよ」

ミハルは個室のドアをじっと見た。さっきの二セ運転手も、あのドアの向こうに居るのだろうか。店のほうで大きな声がしたかと思うと、何かが割れたようだった。ミハルとママは抱き合いながら、不安そうに耳を澄ませた。どやどやと足音が響き、やがて店の中から人の気配が消えたところには、二人とも生きた心地がしなかった。

二人が個室を出て接客フロアに行くと、フロアの真ん中に割れた花瓶のかけらが散乱しており、テーブルや椅子も乱れていた。オーナーの姿を探すと、彼はカウンターの中で腰を抜かして震えていた。インテリ風の銀縁メガネはどこかにいつてしまったらしく、いつもきちんと撫で付けられている髪も乱れ放題だった。

「オーナー、大丈夫ですか？」

ママとミハルが助け起こすと、彼は涙目で毒づいた。

「ちくしょう！」

心配そうな顔の女性二人に向かって、オーナーは「あっちへ行け」と言わんばかりに手をひらひらさせて立ち上がった。

「いったい、何があったのですか？」

ママが尋ねたが、オーナーはそれには答えず、フロアの中央を指差して喚いた。

「さっさと片付けろ。開店の時間までに元通りにしておけ！」

彼はヒステリックに怒鳴ると、店の奥にある事務所のドアに消え

た。ママはミハルに向き直ると済まなそうに言った。

「ミハルちゃん、悪いんだけど他の娘たちが来る前に片付けておいてちょうだい」

そういうと、ママはオーナーの後を追うように店の奥に歩いて行った。彼女は途中で引き返してくると声のトーンを落として囁いた。「ミハルちゃんの事件のことと、今しがたの事は、しばらく他のホステスにも……それから、警察にも言わないでほしいの。みなの中に動揺が広がるといけないから」

ママの言葉に、ミハルは渋々頷いた。

「オーナーから何か聞き出せたら、真っ先に報告する」そう約束して、ママは事務所の中に入って行った。

だたっ広いフロアに、ミハルはひとり取り残されて突っ立っていた。彼女は虚ろな目で床に散乱した陶器のかけらを見下ろした。

何が起こっているのかわからないけれど、今日ミハルを誘拐しようとした男は、彼女の自宅も勤め先も、何もかも知っていたのだ。知らぬ間に後をつけられていたのだろうか？

黒い水のような冷気がひたひたと足元から上がってくる気がして、ミハルは自分の両腕で自身の体を抱きしめた。スタンガンを押しかけられた感触が、がくりとのけ反った男性の顔が、脇腹に走った痛みが、記憶が、ミハルの平常心をじよじよに奪っていった。ここには居られない。そんな切羽詰った思いが、奔流のように押し寄せる。

ミハルは奥の個室からレザーのコートとボストンバッグを持ち出すと、店の裏口に回った。グレーの鉄扉を押し開けると、ひんやりとした夜気が肌を刺した。路地から路地に伝い歩いて、人通りの多い繁華街に出たとたん、目の前をタクシーが通過してギョツとした。ミハルはふらふらと自宅方面へ足を向けたが、マンション前で拉致されたことを思い出すと、その場で足がすくんでしまった。シャッターの下りた銀行の角に立ち、彼女はしきりにポケットをさぐったが、常連さんの名前を連ねたシルバーの携帯は、どこかにいってしまったようだった。

ふと、ミハルの頭に早乙女の顔が浮かんだ。バッグの中からヴィ
トンのポーチを引っ張り出すと、パールピンクの携帯を握り締めた。
登録したばかりのアドレス帳を開き、震えながら通話ボタンを押
した。着信音のあと、張りのある若々しい声が流れ出た。

ミハルさん？　こんばんは。さつきはどうも！

「あ……」

彼の明るい声に、ミハルの緊張が一気に解けた。涙が溢れ出して、
うまく息がつかない。

ミハルさん？

鼻をすすりながら、ミハルは必死で声を出した。

「お願い。お願いです。……迎えに来て」

> i 3 0 3 4 3 — 3 8 8 8 <

ミハルは駅前にあるコンビニの店内で、雑誌を立ち読みするふり
をしながら周囲に視線を配っていた。人がたくさん居るところのほ
うが安心だと思ったのだが、入店してくる男性客全部が怪しく見え
て、その度に胃の辺りがきゅうつと縮まる思いがした。ミハルは暗
いガラスの向こうに早乙女の姿が見えないかと、何度も手元の雑誌
から顔を上げた。

昼間、あんなに好い天気だったのに、ガラスにぼつぼつと水滴が
つきはじめた。道行く人々が足を早め、家路を急ぐ。コンビニに傘
を求めて来店する客が増え始めた頃、人混みをぬうようにして早乙
女が走ってくるのが見えた。彼は傘を持っておらず、フードつきジ
ヤケットのフードを目深にかぶっていた。ミハルは傘を二本手にと
って、コンビニのレジに並んだ。

「お待たせ」

早乙女はコンビニに入ってくると、かぶっていたフードを背中に
跳ね除けた。水滴が飛んで、ミハルの鼻の頭にかかった。彼はゴメ

ンゴメンと笑って、ミハルの鼻先を指でつるりと撫でた。ミハルはほうつと吐息を漏らした。彼の顔を見たせいだろうか。膝の力が抜けそうになってよろけた。購入した傘を杖のようにして体をささえると、早乙女が荷物を持ってくれた。

「じゃ、行こうか」

早乙女に促されてコンビニを出ると、彼はどこへ向かうとも言わずにすたすたと雨の中を歩き出した。ミハルは彼の背中を見失わないように、息をきらしてついて行った。

彼は駅ビルの一階にあるファミレスの前で立ち止まると、にこつと笑って言った。

「オレ、腹へっちゃってさ。メシ食ってもいい？」

ミハルはぼかんと口を開けたが、なんだか急に可笑しくなった。クツクツと笑いながら、

「どうぞ、召し上がれ。私がおこるわ」

と申し出ると、彼は嬉しそうに頷いた。

「んじゃ、肉にしようかな」

店の奥にある二人掛けの席に着くと、ミハルはぐるりと店内を見渡した。さっきの男がどこかで見ていたらと思うと、どこにいても落ち着かなかった。早乙女が、メニューの陰から時折こちらの様子をじっと見ているのがわかったが、ミハルは先ほどのことは彼に言うまいと思っていた。いったい何がおこっているのかわからない以上、彼を巻き込むつもりは毛頭ないのだ。ただ、とにかく一人でいることが不安だっただけなのだ。突然電話したにもかかわらず、早乙女は呼び出しの理由を尋ねようとしなかったので、ミハルはそのことをありがたかった。

彼女がコーヒーとサンドイッチを摘まんでいる間に、早乙女はもくもくと料理をたிரらげた。ポークソテーに大盛りライスがあつという間に皿から消える。彼は店員を呼び止めると、さらにスパゲティとサラダを追加注文した。

「あ、ちよつと食いすぎだと思う？」

ミハルと目が合うと、上目遣いに事後承諾を求める顔がなんとも可愛かった。ミハルは育ち盛りの子供を持つ母親の気分で、彼の様子を眺めた。異常な体験のあとで、さっきまで継続して昂ぶっていた精神が、今、ようやく落ち着いてきたのを感じていた。彼の発する温かいオーラのようなものが、ミハルの心をリラックスさせてくれるのかもしれない。

ミハルはゴルフの話題をふってみた。彼はいろいろなアドバイスを交えて話をしてくれるが、金原のように一方的に講釈をしたりはせず、自分の体験や海外に行ったことなどを面白おかしく話すのだった。

テーブルの食器がさげられて、汗をかいだコップと空のコーヒークップが残された。二人は席を立ててファミレスを出た。あいかわらず雨は降っていて、ミハルを心細い気持ちにさせる。彼女は目の前を通り過ぎる通行人一人ひとりに視線をさまよわせた。どこかにあの男がまだ居るような気がして、怖い。

「さて、どうしようか？」

尋ねられて、ミハルは黙って首を横に振った。あの男が居るかもしれないと思うと、自宅には帰りたくなかった。かといって、行くあてもない。身を任せるつもりなら、一晩くらい泊めてくれそうなボーイフレンドはたくさん居る。でも、彼らの連絡先は、シルバーの携帯電話と共にわからなくなってしまった。ここ数年のミハルは、男性に限らず、誰とでも程度の浅いつきあいだった。

どこに行くのか決めないままに、早乙女は大腿で歩き出した。ミハルは彼の背中に声をかけた。

「ねえ、今どきの若者が行くようなところに行ってみたいんだけど？」

すると早乙女は曖昧に笑った。

「ゴメン。オレ、あんまし遊んでないんだよね」

数年間海外で暮らしており、日本に帰国してまだ日が浅いのだと彼は言った。ミハルは、あらためて彼と自分の間にある壁のような

ものを意識した。ファミレスで聞いた話と合わせると、多分彼はゴルフのために海外に行っていたのだろう。その分野に疎いミハルはよくわからないが、ひよつとしたら早乙女は物凄いお坊ちゃんなのかもしれない。いずれにしても、庶民ではない。そう考えると、ますます距離を感じる。

「ミハルさん、なんか、困ったことでもあるの？」

早乙女の声に、ミハルは思考を引き戻された。

「……困ってないよ。どうして？」

「いや、べつに……」

早乙女は何か言いたげだったが、言葉を飲み込んでしまった。それでいい。呼び出しておいて、ずいぶん勝手だとは思うが、なんの苦勞もない彼を、わざわざ煩わせるつもりは一切ないのだから。

会話が途切れ、傘に当たる雨粒の音がやけに大きく聞こえた。自分のせいで、すっかり白けてしまった。なんとなく沈みがちの空気を盛り上げるには、どうすればいいのだろう。

ミハルは自分の傘をたたむと彼の傘に入って腕をからめた。男性と腕を組むことなんて、よくやることだ。これで大抵は盛り上がるのだ。そう思って顔を上げると、早乙女は驚いたような表情でミハルを見下ろしていた。こんな反応をされたのは初めてだったので、ミハルはどうしていいかわからなくなってしまった。

「あ、せっかくだから、デートっぽいほうが、いいかなって。男の人って、こういうの、好きでしょう？」

思わず営業スマイルを向けると、早乙女の表情が硬くなった。このパターンも、初めてだったので、ミハルは戸惑った。

「いやだった？」

媚びるように見上げると、早乙女はぼそりと言った。

「いやではないけど」と、一旦言葉を切って、彼は続けた。「……ひよつとして、てゆうか、やっぱりそういうことだったの？」

「そういうこと？」

「いや、いいんだ。皆まで言うな。任せておけ」

早乙女は一人納得したようにしきりと頷いている。ミハルは首をかしげて、絡めていた腕を解いた。任せておけとは、どういうことだろう？ 立ち止まったミハルの髪を、肩を、春の雨が濡らしてゆく。繁華街の人波が、割れるようにして彼らの横を流れた。

早乙女は通り過ぎる人波に目をやってから、何かを思案するようにしばらく黙って俯いていたが、ふいに彼女の肩を乱暴に引き寄せて歩き出した。ヒールを履いた足が水溜りにつつこんでしまい、転びそうになる。

「あの、ちよつと、早乙女……くん？」

見上げると、彼は険しい顔をしていた。ミハルはなんだか怖くなってきた。

「ねえ、どこに行くの？」

ほとんど彼にぶらさがるようにして尋ねると、早乙女は険しい表情を引つ込めた。

「うーん、そうだな。こういう場合は、やっぱりきちんとそういうところを見せ付けておかないとね」

「そういうところって？」

「いいからいいから。ミハルさんは美人のホステスさんだもんね。だから、大変なのは、よくわかるよ」

早乙女はミハルの肩を抱いたまま薄く笑った。

「なんか、ちつとワクワクするな」と言つて、彼の目が不敵に輝いた。ミハルはわけがわからず、流されるままについてゆく。

二人は駅の高架下を通つて、人通りの少ない裏通りに出た。街路灯がまばらで、闇が濃く感じられた。この街に来てもうすぐ二年になるが、こんな場所は初めてだった。そのまま高架の線路に沿って歩いてゆくと、猥雑な空気が漂う歓楽街に出た。『エレガント』よりもワンランク、いやツーランク以上も格下の店ばかりで、ミハルは思わず眉根を寄せた。同じ店の娘は別にして、ミハルには同業者の友だちは居ない。さっき、早乙女は『ホステス』という言葉を強調した。勉強熱心でないミハルは、他の店のことを良く知らなかつ

た。知りたくもなかった。だが、ホステスという一括りで見られたとき、そのイメージにあるのはきつとこういう場所の、こんな店に居る女性のことなんだ、とぼんやりと認識した。

飲食店が途絶えると、ホテル街のネオンが目を惹いた。目的地は薄々わかつていたし、彼とならいいと思っていた。けれど、恋人のように肩を抱かれ、吐息がかかるほど近くに居るのに、昼間のようなドキドキ感が湧いてこない。きっと、早乙女のミハルに対する扱いが、妙にべたべたしているせいかもしれない。それは、ミハルのことを、ホステスとして扱う男性全般と同じだと感じた。やっぱり自分のような女は、こういう扱いがお似合いなのかもしれない。ミハルは心の中でため息をつく、人形のように従順に彼について行った。

ホテルの部屋に入ると、早乙女はミハルの濡れたコートをそつと脱がせてくれた。男はみんなそうだ。脱がせるときは、ひどく丁寧に扱う。ミハルはあからさまに嘆息してしまった。彼はコートを彼女の背後に放り投げた。投げた先にキングサイズのベッドを見て、ミハルは思わず息をつめた。少女の頃に夢に見ていたような優しくて美しい彼と、甘いラブシーンが実現しそうなのに、なんだか空気が乾いているような気がする。

「ミハルさん、座って」

低い声で促されて、ミハルはベッドに腰掛けた。シーツの冷たい感触に、あらぬ妄想が頭の中をぐるぐるした。このまま性急に押し倒されてしまうのだろうか。それとも……

早乙女の顔を直視できずに下を向いていると、彼が近づいてくる気配がした。ガタンと音がしたので、ミハルは顔を上げた。

「え？」

早乙女は濡れたジャケットを着たままで、手近にあったドレッサーの椅子を引き寄せると、背もたれを前にしてまたぐように座っていた。そのままじっとミハルの顔を見つめていたかと思うと、静かに

言った。

「で、誰におっかけられてんの？」

「え？」

ミハルは目をしばたいた。早乙女は怒ったような顔をした。

「誰かに嫌がらせされてるんでしょ？ ミハルさん、すごく不安そうにきよるきよるしていたぜ。やつぱ、ストーカー？ それとも、痴漢にあつたとか？」

ミハルはようやく彼の態度に合点がいった。早乙女はミハルがストーカーに狙われているのだと勘違いしたのだ。それで、わざとべたべたとくつついて、恋人のような態度をしたのだろう。いきなり泣きながら「迎えに来て」と電話をかけ、周囲を気にしてそわそわしていれば、誰だってそう思うかもしれない。

「オレたちのこと、そいつちゃんと見てたかなあ？ オレ、ミハルさんの役に立つてる？」

自分の発案した『恋人大作戦』に満足したように、早乙女は無邪気に笑って白い歯を見せた。ミハルは嬉しいのと同時に、彼に対する愛しさが込み上げてきた。先ほどの事件が本当に恐ろしかっただけに、たとえ勘違いでも、自分を護ってくれようとしている早乙女が、本物の王子様のように見えた。彼は馬に乗っているみたいに、椅子ごとかたかたと移動して、部屋にそなえ付けてあるテレビのスイッチを入れた。

「ここで二、三時間過ごしたら、きっとそのストーカーもあきらめるんじゃない？ もし、また後をつけられるようだったら、とつかまえて警察に突き出してやるからさ」

そう言って、せわしなくリモコンを操作した後で、お笑い番組に固定した。途端に、ラブホテルの部屋がお茶の間になってしまったようだった。若手お笑い芸人の登場に、早乙女は声を上げて笑った。「そうか、ホテルに入るのも、そういう意図があつたからなのね」

小声で呟いた声は、彼には聞こえなかったみたいだった。ミハルは溜息をついた。健康な男女がひとつところに居るといふのに、彼

は何とも思わないのだろうか。ナンバーワンホステスの、いや、女性としてのプライドが、音をたてて崩れ去った。

ミハルはヒールを脱ぎ捨てると、所在無げにベッドの上で膝を抱えて丸くなった。勘違いしていた自分が恥ずかしい。思えば早乙女に関しては、全てが勘違いだったなと気付く。メアドを求められたのも、たぶんまたレッスンを予約して欲しいという、彼流のセールスなのかもしれない。期待した自分が惨めに思えてきて、ミハルは抱えた膝頭に赤くなった顔を埋めた。

その体勢のままではばらく悶々していると、肩を大きく揺さぶられた。

「ミハルさん、大丈夫？ 眠いの？」

心配顔で覗き込まれてどきりとした。つけっぱなしのテレビから爆笑が聞こえる。どうせ二時間たったらここを出るのだ。それならば寝てしまったほうがいいような気がする。昼間ゴルフをしたので、幸いにも体は疲労を訴えていた。

「眠くなった。寝る。悪いけど、テレビを消してくださいかしら」

意地悪く言うと、早乙女は困ったような顔になった。ミハルはため息をついた。

「そんなにテレビが見たいなら、べつにかまわないですけど」

「いや、そうじゃなくて」

早乙女は口ごもると、あきらめたように言った。

「……その、テレビはオレの、心のブレーキだからさあ」

なあんだ。ミハルは心の中で安堵の息をついた。

興味がないわけじゃ、なかったんだ……。

ミハルはベッドを降りて、早乙女の脇をすりぬけると、テレビのスイッチを切った。室内が急に静かになって、間接照明の中に、白いベッドがひときわ存在感を増したように感じた。

沈黙に包まれた部屋で、ミハルは早乙女を振り返った。彼はミハルに背を向けた状態で、ベッドのそばに佇んでいる。ミハルはゆっ

くりと彼に近づいて、濡れたジャケットを脱がせた。そのままぱさりと床に投げて、早乙女を背中から抱いた。頬をすり寄せると、しなやかな背中中の筋肉が、程よい堅さでミハルの頬を押し戻す。

「消したね、テレビ。……ブレーキ、はずれちゃったけど、いいの？」

彼は首だけをひねって背後のミハルを見た。釣り上がり気味の瞳がわずかに潤んで照明の光を閉じ込めている。とても綺麗だと思った。

YESの意味をこめて、ミハルは彼の体に回した両腕に力を込めた。早乙女は、自分の体に回されたミハルの両手を解くと、彼女に向き直った。漆黒の瞳にミハルの顔が映る。

私の瞳にも、あなたが映っているかな……

早乙女は再び彼女の両手を握ると、まるで宝物を扱うようにその白い指先に、そっと口づけた。ミハルの心拍数が、跳ね上がる。こんなふうになんかうやうやしく口づけられたのは初めてだ。まるで本当にお姫様になってしまったような錯覚に陥って、ミハルは眩暈がしてきた。

彼はまさにお姫様抱っこで軽々とミハルを抱え上げると、そっとベッドに横たえた。ミハルは身を硬くする。

早乙女は、着ていたＴシャツを脱いで、上半身裸になると、ベッドに乗り上げてきた。ベッドサイドの灯りが、引き締まったボディに、美しい陰影をつけている。滑らかな筋肉の乗った胸に、さわつてみたいな、と思う。ミハルは両腕を広げて、倒れこんでくる彼を抱きしめた。

濃密な夜の中で、二人は生まれたままの姿になって抱き合った。

「ミハルさん、綺麗だ……」

彼はミハルの肌に手のひらを滑らせながら囁く。言葉で刺激されることって、あるのだろうか？ ミハルは彼に軽く触れられているだけで、体中が熱くなるのを感じた。こんなのは、とてもはしたな

いこのように思えて、ぎゅっと目を閉じると、閉じた目蓋に軽くキスをされた。目蓋が、熱い……

彼が、ミハルの額に、鼻先にキスを落としながらも、なかなか唇に触れてくれないのを、もどかしく思う。自分から求めてしまいそうになったとき、早乙女が耳元で囁いた。

「唇にキスしていいのは、恋人だけなんだって」

「え……？」

「初恋の相手に、そう言われた」

彼はクス……といたずらっぽく笑って、付け加えた。「相手は保育所の保母さんだったんだけどね」

ミハルもふつと笑って尋ねた。

「で、玉砕した？」

早乙女は満面の笑みを浮かべると、ミハルの唇にチュツとついばむような口付けをしてから言った。

「じゃあ、恋人にしてやるよ、って言ってやった。もちろん、しっかりと唇も奪ったさ」

「ずいぶん、おませで高飛車な子供ね」

「まあね」と頷くと、早乙女は腕立ての要領で上体を起こして、仰向いたミハルの顔を、真上からじつと見おろした。

「だから、ミハルさんも、恋人にしてやる」

ミハルは大きく目を見開いた。こんなにあっけらかんと、しかも自信たっぷりに告白されたことはない。ミハルは呆れてしまった。

「私に、彼氏がいたら、どうするの？」

「ぜったいに、居・な・い」

そこも自信たっぷりで、わざわざ彼は区切るようにして断言する。ミハルはなんだか悔しかった。凶星なのが、また腹立たしい。

「なんでわかる？」

「だって、居たらずettたいにオレを誘ったりしない。そういう人だと思ったから」

あ……。まるで仔猫を見るように優しい目で見下ろされて、ミハ

ルは自分がひどく赤面しているのを意識した。それでも、なんとか反撃したくて言葉を継いだ。

「私は、あなたより年上よ。しかも、ホステスなんて仕事、してるのよ？ それでも……」

続きの言葉は、唇で塞がれてしまい、ミハルは大きく胸を喘がせた。性急でいて、それでも精一杯自分を抑えているのだといわんばかりの、長く深いキスに溺れそうになる。情熱的な口づけに翻弄されて、息がうまくつげない。どうして早乙女相手だと、こんなに勝手が違うのだろうと、ちょっと自分が情けなくなってくる。彼はようやく唇を離すと、満足気に目を細めて言った。

「ミハルさん、かわいい。オレのものだよ」

早乙女はミハルの胸をさわりながら、ぺろりと乳首を舐めた。ミハルは思わず体をビクンと震わせた。ここも、ここも、と言いながら、彼はミハルの体中に口づける。彼が触れたところから、体全体にぞくぞくするものが広がってゆくようだった。どうしようもなく気持ちがいい。

胸から腹に降りてきた手が、ミハルの太腿の間に滑り込む。長くしなやかな指先に秘密の場所を愛撫されて、自然と膝がゆるんでしまう。潤った部分を刺激されて、思わず腰を揺らめかせると、熱く火照った体を開くように、彼がミハルの内部に入ってきた。

「あ、ああ……」

ミハルは目を閉じてのけ反った。彼女の背中をしっかりと抱いて、彼は奥まで腰を進めた。

熱い……

体の芯に、早乙女の熱を感じて目を開けると、彼がミハルの上につぶせてきた。彼の首に両腕を巻きつけて、ミハルは唇を求めた。唇に、キスしてもいいんだよね……

彼の舌に舌をからめて強く吸うと、ミハルの内部で彼が大きくなるのが感じられた。もっと早乙女を感じたくて、ミハルは腰を押し付けた。自分の体が、彼を包み込んで濡れてゆくのがわかる。大き

く揺さぶられて、ミハルはがくんと首をのけぞらせた。

「あ、ああ！」

快感に背筋がしびれて、声が我慢できなかった。耳元にかかる、彼の吐息が熱い。動きが早くなつて、ミハルは高みへと追い上げられてゆく。こんなことは、あつてはいけない事態だと思った。年上で、それなりに経験もある自分が、年下の彼にこんなに乱されてしまうなんて。

彼のクセのない髪をまさぐって、形の良い額に浮かぶ汗を唇でついばむと、爽やかな青草の香りがした。ミハルの頭の中いっぱい、緑のフェアウエイが広がった。彼の刻むリズムに身をゆだねて、ミハルはひととき、夢の世界をさまよう。青い空に舞う白球をどこまでも追いかける、無邪気で無垢な少年と少女の幻影が見えた。自分と早乙女だろうか？ 風になびく少女の長い髪、彼女に手を引かれる少年のほっそりとした首筋が、太陽の光の下でクローズアップされる。あれは、いつかの自分と、自分の大切な……。

かすかな着信音に、ミハルは目を開けた。

隣で寝返りをうつ早乙女を見つけて、ホッとする。ミハルは気だるい体に鞭打つようにして、そっとベッドから抜け出した。若い彼に何度も愛されたせいで、下半身に力が入らなかった。散らばった衣服と携帯電話を持って、彼女はバスルームに入った。着信音は止んでおり、フリップを開くと同じ番号から六回も着信していた。店のママだった。ミハルはママに電話をかけた。コールはするけれども、応答なし。勝手に飛び出してきてしまい、心配して探してくれているのだろうか。

ミハルはデジタル表示の時計を見た。まだ宵の口だが、勤務時間はとくに始まっていた。無断欠勤したのは初めてのことだったが、あんな事件があったのだ。きっと許してくれると思う。

シャワーを浴びていると、再び携帯が鳴った。ミハルは浴室を飛び出すと、濡れた体にバスタオルを巻きつけた。

ミハルちゃん？

「ママ？」

ああ、よかった。無事だったのね。

ママがひどく慌てているようで、ミハルは申し訳なく思った。

「勝手にいなくなったりして、ごめんなさい」

いいのよ。あんなことがあったばかりなのに、あなたをひとりにするなんて、私がいけなかったのだから。

ママの言葉を聞いて、ミハルは鼻の奥がツンとした。とても心配をかけていたのだなど、反省する。

ミハルちゃん、今どこにいるの？ 自宅にお店の黒服を行かせただけど、お留守だったって……。

「あ、今、友だちのところですよ」

あ、そ、そうなの？ まあ、よかった。じゃあ、とりあえず安心ね。

「とりあえずって、どういうことですか？」

あ……

ママは一度言葉を濁したが、ミハルが強いといつのと、渋々白状した。

実は金原さんが、火事に遭われたのよ。

「ええ？」

ミハルは驚いて、つい大きな声を出してしまった。するとバスルームのドアがノックされて、外から早乙女の呼ぶ声が聞こえた。ミハルは受話器を耳にあてたまま、扉を細く開いてギョツとした。全裸の彼が、捨てられた仔犬のような目をして立っていた。

「ミハルさん、置き去りにされたかと思ったよ」

めくるめくラブロマンスのあとだけに、なんだか少々引いてしてしまう。まあ、そういうところも、年下くんらしい可愛さで、けっこう好みなのだが。

ミハルちゃん、誰かそばにいるの？ お友だちかしら？

携帯から、ママの涼やかな声が流れてきた。電話中だったことに

気付き、ミハルは慌ててドアを閉めようとしたが、間一髪間に合わず、半分寝ぼけたような早乙女に抱きつかれた。彼はミハルの携帯に自分の耳を押し付けるようにして、彼女の首筋に軽く歯を立てた。「いやっ！ 噛まないで！」

ミハルちゃん？ ちょっと、聞いているの？

不審そうなママの声に、ミハルは思わず上ずりそうな声を懸命に押さえた。

「あ、さおと、じゃない……犬。犬が居て。あの、友だちが、今流りのトイプードルを飼っているんです。そいつが私の首筋を噛んだから……」

首筋？

「いえ、なんでもないです」

ミハルはふざけてじゃれつく早乙女の頭をぽかりとはたいた。早乙女は恨みがましい目つきで彼女を見ると、しぶしぶ抱擁を解こうとした。

だからね、店が荒らされたばかりだし、あなたは暴漢に襲われて、今度は金原さんが火事。それも不審火だっていうのよ。だから私、もう生きた心地がしなくて。

ママの言葉に、早乙女の動きが止まった。話を聞かれたかもしれない。ミハルは彼の腕からするりと抜け出すと、バスルームに駆け込んで、ぴしゃりとドアを閉めた。

だらだらと甘々なシーンばかりを書いている、読むほうは退屈ですよね？ちよ

5

ミハルは、あとでもう一度かけると約束して電話を切ったが、胸の中の不安がさつきよりも大きくなっていった。タクシー運転手に変装した怪しい男は、金原と連絡をとりたいと言っていた。ミハルから携帯を奪ったあの男が、金原の居る場所に火をつけたのだろうか？ いったいどこが火事になったのか、尋ねるのを忘れてしまったし、金原自身は無事だったのかどうかも聞けなかった。圧倒的に情報が足りない。早くママに会わなければいけないと、本能が訴えていた。

ミハルはモヘアのセーターとスカートを身につけて、携帯をポケットにねじ込んだ。化粧もそこにバスルームを出ると、身支度を整えた早乙女がベッドに腰掛けていた。

「あ、早乙女……くん……」

彼の眉間にシワが寄っているのを見て、ミハルは心の中で嘆息した。後悔が込み上げる。自分は、この愛しい若者を巻き込んでしまったのだろうか。早乙女はミハルのほうに向かって手を差し延べた。「おいで」

吸い寄せられるように、ミハルは彼の元へと歩いて行った。目の前に立つと、腰を抱いて引き寄せられた。ベッドに座った彼の足の間に挟みこまれるような体勢になり、ミハルは逃れようと体をよじった。

「じつとして！」

低い声で脅すように言われて、ドキリとする。見下ろすと、彼が睨むようにミハルを下から見上げている。ミハルは身を固くして抵抗するのをやめた。彼女が大人しくなると、早乙女はいきなりミハルのセーターをたくし上げた。

「ちょっと！　なにをする……！」

「黙って！」再び鋭い声で制止された。

早乙女は、さらにスカートからキャミソールの裾を引っ張り出した。ミハルの腹が丸見えになった。まさか、またさっきの続きをするのかと、ミハルが息を飲んだとき、彼がぼそりと言った。

「この火傷、気になってたんだ。もしかして、暴漢にあつたとか何とか、そのことと関係があるんじゃないの？」

「え？」

ミハルは自分の脇腹を見た。皮膚がただれて赤い筋が浮き出ている。あの男にスタンガンを押し付けられた痕だと気付いた。どう誤魔化せば、早乙女は納得してくれるのだろうか。そんなことを考えて黙っていると、火傷の部分に、湿った感触がした。見ると、早乙女がミハルの脇腹にそつと口づけていた。その仕草は、動物が傷ついた仲間を助けようとしているのに、どこか似ていた。

「あ……」ミハルは胸がきゅつとした。

「ミハルさんはオレのものでしょうか？　何があつたか、ちゃんと知る権利はあるはずだ」

光を宿す漆黒の瞳に射すくめられて、ミハルは誤魔化すのをあきらめた。

「私、実はストーカーにあつたんじゃないのよ」

「じゃあいつたい？」彼の表情が硬くなる。

「わからない。その情報をもらうために、店のママに会いに行こうと思う」

「一人で？」

下から睨み上げられてしまったので、ミハルは床に跪いた。早乙女の日焼けした顔を両手のひらで挟んで、その目をじつと覗き込む。「一人で行く……つもりだったけど、一緒に来てくれますか？」

返事の代わりに、ぎゅつと抱きしめられた。ミハルは彼の広い背中に腕を回してしがみついた。彼の肩にアゴを乗せ、その背後にある窓の、さらに向こうに目を凝らす。真っ暗な空間には、抱き合う

二人がうつすらと映っているだけだった。

ミハルは、店に向かう道すがら、早乙女に先ほどの出来事をかいつまんで話した。その際に、金原の愛人という勘違いな部分はわざと省いた。早乙女は黙って聞いていたが、時折劣るような眼差しを向けてきた。ミハルはそのたびに、彼を巻き込んだ罪悪感と彼を得た安心感という相容れない感情に悩まされた。

駅前通りに戻り、繁華街に入ると、中心にあるレンガ造りの小奇麗な雑居ビルに、クラブエレガントの紫色の看板灯が見えた。ガラス張りのエントランスを入り、レンガの階段を五段ほど降りたところが店の正面玄関だ。いつもはタキシードのドアマンが立っているはずなのに、誰もおらず、臨時休業の札が出ていた。何だか胸騒ぎがして、ミハルは慌てて裏口に回った。早乙女もあとから続く。深夜の路地裏に、二人の足音が響いた。

裏口は施錠されていた。携帯で呼び出すと、中からママが鍵を開けてくれた。彼女はミハルたちを中に入れたあと、用心深く周囲を見回してから、また鍵をかけた。

「お店、開けなかったんですか？」

ミハルはママに尋ねた。ミハルが勤め始めてから、定休日以外で休みになったことなど一度もない。ママはミハルの問いには答えず、彼女の背後に居る早乙女を穴の開くほど見つめていた。早乙女が軽く会釈すると、ママははじかれたように動き出した。

「ああ、お店ね。一度開けたんだけど、金原さんのことを聞いて、怖くなったみたいで、オーナーが閉めちゃったの」

三人は裏口からつづく薄暗い廊下を通って、店の接客フロアに入った。ヤクザどもが散らかしたあとはすっかり片付けられていた。戻ってきたミハルを見て、接客フロアのソファにふんぞりかえっていたオーナーが、眉根を寄せた。

「ミハルちゃん、ママさんから聞いたでしょう？ 帰っていいよ」「オーナーは丁寧な口調で「じゃまだ！」と言っているみたいだっ

た。ミハルはむっとして言い返した。

「何が起きているのかわからない以上、不安で、家に帰っても眠れません」

オーナーはイライラしたように、内ポケットからタバコを取り出すと火をつけた。見れば、彼の座っている席のテーブルには、灰皿に入った大量の吸殻があつた。彼はスパスパとせわしくタバコをふかすと吐き捨てるように言った。

「もう、誰もミハルちゃんには手をださないから、安心していい」

「なんでですか？　なんで、そう言い切れるんですか？」

ミハルはつかつかと歩いて行って、オーナーの前に座った。彼は一瞬ひるんだように体をソファの背もたれに押し付けた。ミハルの隣に早乙女が来て座った。オーナーはじろじろと彼を見ると、声を荒げた。

「あんた、誰だ？」

「ミハルさんの婚約者です」

早乙女はしれっとして言った。

「え……？」

ミハルは早乙女を振り返って口をパクパクさせた。いったい、いつそんなことになったのか？　ていうか、そんな約束は、これっぽっちもしていない。第一、さっきの彼の告白にしたって、ベッドの中でのことだ。そのときは盛り上がりつつも、あとで冷静になったときに、どうなるかなんて、わからない。だいたい、どこをどう見れば、婚約者に見えるのか。どうせウソをつくなら弟とでもしておけばいいものを、とミハルは心の中で頭を抱えた。

「婚約者？　私は聞いていないが？」

オーナーは不機嫌な顔になった。

「たぶん、彼女が黙っていたのでしょう」

いつもミハルがお世話になっていきます、などと、早乙女は背伸びした挨拶をした。飲み物を運んできたママが、プツと小さく吹きだした。

ママはテーブルに四人分の飲み物を置くと、オーナーのとなりに無理矢理座った。

「婚約者なら、身内みたいなものですもんね。私から話すわ。なぜ、こんなことになっているのか」

いいでしょう？ と、オーナーにお伺いをたててから、ママは話し出した。

ことの起こりは前回のゴルフコンペだった。オーナーと金原は、数人の仲間と、コンペの優勝者を当てるトトカルチョをやったのだという。

「トトカルチョ？」

ミハルが首をかしげると、隣の早乙女がそつと耳打ちした。

「つまり、賭けゴルフのことですよ。見つければ、警察につかまります」

『賭けゴルフ』という響きが気に入らないのか、オーナーは短く咳払いをして言った。

「仲間内のお遊びだったし、もともと言いだしっぺは誰だなんてことは、忘れてしまったんだが、前回私と金原さんが優勝者を当てたので、賞金をもらったんだ」

「それに味をしめたのね？」

ママの言葉に、オーナーは苦虫を噛み潰したような顔になった。どうやらそのとおりらしい。今回のコンペでもやるつもりで、今度は金原の音頭でトトカルチョの参加者が募集されたのだという。

「今回は人数も掛け金も大幅に増やそうということになったんだが

……」

そう言つて、オーナーは半分ほどになったタバコを灰皿でもみ消した。ミハルと早乙女は身を乗り出した。言いにくそうなオーナーに代わつて、ママがあとを引き受けた。

「で、また賞金がもらいたくて、八百長を計画したんでしょう？ あなたと金原さんで」

「ええ？」

やり方はこうだった。ゴルフアーには、あらかじめハンディキャップというものがある。それが一桁の者をシングルプレイヤーと呼ぶ。ハンディが少ないほど上手いということなのだそう。これを踏まえて、コンペの参加者を競馬の馬に見立てて投票するのだ。ようは、まさに競馬と同じ仕組みである。その中に、プロ顔負けの凄腕シングルプレイヤーを紛れ込ませておき、ハンディキャップを偽って下手くそに見せる。みな当然ハンディの大きい者には賭けないから、そこを狙って掛け金を全部いただく、という筋書きだったらしい。

「なんてことするんですか。スポーツを賭けの対象にするなんて」
ミハルはキツとオーナーを睨んだ。

「罰が当たったみたいですね、私は」
オーナーはミハルから目をそらすと、自嘲気味に言った。

「実は、賭けの参加メンバーの募集が終了したあとで、そのことが暴力団の幹部に知られて……」

「暴力団？」

頭を抱えるオーナーを冷ややかな目で見ていた早乙女が、ズバリと言った。

「それで、脅された」

「ああ……。賭けにのった者の中には、各界の著名人なんかも居たから、迷惑がかかると思って、金原さんが彼らの話をきいてしまったんです」

「で？ いったい何を要求されたんです？」

ミハルが尋ねると、オーナーはゆるゆると首をふるばかりだった。ママが代わりに説明する。

「それで、彼らもひと口乗せると……」

「ええ？」

八百長にのっかって、資金源にしようとしているのだろうか？

「ぼくは、金原さんに降りると言ったんだ。一度こんなことを飲めば、店の信用は落ちるし、そのうち『エレガント』は暴力団のため

り場にされてしまう」

金原を説得し、コンペの中止を暴力団幹部に連絡したところ、今日の騒ぎが一気に起こったのだとオーナーは言った。

「中止にしたら、店やホステスがどうなっても知らないぞって脅されて」

オーナーは泣きそうな顔で言った。

「だからやつら、たぶん見せしめにミハルちゃんを……」

ミハルは、スタンガンで火傷させられた脇腹をそっと撫でた。店のホステスであり、金原のお気に入りの自分がターゲットにされたのだ。恐ろしくて、血の気が引いた。

「それで、これからどうするんですか？」

「どうするって……。言うことを聞くしかないじゃないか！ 私は店を……いや、キミたちを護る責任があるんですよ？」

オーナーは威勢よく怒鳴ったが、ミハルやママと目を合わせないようにしているようで、すぐに目を伏せた。

「それで、金原さんは？」

「わからない……。連絡がとれないんだ」

ミハルは火事のことを尋ねた。ママが言った。

「火事があったのは、実際は昨日のお昼ごろらしいわ。でも、奥さんも金原さんも、たまたま外出中で、火事には巻き込まれなかったみたいよ」

昼過ぎといえば、ゴルフ練習場で奥さんに引きずられて消えていった頃だ。

「たぶん、金原さんビビッちまったんだろう。自宅が火事騒ぎになったっていうのに、姿をくらまして、まったく連絡がとれないんだ。くそう、あのオヤジ！ こちらに何もかも押し付けやがって」

オーナーが悔しげに歯噛みした。

「だから私を連れ去ろうとした男は、しきりに金原さんと連絡を取りたがっていたのね？」

ミハルはため息をついた。いったいいくらのお金動いているの

か知らないが、金原とオーナーの強欲のせいで、とんだとばかりだ。

「あんたら二人に関しては、自業自得ってやつだな。だけど……」
早乙女が皮肉な笑みを浮かべ、言葉を継いだ。「またミハルさんに何かあったら、どうしてくれるんだ？」

「そ、それは……」

ママがオーナーの肩に手をかけて、身を乗り出した。

「ねえ、このままでは、やっぱりあなたも金原さんも、無傷で済まされないわよ。それに、ミハルちゃんや他のホステスたちだって、いつまたひどい目に遭うか……」

「じゃあ、どうすれば？」オーナーは涙目になった。

「どうすればいいのなんて、知るわけじゃないじゃないですか！ もう、警察に事情を話したらどうですか？」

ミハルは懸命に穏やかな口調で話そうと努力したが、激しい怒りに体が震えていた。何も解決策が出ないまま、時間だけが経過してゆく。ミハルは疲れて早乙女の肩に頭をもたせかけた。ほとんど寝てしまいそうになったとき、オーナーのポケットで携帯が鳴った。暴力団からの電話と勘違いしたのだろう。彼は驚いてソファからずり落ちそうになったが、なんとか落ち着いて電話に出た。

「誰ですか？ え、金原さんですか？」

電話の相手は金原らしい。オーナーはこの期に及んでもまだ話を聞かれたくないのか、携帯を耳に当てたまま席を立ち、ぼそぼそとしゃべりながら、接客フロアを出て行った。

心配そうに出入り口の方へ目をやっていたママが、ミハルと早乙女に目を戻した。ママは悲しげな目をしてミハルを見つめると言った。

「ミハルちゃん、あなた、この店やめたほうがいいわ。暴力団に一度絡まれたら、おしまいだって聞いたし」

「そんな、ムリです。私にはどうしても……」

「お金が必要だ」と言おうとして、ミハルは言葉を飲み込んだ。早

乙女には絶対に知られたくない秘密が、ミハルにはある。ママは知ってか知らずか、どきりとさせることを言った。

「今度こそ、幸せになれそうなんでしょう？」

今度こそ、幸せに……

ミハルはちらりと早乙女を見た。彼はわざとそうしているのか、女性二人の会話を無視して、首を伸ばすようにして出入り口を見ている。ミハルは彼の首筋からアゴにかけてのラインを目で追っていた。

しばらくして、オーナーが蒼白な顔で戻ってきた。

「金原さん、どこに居るんですって？」

ママの質問に答えず、オーナーは一步横にずれた。

「あー！」

薄暗いフロアの入口に、金原の姿があった。

「金原さん？ どうしたの、その恰好は！」

ママとミハルが同時にソファから立ち上がった。金原は、酷い有様だった。暴力団につかまって折檻されたらしく、顔は腫れ上がり衣類のあちこちに血液のシミがあった。彼は、まるで巨大なボロぞうきんのようなだった。その場に居る誰もが言葉を失った。

金原はミハルのそばに来ると、腰が抜けたようにその場にくずれた。ミハルは早乙女の脇をすりぬけて、金原に駆け寄って助けおこした。

「金原さん、しっかりしてください！」

金原は腫れぼったい目を上げて、ミハルの姿を認めると、にっと笑った。前歯が一本なかった。ママが慌てて救急車を手配し、オーナーと早乙女は金原の体をソファにひっぱり上げた。金原は荒く息をしながらミハルの名前を呼んだ。

「……ミハルちゃん、ごめんね。迷惑かけた」

ミハルは金原のそばに跪くと声をかけてやった。

「私は大丈夫です。金原さんこそ、もうしゃべらないほうが……」

「いや、私は明日、ゴルフをしなくちゃなんのだ。だから、こん

なところで寝ていられないんだよ」

何を言っているのだろっと、皆が眉をひそめ、顔を見合わせた。

「直談判……したんだ。やつらと勝負して、私が勝ったら、コンペを中止してもいいそうだ。モチロン、もうミハルちゃんに手を出さないという、暴力団幹部の念書もとった」

「勝負って……」

言いかけたミハルを、ママが制した。金原は、用事は済んだとばかりに、気を失ってしまった。

シンとした店内に、空調の音だけが聞こえる。数分間が経った頃、表で救急車のサイレンが止まった。どやどやと救急隊員たちが入ってきて、あつという間に金原を連れ去った。

エレガントの接客フロアは、再び静寂に包まれた。

ママが金原の身内に連絡を入れにいき、ミハルと早乙女、そしてオーナーの三人は元のソファに戻っていた。

「金原さん、明日、ゴルフで勝負するって……ムリでしょう？」

ミハルがオーナーを見ながら言うと、彼は紙のように白い顔でこくりと唾を飲み込んだ。

「加納山カントリークラブに午後二時ということです。金原さんが行けない以上、誰かが代わりに行くしかない」

オーナーは何かを堪えるような目つきで付け加えた。

「せっかく金原さんが残してくれたチャンスですから。無駄にするわけにいかないです。この機会を逃したら、今後ずるずるとかわり続けることになる。それだけは何んとしても……」

いい終わらぬうちに、正面入口のほうでがやがやと複数の人声がした。

「ちよつと！ 勝手に入らないで！」

ママの叫び声が聞こえ、ミハルたちは接客フロアを飛び出した。救急隊員が出て行ったあと、閉め忘れたドアから四人の男が入ってきていた。ガラス張りのエントランスに入っすぐ、薄暗い照明

の下でも、彼らが夕方店に来たチンピラたちだとすぐにわかった。品のない縦縞スーツの小柄な男が、肩をゆすつて一歩前に出た。

「おいおい、勝手に入らないで、はないだろう？ 誰が金原のおっさんをここまで運んでやったと思ってるんだ？」

ママはよろよろと数歩下がって、彼らとの距離をとった。彼らは救急車の騒ぎが収まるまで、どこかで様子を覗っていたのだろう。

「まさか、警察に連絡なんか、してないよな？」

脅すように問われ、ママは人形のようにカクカクと頷いた。縦縞スーツの男が言った。

「明日、おっさんとのゴルフを楽しみにしてるんだけど、なんかおっさん、派手に転倒してたもんだからさ、お見舞いを言わなくっちゃと、わざわざこうして寄ったわけだ」

ミハルは男の声に聞き覚えがあった。縦縞スーツの男は、フレームの無い細長のサングラスをかけている。そのサングラスにも見覚えがあった。

オーナーがママを背後に庇うようにして前に出た。

「金原さんは、明日ゴルフが出来るような体じゃない。……よくご存知のはずでしょう？」

「ふーん、そうかい。じゃあ、残念だが、おっさんとの約束はなかったことに……」

「ま、待ってくれ！」

くるりと背を向けた男たちを、オーナーが呼び止めた。

「私が、私が代わりに行く」

ミハルはオーナーの背中を見つめた。精一杯の勇気をふりしぼっている様子で、彼の体が小刻みに震えているのがよくわかる。縦縞スーツが笑った。

「あんた、ゴルフ出来るの？ 悪いけど俺は正真正銘のシングルだよ。止めといたほうがいいんじゃない？」

オーナーは一瞬ぐつと言葉に詰まったが、弱々しく言った。

「行きます。……だって、行かなきゃどのみち……」

「お前じゃ、つまんねえんだよ！」

急に声を荒げた縦縞男に、オーナーは「ひっ！」と情けない声を上げた。縦縞はサングラス越しに、ミハルとママを舐めるように見た。彼はにやりと笑うと、ミハルのほうに顔を向けて言った。

「じゃあ、選手交代の代価として、そのホステスも賭けよう」

ミハルは目を剥いた。冗談ではない。何故自分がチップにされなければいけないのか？

「お前が勝ったら、きれいさっぱりかわるのはやめてやる。そのかわり、俺が勝ったらこのホステスをもらって、さらにコンペも開催してもらおう。どうだ、面白いだろう？」

オーナーは黙り込んでしまった。彼の膝がプルプルと震えているのを見て、ミハルは絶望的になった。彼女はそっとママの袖を引いて尋ねた。

「オーナーって、その……ゴルフは？」

ママは無言で激しく首を振った。

ああ、おしまいだ……

そのとき、ずっと黙っていた早乙女が一步前に出た。

「オレが相手じゃ、ダメか？」

縦縞スーツが、今初めて早乙女を見つけたような顔をした。早乙女はオーナーの隣に立つと、もう一度言った。

「オレが明日、金原さんの代わりにあんたの相手をする」

「そんなの、だめよ！」

ミハルはとつさに早乙女のジャケットを背中からつかんだ。これ以上、巻き込むわけにはいかない。それに、早乙女はプロなのだ。いくらゴルフに疎いミハルでも、プロが賭けゴルフなんかにかかわったら、どうなるかくらい想像がつく。

「おめエ、誰だ？」

縦縞男の背後に居る、スキンヘッドの大男が唸るような声で訊いた。するとオーナーがぺらぺらとしゃべった。

「彼はこの、ミハルちゃんの婚約者です。ミハルちゃんをどうこう

するのであれば、私より彼のほうが適任かと」

ミハルは物凄い目つきでオーナーの横顔を睨みつけた。彼は逃げ場を見つけたとばかりに、銀縁メガネのブリッジを押し上げた。縦縞スーツが、早乙女に向って言った。

「おい、にーちゃん。随分肝が据わってそうだが、俺はあんたをどこかで見たことがあるぜ。確かあれは……」

ミハルの体中で、血液がどくどく巡っていた。気がつけば、ミハルは早乙女と縦縞男の間に割り込んでいた。

「ダメ！ あなたは、関わっちゃいけない！ あたしが勝負する！ あなたは余計なこと、しないで！」

「ミ、ミハルさん？」

早乙女が引きつったような声を出した。ミハルのこめかみを、汗が一筋つたった。

「ほう、威勢がいいな、彼女。俺は、面白いのは好きだ」

縦縞はやけに嬉しそうに、ミハルを上から下までゆっくりと眺めた。その場の全員が驚いて言葉を失くしていた。当のミハルも、言ってしまったから果てしなく後悔していた。

早乙女がミハルの腕をつかんで引き寄せると、耳元に唇をつけるようにして、小声で叱りつける。

「何言ってるんだ！ 数日前に始めたばかりで、昼間初めてコースに出たような初心者が！ 正気か？」

「正気よ！ あなただって、数日ですいぶん上達したって、言ってくれたじゃない」

「そ、それは、初心者にしてはという意味であって、一度も上手だとは言っていない」

呆れたような早乙女の言葉にミハルは唇を噛んだが、わざとつっぱねるように言った。

「……だからって、私自身が賭かっているのに、他人任せなんて、嫌よ」

「他人って、ミハルさん、オレは……！」

早乙女が切れ長の瞳を大きく見開いた。ミハルは胸がずくと疼いた。急に縦縞男が大笑いした。

「あっはっはっは！ いいねえ。じゃあ、明日はこのおネエちゃんと勝負しよう」

ミハルは膝の力が抜けそうで、懸命に両足を踏ん張っていた。自分で言い出したことだが、その重圧に押しつぶされそうだった。

「まあ、余興程度には楽しませてもらえそうだしな」

へらりと口元で笑って、縦縞スーツの男は背中を向けた。一緒に来たチンピラ軍団が引き揚げ始めた。わらわらとガラス扉を出てゆく男たちに向かって、早乙女が言った。

「オレが彼女のキャディに付くのは、構わないだろう？」

縦縞の男は立ち止まり、背を向けたまま言った。

「好きにすればいい」

ブーンと音がして、エントランスの自動ドアが閉まった。ミハルはその場でぐくりと膝をついた。

「あーあ、ミハルちゃん、なんで余計なこと言うかな。彼氏に任せておけば勝てたのに」

オーナーが冷やかな口調で言って、早乙女に向き直った。

「キミは確か、ゴルフ練習場のコーチだね。レッスン案内のポスターで見たよ。やっと思い出した」

だから、彼を巻き込みたくなかったのだと、ミハルは大声で叫びたかった。それを、任せておけばいいなんて。どうしてこの男は自分のことしか考えないのだろう。

「まあ、こうなってしまうては、なるようになるしかありませんからね。ミハルちゃん、明日は頼みますよ」

オーナーは床にぺたりと座り込んでいるミハルの肩を、勢いよくどんと小突いた。ミハルはよろよろと立ち上がった。早乙女がミハルを抱くようにして肩を貸してくれた。

オーナーは緊張が一気にほぐれたように、饒舌になった。

「女性相手ということで、手加減してくれるかもしれませんがからね。」

結果オーライかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でもまあ、あなたもプロのコーチなら、彼女のこと、何とかしてやってくださいよね」

頼みますよ、と口の端を上げて、オーナーは銀縁メガネの顔を歪ませた。

この、ひとでなし！

ミハルは心の中で彼をののしった。怒りが沸騰して、今にもオーナーの爬虫類のような白い顔を殴り飛ばそうとしたとき、彼の体が前のめりに吹っ飛んだ。

「なに？」

ミハルと早乙女はその場に固まった。

「ばかやろう！」

ママが背後からオーナーを思いつきり突き飛ばしていた。オーナーはモロに顔から転んで、つぶれた蛙みたいに床にはいつくばった。その背に馬乗りになって、ママが半狂乱で喚いた。黒いドレスの裾が裂けて、太腿が露わになる。

「ばかやろう！ あんた、どこまで根性がないの？ いいかげんにしなさいよ！ このクズ！」

喚きながらママはギブスのはまった左腕でばかばかとオーナーの頭をこれでもかというほどに殴りつけた。

「いたい、いたい！ よせ！」

オーナーはママを背中から振り落とすと、夜の街へと逃げ出した。「逃げるのかつ、卑怯者！」

ママもドレスの裾をからげながら、ガラスの自動ドアを飛び出して行った。誰もいなくなった店の玄関で、ミハルと早乙女はぼうつと突っ立っていた。しばらくすると、早乙女がぽつりと言った。

「ミハルさん、大丈夫？」

あ……。

ミハルは背の高い彼を見上げた。早乙女の顔を真正面から見たとたんに、今までの疲労が一気に押し寄せてきた。ミハルはぐったり

と彼の肩にもたれた。

「……ごめん、こんなはずじゃなかったのに。結局、あなたを巻き込んで。あたし、いったい何をやってるんだろっ？」

「そんなことはいい」

早乙女はミハルの額に軽く口づけて、奮い立たせるように言った。
「もう日付が変わってる。今日の午後二時には、加納山カントリークラブのコースに立っていないといけないんだからね」

ミハルは力なく頷いた。じたばたしても仕方が無い。

早乙女はミハルの手を引いて表通りに連れて行った。そこでタクシーを拾うと彼女を座席へ押し込んだ。

「帰って、何も考えずに眠ること。いいね？」

そのままドアが閉まりかけたので、ミハルは慌てて彼の腕をつかんだ。

「お願い。私が眠るまで、そばに居て。お願いです……」

早乙女は満面の笑みを浮かべてタクシーに乗り込んできた。満足しきった猫みたいな顔で、彼は言った。

「女性は一素直が一番だ」

ミハルは、タクシー運転手に自宅マンションの住所を告げると、早乙女の肩にもたれて目を閉じた。

どうしたらもっと面白くすることができるのだろっ。少し、遊びを入れてみると

6

対決の朝が来た。といつても、もう午前九時を回っている。ミハルは眠い目をこすりながらベッドの中で大きく伸びをした。

「うっ……」

全身筋肉痛とはこのことだろうか？ 体のあちこちが悲鳴をあげている。普段使い慣れていない筋肉を酷使したことによるものだから、どんな体勢をすれば楽になるのか思いつかない。ミハルは再び毛布にくるまった。そのまま部屋を見渡して、少々がっかりする。

昨夜早乙女にタクシーで送ってもらい、自宅に帰ってきたのは覚えていいる。だが、着替えてベッドに入った瞬間から記憶がない。すぐに寝付いた自分を残して、早乙女は帰ってしまったのだろっ。

加納山カントリークラブまでは、車で一時間ほどだ。昼過ぎに出れば間に合う。もう一眠りしようと目を閉じると、インターホンが鳴った。次いで、玄関ドアの鍵を開ける音がした。ミハルはギョツとして、毛布の中で身を固くした。足音をさせて入ってきたのは、早乙女だった。

「ミハルさん、おはようございます」

彼は爽やかに挨拶して、キランと白い歯を見せた。毛布にくるまったままのミハルに、彼は鍵と一緒にコンビニの袋を押し付けた。

「さあ、早く食べて。行くよ」

「え？」

約束は午後二時だ。まだ時間はたっぷりあるはずだが。そのように言おうとすると、先読みしたかのごとく、早乙女が言った。

「先に行って、練習ラウンドする」

「ええ？」ミハルは飛び起きた。

筋肉痛のこの体を抱えて、2ラウンドもゴルフをするなんて、あ

りえない。しかも、昨日は9ホールだったが、今日はフルの18ホールだ。それを二回も回るなんて！

「ちよつと待つてよ。筋肉痛でさあ……」

ぐずぐず言うミハルを、早乙女は容赦なく叱りつけた。

「体がつらいのはわかります。たぶん、オレのせいもあるでしょう。だけど、この勝負に何が賭かっているのかを、思い出してください」

早乙女コーチの口調でぴしゃりと言われ、ミハルは渋々ベッドから降りた。

三十分で身支度を整えて、マンションの一階ロビーに降りると、店のママが来ていた。

「あれ？　なんで？」

早乙女と並んで待つていたママに、ミハルは駆け寄った。

「なんでって、応援に決まっているじゃない」

そう言つて、ママはピンク色のベースボールキャップをかぶった。前面に『MIHARU FIGHT』と書かれたシールが貼つてある。かなり恥ずかしい。あとから店の女の子全員が応援に来るからとママは言つた。

「さあ、行くわよ」

気合入りまくりのママについて、彼女の運転するマーク？でミハルたちは加納山カントリークラブへと向かった。

昨日のパブリックゴルフ場とは全く違って、加納山カントリークラブは全てがゴージャスだった。クラブハウスの瀟洒な建物は、まるでどこかの高級ホテルのようだ。エントランスの車寄せにはスタッフが待つており、ゴルフクラブを下ろすのを手伝ってくれた。ぼうつとしているミハルをママがヒジで小突いた。

「ちよつと、こんなの当たり前だからさ。ぼけつとしないで」ママはゴルフをするわけでもないのに、ロッカールームに入つて行つた。ミハルはママについてロッカールームに入ると、目を見張つた。ロッカールームの中も、まるでエステサロン顔負けの設備だ

った。ふかふかの絨毯が敷かれ、大きなラタンの椅子が巨大な鏡の前にずらりと並べられている。化粧台には高級化粧品が並べられ、『ご自由にお使いください』と書かれていた。ロッカルームの奥が浴室になっているのだが、どうやら大浴場の他にサウナや天然温泉の露天風呂まであるらしい。壁に温泉の効能が貼ってあった。

「なんか、旅行に来たみたいですね」

話しかけると、ママは「あはは」と楽しそうに笑った。

「この商売しているわりには、ミハルちゃんってどこかつましいよね」

笑われて、ミハルは口をつぐんで俯いた。リッチな経験など、したことないのだから、仕方がないじゃないかと思う。数年に一回の家族旅行が一大イベントだったのだ。自分は、そういう家庭に育ったのだから……。日頃金持ちを相手にしていたって、高級クラブのホステスが、みな客に合わせたようなライフスタイルを送っていると思うのは、大間違いなのだ。

そんなお金があるくらいなら、私は……

ミハルはふるふると首を振った。今はそんなことを考えているときではない。勝負の時間は刻々と迫っている。それにしても、練習で18ホール回って、その後あの暴力団の男ともう一ラウンド出来るのだろうか？ ミハルは不安を抱えながらゴルフウェアに着替えてロッカルームを出た。

早乙女はすでにコースの入口で待っていた。

「さあ、行こう」とミハルをせかして、彼はすぐ近くに止まっていた乗用カートを指さした。ミハルは嬉しくなった。筋肉痛の足腰にはとてもありがたい。ミハルは心配顔のママに手を振ると、いそいそとカートに乗り込んだ。カートの背後にミハルの（正確にはママから借りた）キャディバッグだけがぼんと積み込まれている。道具がないということは、早乙女はゴルフをしないのだろうか？

よくわからないまま、ミハルは昨日に引き続き、今日もゴルフコ

ースに出る……。

抜けるような青空が広がり、芝の緑が目に見えやかだ。昨日のパブリックゴルフ場も素敵だなと思ったが、加納山カントリーはまったく別世界だった。スタートホールから大きな池があり、中央の噴水が煌めく水飛沫を涼しげに噴き上げている。グリーンサイドのバンカーは完璧な三日月型で、中の白砂には足あとひとつ見当たらなかった。美しい景色に見とれ、「マイナスイオン」と叫んだ途端に尻を叩かれた。

「なにすんの！」

噛み付くように振り返ると、早乙女が怖い顔で見ている。

「ミハルさん。リラックスしているのはとてもいいことですが、もう少しだけ緊張してください」

こんなのは、なんだか面白くない。まあ、デートしているわけではないから、仕方がないんだけど。ミハルはシュンとなって頷いた。彼はそんなミハルの様子を無視してレッスンを開始した。

「18ホール回ると言っても、ちゃんとラウンドしていたら当然間に合いません。各ホールでポイントだけ学習します」

おお！ よかった。ミハルは胸を撫で下ろした。体力が持つか不安だったのだ。これなら楽しそうだと思ったのは甘かった。

一番ホールの難所、池越えのショットが出来ないのだ。しょっぱなからこれでは、先が思いやられる。

「基本的に、ミハルさんの飛距離では池越えはムリですから。コースの端っこ、芝のほうを狙ってください」

何個もボールを池に叩き込んで、ようやく早乙女のOKが出たのだった。

「……ゴルフって、難しいのね」

泣きそうな顔でぼそりと呟くと、早乙女が冷やかな目でミハルを見た。

だからやめておけと言ったのに。

彼の目つきはそう言っているようで、ミハルは唇を噛んだ。早乙

女が恋人であろうとなかろうと、今はそんなこと関係ないぐらい悔しかった。

「時間がないです。あとはひたすらパターの練習をしますから」

カートを操る早乙女の腕をつかんで、ミハルは言った。

「ちよつと待ってよ。私、もつとドライバーを打っておきたいのよ。もう少しやれば、もつと飛ぶと思うし」

早乙女はカートを走らせながらチラリとミハルを見て言った。

「ミハルさん、ゴルフは打数の少なさを競うんです。飛距離じゃない。150ヤードのティーショットが一打なら、1メートルのパットも一打なんですよ。わかりますか？」

なんだか、目が醒めたような気がした。

「それは、千里の道も一歩からってことね？」

何かを悟ったように言うと、彼はため息混じりで呟いた。

「いや、それは違うと思うけど……」

練習は容赦なく、そして厳しく続いた。ポニーテールにしたミハルの髪を、春の風がくしゃくしゃにして通り過ぎる。ミハルは額の汗を拭うと、大きく深呼吸をした。勝負まで、残すところあと二時間となっていた。

クラブハウスに戻ると、オーナーが来ていた。彼の青白い頬には、くつきりと猫に引つ搔かれたような傷痕があった。昨夜の修羅場を思い出し、ミハルと早乙女は顔を見合わせてプツと吹きだしてしまった。

「余裕ですね。本当に、大丈夫なんですか？」

オーナーは、傷痕をかくすように頬に手をやって、さらに顔をしかめた。

大丈夫かと聞かれれば、ぜんぜん大丈夫ではない。でも、やらなきゃならないのだ。なんたって、こっちは自分自身が賭かっているのだから。ミハルはオーナーから痛い顔を背けた。背けた先に、

ママと店の同僚たちを見つけた。若い女性がこれだけの人数で束になっっているというのに、あまりに静かで気付かなかった。ロビーの片隅でひっそりと佇む彼女たちは、色とりどりの私服を纏って、まるで花束のようだ。

「来てくれたの？」

ミハルが手をふると、彼女たちは一斉に「きゃああああ！」と、黄色い声を出してこちらに走ってきた。花束が一気にバラける。

みんな、なんだかんだ言っても、いい仲間だ。店のことやミハルのことが心配なのだ。ほわんとした思いが胸の奥を温かくする。一番仲良くしている妹分・カオリの目が潤んでいる。走り寄ってくる彼女に、ミハルは満面の笑みを向けた。

「カオリ、わざわざありがとうね」

声をかけた途端にカオリが叫んだ。

「うわあ！ ママが言ったとおり、本当にカッコイイ！ 早乙女さんって言うんですね。私、カオリです。今度、指名してください！」
彼女は自分の名刺を手に、ミハルを素通りして背後の早乙女に駆け寄った。他のホステスたちも凄い勢いで後続く。まさに、食いかけて地面に落とした飴にたかる蟻のごとくに。クラブハウスの豪華なロビーが一瞬にしてキャバクラのような様相を呈した。

早乙女は営業スマイルで会釈しつつ、ご丁寧の名刺を一枚一枚受け取った。

「カオリさんね。オレと同じくらいの年齢？ こちらはサキさんですね。どうも！ アユミさんにモモカさん、よろしく」

ミハルは両手の拳を握り締めた。

そんなもん受け取るな、十秒以内に捨てる！

彼女は完全にむくれて騒ぎの輪に背を向けた。すると、早乙女の良く通る声が聞こえた。

「みなさん、応援ありがとう。是非、ラウンドするときも同行してください」

え……？ ミハルは振り向いた。いくらなんでも、この娘たちを

ぞろぞろと引き連れて歩くのは、他のお客さまに迷惑だろう。

「ええ？ 本当に？ 私、ゴルフ場って初めてなの。ハイキングみたいで面白そう！」

誰かがノーテンキに甲高い声を出した。早乙女はクツクツ笑っている。ミハルは無性に腹が立って、手袋をはめた左手をぎゅっと握りしめると、ロッカールームに駆け込んだ。

ハーレクインの真の見せ場は、二人で困難に立ち向かうところではないだろうか

7

昨日の縦縞スーツの男は、きつちり時間通りにやってきた。今日はさすがにスーツではないが、黒に細い黄色の縦縞が入ったポロシヤツを着て、サングラスをかけていた。ひよつとして、阪神ファンかもしれない。

彼は、昨日と同じで三人の子分を引き連れている。ガタイのでかいスキンヘッドの男、若い茶髪のにいちゃん、そして、中肉中背でなんの特徴もないやつの三人だ。男はスタートホールに着いたとき、礼儀正しく「松平だ」と名乗った。ミハルも頭を下げて挨拶した。ガタイのでかいスキンヘッドが松平のそばに付いている。どうやらあちらもゴルフ場のキャディは使わないようだった。

「面倒なことになると嫌だからな。キャディは付けない。そのかわり、お互いカートは一台ずつ使用する。いいな」

松平はミハルではなく、早乙女に言った。早乙女は頷くと、チャリと周囲を見渡した。彼らの居る場所から10メートルほど離れた背後のカート道に、色鮮やかな女性たちがずらりと並んでいた。

「言っておくけど、ギャラリーの目が光ってますからね。フェアプレーでお願いしますよ」

早乙女の言葉に、松平は「ふふん」と楽しそうに笑った。

「フェアもなにも……。ハンデをやらないと、勝負にならねえだろう？　な、おネエちゃん？」

ミハルは松平を無視してプイとそっぽを向いた。早乙女が代わりに言った。

「彼女はまったくの初心者です。ですから、ハンデ36、もらいます」

「もつとくれてやろうか？」

松平は「けけけ」とバカにしたように笑った。それからこちらを見つめている、ホステスたちに向かってVサインをして見せた。一斉に、ブーイングが巻き起こる。

「おっと、嫌われたもんだな。支配人の許可とって、あんたたちギヤラリーが入れるようにしてやったのは、この俺様だぞ」

すると女性軍の中からママが喚いた。

「何言ってるのよ。自分の子分を連れて歩きたいからでしょう？」

何を企んでいるのか知らないけどね、ズルしたら承知しないわよ！」

ママは派手なピンクのキャップを振り回し、少し離れたところに立っている、松平の子分たちを威嚇した。興奮しているママを、オーナーが黙らせようと必死になっていた。

スタート直前に、ミハルは松平に声をかけた。

「松平さん、もう一度確認しておきます。私が勝ったら、本当に金原さんにも店にもかかわらないと約束してくれますね？ モチロン、私のことも含めてですけど」

松平はサングラスの中からじっとミハルを見つめているようだったが、ニヤリと笑って頷いた。

「ああ、そうしよう」

ミハルは大きく深呼吸をした。いよいよ始まる。

「彼女から先にどうぞ」

松平は紳士的に言って、ティーグラウンドから降りた。ミハルはボールをティーアップすると、ドライバーを構えた。

スタートホールは池越えのショットだ。噴水の水が風にゆらゆらと揺れて、まるで「ここへおいで」と呼んでいるみたいだ。彼女は先ほどの練習を思い起こし、池の右側にある、僅かなフェアウェイに向かってアドレスした。

心の中で、人気の女子プロの連続写真を思い描く。

キン！ 良い音がして、狙い通りにボールは池の右側に飛んだ。

「うまい！」早乙女が大きな声で褒める。今日、初めて彼に褒めら

れたことに気付き、ミハルは舞い上がるような気持ちだった。さっきまでの不愉快な思いが、今の一打でどこかに飛んでいってしまった。出だしは好調だ。「ほう、やるじゃないか」松平が驚いたように言って、付け加えた。「じゃあ、俺もちつと早めにエンジンかけるか」

余裕のある言葉がムカつく。

松平はティーグラウンドに立って、二回素振りをすると、ゆっくりアドレスした。モチロン彼は池越えのショットだ。ゆっくりとクラブが上がったとき……。

ピロロロ……

「あ！」

松平の打った打球は池に落ちた。背後のカート道で、彼の子分が怒鳴った。

「バカヤロウ！ 誰だ、携帯鳴らしてんのはっ！ 電源を切つてけや！」

見ると、カオリが自分のバッグをゴソゴソと漁っていた。彼女は悪びれもせず、「ごめんなさ〜い」と甘ったるい声で謝罪した。苦虫を噛み潰したような顔の松平に、早乙女は爽やかに声をかけた。

「ウオーターハザードですね。ちょうど噴水の真ん前あたりだったかな」

「んなこと、わかってる！」

吐き捨てるように言って、松平は池に向かって走って行った。自分のボールに向かって歩きながら、ミハルは早乙女に尋ねた。

「ねえ、池に入ったらどうなるの？」

「ウオーターハザードは、ボールの場所によっては、そのまま打つことができます。でも、あまり水深の深い場所ではムリです。その場合は、ペナルティとして一打プラスして、ボールが池に入ったあたりの場所から打ち直します」

「じゃあ、私は今度が二打目だけど、松平さんは三打目ということね」

「そうです」ミハルは幸運に感謝した。

その後、松平は三打目で噴水を避け、四打目でグリーンオンに成功するも、距離の長いパットを外し六打でホールアウトした。ミハルも二打目、三打目をミスったものの、なんとか七打で上がった。カートに乗り込みながら、ミハルはドキドキする胸を押さえた。

「あー、パターするとき、めっちゃめっちゃ緊張した」

早乙女はクスリと笑って、ミハルの頭を撫でた。

「大丈夫。うまくいってます。ミハルさんには、1ホールにつき二打のハンデがあります。だから、今のホールはミハルさんの勝ちです。この調子でがんばりましょう」

次は、だだっ広いロングホールだった。今回のティーショットは松平からだ。ゴルフは、前のホールで一番打数が少なかった者からティーショットをする。つまり、毎回打つ順番が入れ替わるのだ。二打目のショットも、一打目の飛距離が短い者、つまり旗から遠い順に打つのがルールだ。松平はティーグラウンドに立つ前にギャリィをひと睨みした。威嚇しているような仕草に、ホステスたちは静かになった。

「中央のバンカーに入れるとやっかいですから、二打目は注意しましょう」

大きな声で、早乙女がアドバイスする。ミハルは頷いた。

松平がティーアップした。シンとした空気が緊張感を孕む。金属音と共に、ボールが飛んだ。

「さあ、ミハルさんの番です。がんばって」

背中を押され、ミハルはティーグラウンドに向かった。すれ違いざまに、松平が怒鳴った。

「おい！」

ミハルはビクンとして、飛び上がりそうになった。彼は、ミハルではなく早乙女を睨みつけていた。

「おまえ！　どういうつもりだっ」

「はあ？」早乙女が間の抜けた声を出す。松平はつかつかと早乙女

に向って行つた。スキンヘッドの大男も、慌てて後を追つ。

「今のホール、俺が打つ前に余計なこと、言いやがつて」

「なんのことです？」

早乙女がキョトンとした顔をする。その表情がまるで子供のよう
で、松平をさらに苛立たせたようだった。

「バンカーがどうのつて、見りやわかるだろうが！ お前のせいで
気になって、あんなところに打つちまつたじゃないか」

ミハルは松平の指さすほうを見た。彼はバンカーの右隣を指差し
ていた。そこら一帯は、刈り忘れたように背の高い芝が青々と茂つ
ている。

「ああ、真ん中を避けたせいで、脇のグラスバンカーに入つちやい
ましたよね。ツイてないな。あそこからは、プロでも出すだけで精
一杯かな」

彼はまったく動じずに笑顔で言つて、ミハルに手を振つた。

「さあ、ミハルさんが打ちますから、お静かに」

松平は悔しげに舌打ちすると、ミハルのショットも見ずに草むら
に向かつて歩き出した。

キン！ と小気味良い音をさせて、ミハルのナイスショットが松
平の頭上を越えてフェアウェイど真ん中に飛んだ。

松平は二番をホールアウトすると、低い声で呻るように呟いた。

「くっそう。ダボだ」

ミハルはそばに立つ早乙女の袖を引いた。

「ダボつて、なあに？」

早乙女は黙つてにやにやしている。松平のキャディをしているス
キンヘッドの大男が、大きな咳払いをしながらこちらを睨んだ。ピ
リピリした空気に、ミハルはその質問をしてはいけなかったのだと
察した。

三番ホールは距離の短いショートホールだ。

「グリーンに乗せやすい分、グリーン上の傾斜が読みにくくて難し

いですよ」

早乙女はミハルに向かってドライバーではなく、5ウッドを差し出した。初めて使うクラブだった。

「このクラブなら、キャリーで100ヤード飛ばばあとは転がってくれます」

言っている意味が専門的でよくわからない。

「とにかく、普通に打てばいいんでしょう？」

ミハルがクラブを受け取ると、背後からスキンヘッドがいらついたように怒鳴った。

「おい、ごちゃごちゃ言うな。あんたの番だ」

「え？」

ミハルは松平を振り返った。松平は吐き捨てるように言った。

「さっきのホール、俺は7で、ねーちゃんは6だっただろ？　ちゃんと数えてろよ」

彼の顔はわずかに赤かった。ミハルは素振りをして、正面のグリーンに向かってアドレスした。グリーンの左右にアゴの高いバンカーがあるが、中央に花道と呼ばれるフェアウェイがまっすぐに伸びている。そこに打てば、旗に向かって一直線だ。どうやら自分は今のところリードしているらしい。その余裕が、ミハルをリラックスさせた。チラリと早乙女を振り返ると、彼は魅力的な笑みで頷いてくれた。ミハルの中に、根拠のない自信が湧いてくる。彼女は構えてクラブを振り上げた。そのまま美しい弧を描いてヘッドを振り下ろす。ボールは、低い弾道でまっすぐ花道に向かって飛んだ。

「エクセレント！」

早乙女の声に重なるようにして、女性たちが歓喜の声を上げた。

ミハルは自分の打った打球の行方を目で追った。グリーン手前に落ちたボールは、何度も弾んでピンに向かって転がってゆく。女性軍がざわめいた。……と、まばたきしている間に、ボールが突然視界から消え去った。

一瞬、風が止みあたりを静けさが支配した。

「い、今のは？」

間の抜けた声を出したのは、松平の子分の一人だった。ママが大きな悲鳴に似た声を出した。松平は、打ったミハル以上に、呆然とグリーンを見つめて突っ立っていた。その彼に向かって、早乙女だけが冷静に声をかけた。

「松平さんの番ですよ」

「う、ああ」喉の奥から絞り出したような声で頷くと、松平はギクシャクした仕草でミハルの横を通り過ぎてティーグラウンドに立った。力なく打った彼のボールは、左のバンカーに落ちて、目玉焼きのように砂にめり込んだ。

「さあ、行きましようか」

早乙女は松平とミハルの二人に声をかけた。周囲のギャラリーたちは、ひと足先にグリーンに向かって歩き出していた。松平はスキンヘッドの男に寄りかかるようにして、ふらふらとバンカーに向かってゆく。

ミハルは不安げにグリーン上を見た。自分のボールがどこに行っただのわからない。目を凝らして前方を見てみると、ふいにぐいと腕を引っ張られた。よろけたミハルは早乙女にぶつかってその顔を見上げた。目が合った途端にアゴを持ち上げられて、濃厚に口づけられた。ミハルの目が大きく見開かれる。この状況でキスされるなんて、いったい何事なのか？唇を離れた彼は、興奮したようにもう一度チュツと音を立ててミハルの唇をついばんだ。

「ミラクル！」

「は？」

「は？ じゃないよ。ホールインワンだってば！」

ミハルは目をパチクリさせながらグリーンを見つめた。さっきボールが消えたと思ったのは、カップに入ったからなのだと、ようやく脳が理解した。

「う、うそ！」

「うそじゃないよ。さあ、行ってみよう！」

ミハルと早乙女がグリーンの近くまで行ったとき、松平がようやくバンカーからボールを出したようだった。彼は砂だらけになったクラブを、芝の地面に叩きつけた。

「ああ！ つまんねえ！」

松平は声を裏返して叫んだ。グリーンを遠巻きにしているホステスたちがざわつく。彼は熊のようにうろろと自分のボールのまわりを行ったり来たりしている。その顔色が妙に白っぽく見えて、ミハルは思わず声をかけた。

「松平さん、大丈夫ですか？」

ホステスたちの私語がピタリと止み、松平の動きが止まった。そのまま彼は首だけをミハルのほうへ巡らせた。その様は、どこからくり人形に似ていた。松平の背後に居たスキンヘッドが、上ずった声を出した。

「お、おい！ おまえ、ナメんじゃねえぞ！」

「は、はい？」

ミハルは本能的に二、三步後ずさった。スキンヘッドは背負っていたキャディバッグを放り出すと、ミハルに向かって突進してきた。早乙女がミハルを背中に庇って叫んだ。

「ミハルさんに、手を出すな！」

スキンヘッドが早乙女に掴みかかる。巨体にのしかかれて、早乙女とスキンヘッドが芝の上にもつれあって倒れた。見ていたホステスたちから、悲鳴が上がる。

「やめろ！」

轟くようなドスの効いた声が響き亘った。続いてスキンヘッドの巨大な尻に、SWと書かれたクラブが振り下ろされた。

「ぎゃひっ！」

スキンヘッドは奇妙な声をあげて、尻を押さえた。そのまま芝に仰向けで転がり、天を仰いで白目を剥いた。何が起きたのかわからない様子で、早乙女が頭をふりながらゆっくりと身を起こす。ミハルは早乙女の無事を確認すると、スキンヘッドを見て、次いでSW

のクラブを片手に仁王立ちする松平に視線を当てた。松平は怒りの形相でスキンヘッドの巨体を見下ろして呟いた。

「みつともねえマネ、するんじゃないねえ！ このデブ！」

彼は倒れたスキンヘッドを足先で軽くつつくようにして蹴った。

反応はなく、大男は尻を押さえたままで完全に気絶していた。

誰も口を開かず、緑の芝に転がった巨体に注目していると、松平が他の二名の子分に向かって怒鳴った。

「おい、コイツを連れて行け」

「は？」茶髪の若いほうが首をかしげた。松平はいらついたようにキイキイと喚いた。

「早くこいつをどうにかしろって言ってるんだよ！ この役立たずが！」

二人の子分ははじかれたように動き出した。松平は自分のゴルフバッグを拾い上げると、低い声で言った。

「緊急事態だ。ラウンドは中止する」

バッグを担いでカートに戻る彼の背中に向かって、ミハルは叫んだ。

「中止って、どういうこと……」

皆まで言う前に、早乙女が彼女の言葉を遮り、よく通る声で確認する。

「この勝負、あなたが降りたということで、いいんですね？」

松平は背を向けたままで怒鳴り返してきた。

「し、仕方がないだろう。ケガ人がでたんだからな。今回のことは、なかったことにしてやる！」

「なかったことって、コンペも私のことも、ゼーんぶってことですよね？」

念を押すようにミハルが問いかけると、松平はため息まじりに言った。

「ああ、そう言っただろう？ ねえちゃん、何度も言わせるんじゃないよ」

「でも……」

何だか中途半端な結末に、釈然としない。もうひと言声をかけようとしたとき、早乙女が大きな声で言った。

「お疲れさまでした！」

彼が爽やかに微笑むと、松平たちを乗せたカートは、逃げるようにカート道を逆走していった。早乙女は背後のママたちを振り返った。ミハルも続いて振り返ると、ホステスたちも、オーナーも、狐につままれたようにポカンと突っ立っていた。

「……というわけで、問題解決みたいです。みなさんも、お疲れさまでした！」

早乙女の声に、彼女らはようやく呪縛から解けたようだった。ママがぱちぱちと拍手すると、それに皆の拍手が重なった。

「ミハルちゃん、お疲れ様でした。本当に、よくやってくれたわ！」
ママがミハルの元に走って来た。

「ミハルちゃん、すごい！」

「がんばったねえ」

ホステスたちも集まってきた、ミハルは訳がわからぬままにもみくちやになっていた。

「本当に、終わったの？」

カオリたちの頭越しに早乙女を見ると、彼はニッコリ笑って頷いてくれた。

ひとしきり喜びあったあと、ママたちギャラリーが、ひと足先にコースを去って行った。真昼の三番ホールは心地良い静寂に包まれた。ミハルはほうと大きく息を吐いて、ゆっくりとカートに向かって立ち去ろうとした。すると、グリーン上で早乙女が手を振った。

「ミハルさん、来て」

旗に手をかけて立っている早乙女の元へと歩いてゆくと、彼は足元のカップを指差した。

「あ……」

のぞくと、中にボールが入っていた。

「きちんとボールを拾って、そこで初めてホールインワン成立なんですよ」

早乙女はにこりと笑うと、付け加えた。

「さあ、最後まできちんとプレイしましょう」

ミハルはしゃがんでゆつくりとボールを拾い上げた。ようやく、じわりと嬉しさがこみあげてきた。ボールを握り締めて佇んでいると、早乙女が拍手をしてくれた。そういえば、ママたちが拍手をしてくれたとき、彼はしてくれなかったなと思った。最後までキチンとコーチらしく指導してくれる彼を、とても頼もしく思う。そのことを伝えようとする、先に彼が言った。

「ミハルさん、おめでとう。本当によかった」

真摯な彼の眼差しに、ミハルは言いたかった言葉を見失ってしまった。偶然が偶然を呼んだだけのような気がする、なんだか妙に照れくさかった。

「素直に喜んでもいいのかしら？」

見上げると、午後の太陽を背に早乙女がVサインをした。若草の香りを孕んだ風が二人を包んで吹き抜けた。

ママに送ってもらい、ミハルは自宅マンションへ帰って来た。早乙女も一緒だ。小さなテーブルに向かい合ってコーヒーを飲みながら、二人で明日からの予定を話し合った。気を良くしたオーナーが、なんと今日から三日間、正式にミハルに休暇をくれたのだ。まったく天地がひっくり返るほどの樁事だと思った。

「ねえ、私は休みだけど、早乙女くんは仕事どうするの？」

ああ、まあ大丈夫でしょう、などと、早乙女は曖昧に言葉を濁す。ミハルは彼の様子に妙な引つ掛かりを覚えた。そういえば、昨日といい今日といい、ずっと彼をつき合わせてしまっていたことに、今さらながらに気付いた。

「まさか……？」

ミハルは嫌な予感がして早乙女に詰め寄った。

「まさか、仕事、クビになったとか？」

早乙女は黙って笑っている。ミハルは何だか腹が立ってきた。何も言わない彼にも、そして、彼に甘えっぱなしだった自分にも。

ミハルはコーヒーカップを持つ手に、ぎゅっと力を込めた。彼を巻き込みたくないとかなんとか思いながら、結局自分のことで精一杯で、本気で早乙女のことを気にしていなかったのが、とても悔やまれた。

「……ごめんなさい。ごめんなさい、あたし」

早乙女が慌てたように、俯くミハルの肩をゆすった。

「ちよつと、ミハルさん、何で謝るの？」

「だって、私のせいで、早乙女くんが」

「いや、オレはべつに大丈夫だから。あそこでは、ちよつとした義理でコーチしてただけだし」

「え？」

「だって、オレの本業、コーチじゃなくて、ツアープロだから」

ミハルはがばつと顔を上げた。ツアープロって、なんだ？ 疑問が顔に出ていたらしく、彼はミハルにわかるように言った。

「テレビでゴルフ中継やるでしょう？ ああいう試合に出る人だから。オレ」

ミハルの目が点になった。彼は部屋の隅に放つてあるゴルフ雑誌を引き寄せると、ぱらぱらとめくって差し出した。

「まだ日本では優勝したことないからさ」

そう言っただけが示したページには、彼の写真と共にこんな記事が載っていた。

『注目の新人選手、オーストラリア国籍の日本人・早乙女ケイ（21）いよいよこの夏、ジャパンツアーに参戦』

ミハルは雑誌を抱えてのけぞった。

「え、ええええ？ マジですか？」

明日のデートの時間だけ約束すると、ミハルはまだ明るいうちに「疲れているから」と無理矢理早乙女をマンションから追い出した。彼は少々ふて腐れていたが、意外にも真面目だった。これから練習場へ行つて練習するので、車で送つて欲しいと頼まれた。

「プロつて言つたつて、オレなんかまだまだだね。とにかく、練習しなきゃホールインワンだつて出ないよ」そう言つて、早乙女は笑った。

ミハルは彼を送つた後で、国道沿いの大型書籍店へ寄つた。普段絶対に立ち寄らないスポーツ雑誌のコーナーに向かつて一目散に突き進むと、目当てのゴルフ雑誌が何種類も販売されていた。そのうちの何冊かを手にとつて、ぱらぱらとめくる。

「あ……ここにも……」

早乙女ケイの記事は大抵の雑誌に載つていた。アマチュア時代の戦績は輝かしいもので、18歳でプロデビューしてから、オーストラリアで二度の優勝経験がある。今回、昨年度の獲得賞金ランキングで上位に入つたことから、日本での試合に招待されたのだと雑誌の記事に書かれていた。コンスタントに上位の成績を修めなければ、獲得賞金額は上がらない。……ということは？ ミハルは声に出して呟いた。

「彼つて、真正正銘のトッププロなんじゃないの」

他の雑誌を見ると、定番の 王子 というニックネームが付けられていた。しかも、ものすごく安易なものだった。

イケメン王子。

ミハルは雑誌を元の場所に戻し、大きくため息をついた。彼の来日の記事は載つていなかったから、たぶんプライベートかお忍びで日本に居るのだろう。ツアーが始まれば日本各地を転戦し、そのたびに彼の美貌が毎朝テレビのスポーツコーナーを賑わすに違いない。知らなかった事とはいえ、ミハルは激しく後悔していた。彼と深い関係になつたことを。いや、その前に、彼を好きになつてしまったことを。

彼の輝きは、このちつぽけな島国の太陽ではなく、南半球の雄大な地平線を照らす巨大な太陽なのだ。彼の笑顔も才能も、自分一人が独占できるようなレベルのものではないことを、ミハルは瞬時に悟った。

ミハルさんは、オレのものだよね。

ミハルの胸に顔を埋めて、甘えるように言う彼の声が耳の奥に聞こえてくる。

そうよ、私はあなたのものになれる。とても簡単に。でも、あなたは私のものには、決してならない……

ミハルは重い足取りで書店を出た。車に戻ってエンジンをかけると、ハンドルに突っ伏した。

早乙女ケイ。名前はカタカナで「ケイ」と書く。セックスまでしてるのに、今頃彼の名前を知ったのだと思うと、なんだかやるせなくて、ミハルは苦笑していた。

「始まったばかりなのに、ダメじゃん。やっぱり私は、彼の隣に立てない。だって私はただのホステスだし……それに……」

ミハルは唇を噛んだ。不思議と涙は出てこなかった。

小説にはやはり起承転結があったほうがいいな、と思う。特に「転」が大事。

8

翌日、デートの待ち合わせは、ミハルのマンションからほど近いイタリア料理のレストランだった。部屋まで迎えに来るという彼の申し出を断ってミハルが指定した店だ。人気の店だけに、ランチタイムは席がいっぱいになってしまふ。ミハルは早めに出かけてゆき、窓際の席をキープした。

公園に面した窓からは、緑の木々とその足元に植えられたカラフルな春の花たちが良く見える。窓が開いたならば、きっと小鳥のさえずりも聞こえるだろうなと思った。今までのミハルは、緑を見ても鮮やかで綺麗だな、くらいにしか思わなかった。けれど、ゴルフ場の緑の中で早乙女と過ごしたことが、ミハルの感覚を大きく変えていた。太陽の熱を、風の音を、緑の薫りを、鳥や虫の気配を体全体で感じて過ごす贅沢を知った。暗く冷たい夜の世界の生き物が、温かな真昼の光を知ってしまったのだ。一度知った温もりを手離すのは、思った以上に難しいことかもしれない。

ミハルは公園を突っ切ってくる人影を見つめた。ジーンズに包まれた長い足が、遊歩道の石畳を軽やかに踏む。

早乙女ケイ……。あなたのために必要なことならば、私は……

木製の扉を押し開けて、早乙女が入ってきた。彼はすぐにミハルを見つけると、ニコツと笑って会釈した。

「おまたせ」

正面の席についた彼を、ミハルは眩しげに見つめた。今日の早乙女は、白いコットンシャツの上に黒い薄手のレザージャケットをふわりと羽織っている。日に焼けた額にかかる黒髪が、陽射しに透けて艶やかに光った。服装のせいか、彼はいつもより大人びて見えた。「見とれてる？」

にまっつと笑われて、ミハルは慌てて目を逸らした。こんなことではいけないと思う。気合を入れて早めに来た意味がない。

「ホールインワンの記念に、ご馳走してくれるんでしょう？」

ミハルが傍らのメニューを差し出すと、彼は受け取りながら首を横に振った。

「違いますよ。ホールインワンは、それをやった人が周囲の人におごるんです。いわば、ラッキーのおすそ分けですね」

彼はメニューを手に取ると、「うまそー」と呟いてぺろりと舌なめずりをした。あどけない子供のような表情が垣間見え、ミハルの心が揺らぐ。平静を保ちながら、会話を進めなければと、彼女は胸の内で自身を叱咤した。

「じゃあ、何を理由にご馳走してくださるのかしら？」

早乙女はキョトンとした顔をしてミハルをじつと見た。

「理由なんて、ないです。デートのとき恋人にご馳走するのは当然ですから」

屈託のない笑顔に、引きずられそうになる。今日一日、別れを引き伸ばすなんて、自分の心が持ちそうになかった。ミハルは目を閉じて、大きく息を吸い込んだ。そして、ゆっくりと目を開けながら、夜の顔を作ると低い声で言った。

「その、恋人っていうのが、ちょっとね」

メニューに見入っていた早乙女が、何事かと顔を上げた。彼の切れ長の瞳をとらえながら、ミハルは気だるそうな顔を作った。

「私、やっぱり年下は興味ないのよね」

彼の目が大きく見開かれた。ミハルは、ヴィトンのポーチからタバコを取り出した。くると二回ほど箱を回し、赤く塗った爪でパッケージのあけくちを探し当てて、フィルムをはがした。箱の蓋を押し開け一本取り出してワイン色の唇に咥えると、再びポーチの中に手をつ込んでライターを探った。早乙女の眉間にシワが寄る。それでいい。たぶん、彼はこういうタイプの女が嫌いなはずだ。昨日読んだ雑誌のインタビューで書いてあったのだ。

記者　好きなタイプの女性は？

早乙女　好きになった女性がタイプ。

記者　（笑）模範解答ですね

早乙女　はい。んでもって、今はゴルフが恋人です（爆）

記者　じゃあ、嫌いなタイプは？

早乙女　嫌いなのは、だるそうな女性かな。なんか、覇気がないのは嫌ですね。それと、僕は酒が苦手ですから、大酒飲みもイマイチですね。

ミハルは苦勞してようやくライターを見つけると、タバコに火をつけようとした。早乙女の視線がミハルの頭上を彷徨ったとき。

「あの……お客さま。ここは禁煙席でございます」

店のウェ이터がミハルの肩をそっと叩いた。ミハルは「あっ」と言っ、啞えていたタバコを口から落とした。

ウェ이터がミハルの落としたタバコを拾って立ち去ると、早乙女がプツと吹き出した。ミハルは、大量の汗が背筋を流れるのを意識した。

彼は静かに立ち上がると、ミハルの腕をとって席から立たせた。

そのまま何も言わずに彼女を店から連れ出すと、緑が清々しい公園に連れて行った。ミハルは俯いたまま、彼のあとを大人しくついていった。眩しい陽射しの元で見ると、真っ赤に塗った自分の爪や、ラメ入りの黒いタイツが妙に浮いて見えた。

「座ってください」

彼は手のひらでベンチのホコリを払うと、ミハルを座らせた。自分も隣に座ると、彼女の手からポーチをひったくった。

「ちよつと！」

ミハルが抗議の声を上げると、早乙女は中からタバコとライターを引っ張り出した。彼は一本とりだすと、自分の口に啞えて火をつけた。ミハルはぼうつと煙を吐く早乙女を見つめた。彼にタバコは似合わないと思ったが、そうでもないかもしれないなどと、関係のないことが頭の中を回る。早乙女はタバコを啞えたまま、ミハルを

振り向いた。

「吸いたければ、どうぞ。あなたと同じで、オレも今初めて吸ったけど、むせたりしないみたいですね」

え……？ ミハルは手元に返されたポーチとタバコを見つめた。生まれて初めて買ったタバコの箱を睨みながら不思議に思う。

「なんで？」

早乙女は煙を吐きながら微笑した。

「だって、普通タバコ吸うときは、ライターも一緒に出すでしょう？それに、ミハルさんのパッケージの剥き方といったら……」

クククと笑われて、ミハルは体中の血液が顔に集まってきたように感じた。

「……それに」早乙女はなおも笑いながら続ける。「いきつけの店なのに、自分の座っている場所が禁煙席か喫煙席かもわからないなんて、おかしいじゃない？」

そう言つて、彼はミハルの手元からタバコの箱を取り上げた。自分の吸殻をベンチでもみ消して元の箱に押し込むと、すぐそばのくずかごに箱ごと捨ててしまった。がっくりと落ちたミハルの肩に、早乙女がそつと手を乗せた。そのまま横顔を覗き込まれて、ミハルは恥ずかしさにぎゅっと目を閉じた。何もかも見透かされている、そう思った。彼は視線をミハルの顔から空に向けた。つられてミハルも上を向く。青空に、霞がかかったような雲がたなびいている。ミハルは大きく息を吸い込んだ。早乙女の座る左側面から、ゴルフ場で感じたような温かいオーラが流れてくるのがわかる。これからきっぱりと言わなければならないことがあるというのに、なぜだかまったりとした空気に包まれてしまい、ミハルは戸惑った。言葉を探していると、早乙女がぽつりと言った。

「プロになつてから、オレの周りには二種類の人間が寄り付くようになりました。利害関係を築こうとするものと、足をすくおうとするもの。そのどちらも、油断ができないわけなんだけどね」

彼の口調は淡々としているが、どこか寂しげだった。

「なんか、疲れちゃってさ。それで逃げ出して来たわけデス……オレは」

何故、早乙女はこんな話をするのだろう？

彼は、ミハルに向ってこう言った。

「早乙女ケイが何者かわかった途端、それまで冷たかった人がいきなり優しくなったり、親しくもないのに、急に友だち面しだすヤツが居たり、ね。まさに人間不信ってやつだな」

ミハルは黙り込んだ。別な意味で彼の気持ちが変わったからだ。彼女の隠していることを知ったとき、誰もが後ずさるようにして離れていったのを思い出す。ぼんやりしていると、ふいに膝に乗せていた手をぎゅっと握られた。その力強さと温かさに、ミハルは心臓がどきりとした。

「でも、ミハルさんはそのどちらでもないんだよね。……あなたは、どうしてオレから離れてゆこうとするの？」

ミハルは握られた手から彼の方へと顔を向けた。強い眼差しで射すくめられて、動けない。

「……何がそんなに怖いのか？」

「あ……」

ミハルは途方に暮れながら、必死で言葉を探していた。俯いた目に、自分のワンピースの柄が飛び込んでくる。大きな柄は醜悪な紫で、裾についた安っぽい黒のレースが、午後の太陽の下でみつともないほどに落ち着かない気分させる。

「好きになつたばかりなんだから、何をしたって嫌いになんかならないって。……無駄なこと、するな」

わかってねえな、と言って、早乙女は白い歯を見せた。ミハルは懸命に言葉を絞り出す。

「わかってないのは、あなたのほうよ。ただ好きだ好きだって、それだけでどうにかなるのは子供の恋愛だけよ。大人はもっと難しいものよ」

ふーん、と気のない返事をしたが、彼は握った手を離そうとしな

い。ミハルは振り解こうとして手をもぞもぞさせた。すると彼がいきなり放り出すようにして彼女の手を放した。汗ばんだ手のひらが、急速に冷えてゆく。ミハルは思わず頼れるよすがを求めて手触りの悪いレースの裾を握り締めた。

「オレさ、一回ラウンドすると、だいたいその人のこと、わかるんだよね」

彼の言葉に、ミハルはその横顔を見つめた。心に浮かぶ疑問が顔に出ていたようだった。彼はこちらを向くと、レッスンするときと同じ、真面目な声で言った。

「その人の生い立ちや隠れた趣味なんかじゃないよ。そうじゃなくて、性格とか物事に対する考え方、本質みたいなものことだよ。ゴルフって、そういうのがすごく顕著なスポーツなんだ」

「私の、本質？」

「そう。ミハルさんはとてもストレート。よく言えば素直な人。レッスンを受けてすぐに上達するのは、素直な証拠。そういうひとは、家庭的ないい奥さんになる」

ミハルは思わず笑ってしまった。

「バカ言ってんじゃないわよ。あたしはホステスよ。理想を押し付けるのは止めてちょうだい」

これは本音だった。くだけた雰囲気、早乙女も笑う。笑いながらも彼が言った。

「その良い奥さんタイプのミハルさんが必死になるのは、守らなくちゃならない大切なものがあるから……でしよう？」

彼の言葉に、ミハルはドキリとした。

「暴力団からオレを守ってくれたし」

「あ、あれは……」口ごもってからミハルは虚勢を張った。

「あれは、あたし自身が賭けの対象だったからよ」

「それでも、オレは守られました。もし、賭けゴルフに関わっていたら、たぶん選手生命は終わっていたと思います。それでもオレはいいと思ってました。……あのときは、いいと思ったけど、でも今は、

感謝してます」

ミハルはふうと大きく息を吐いた。

「……わかつているなら、よかった」

もう、私にかまわないほうがいい……。またいつ迷惑がかかるとも知れないのだから。早乙女ケイがスポットライトを浴びればそれだけ、自分の存在が黒々と影を落とすことは明白なのだ。そのくらい、いくら子供の彼でもわかつているだろう。それならば、感謝されて、それでさっさと終わりにしよう。彼の言うとおりだとすれば、自分はストレートな人間なのだ。ためらったり、小細工したりするのは似合わない。

「感謝しているならちょうどいいわ。もう、私の前に現れないと誓って」

ミハルの投げた言葉を、早乙女は沈黙でもって受け止めたようだった。彼はミハルの顔に視線を置いたまま、何か考え込んでいる様子で、口を引き結んでいる。何も言わない彼に、ミハルは逆に不安になった。自分の言葉が聞こえなかったのだろうか？ そう思ったとき。

「ケイ！」

ミハルと早乙女、二人の間の沈黙は、甲高い女性の声で破られた。早乙女がさつとベンチから立ち上がった。ミハルもつられて立つ。

声のした方角を見ると、桜の木立を駆けてくる男女の姿が見え隠れした。黒のパンツスーツにトレンチコートの女性は、大きなボストンバッグを肩に背負い、息を切らして駆けてくる。高い位置でひとつに纏め上げた髪がほつれて、風になびいていた。男性のほうは大柄でサングラスをかけて、やはり黒っぽいスーツを着用している。「やばっ！」隣で小さく彼が舌打ちするのが聞こえた。先に来た女性性が二人の前に立ちはだかるようにして止まると、はあはあと荒い息を継いだ。サングラスの男性がその背後に影のように寄り添う。

男性は肌の色が白く、髪はきれいな栗色だ。あきらかに西洋人の顔立ちをしている。

「ケイ！ やつと見つけたわ」

「あ！ キムさん！」

キムと呼ばれた女性は、30代くらいに見えた。落ち着きのあるキャリアウーマン風の外見だが、とにかく今は興奮しているようで早乙女に向かつて早口の英語で激しく捲くし立てる。こちらは東洋系の顔立ちだが、どうやら日本人ではないようだ。

キムをなだめようとしているのか、早乙女が大げさなゼスチュア混じりに発音の良い英語で応答する。彼の声音はどこか焦りを含んで聞こえた。

しばらくのやりとり　　というか、まるでケンカのような　　が続いたあとだった。サングラスの男が早乙女の腕をつかんで取り押さえた。彼があきらめたように黙る。キムと呼ばれた女性は、何か声高に喚いたあとボストンバッグを肩から下ろし、一冊の雑誌を取り出した。それを早乙女に投げつけると、二言、三言声をかけてくるりと背を向けた。あつけにとられてその様子を見ていたミハルに雑誌を拾い上げた早乙女が頭をかきながら言った。

「ゴメン、ミハルさん。ちょっと、急用ができた。話の続きはまたにしよう」

ミハルは気になって尋ねた。

「あの、こちらの方は？」

すると、後ろを向いていた女性がくるりとターンするように体ごと振り返った。

「はじめまして。私、キム・フロレンスといいます。ケイのマネジメントをしております。こちらはSPのマイケル」

流暢な日本語でそう言っ、彼女は名刺を差し出した。ミハルは名刺を受け取りながら、自分の名刺を出そうとしてやめた。ホステス「ミハル」の名刺を出すのは、自分ではなく、彼のためによくないような気がした。受け取った名刺に目を落としているミハルに、キムがきつい調子で言った。

「ケイはご覧のとおり子供です。失礼なことをしたかもしれません

が、どうかご容赦を」

「……失礼なこと？」

ミハルが首をかしげると、キムは彼女の手に分厚い封筒を押し付けた。何がどうなっているのかよくわからない。ミハルはずしりと重い封筒を手にしたまま、ぽかんとキムの青みがかった目を見つめた。

「キムさん？ 何してんだ？」

早乙女は、キムとミハルの間に体を滑り込ませるようにして割り込んできた。ミハルを背に庇い、彼女から隠すようにする仕草に、何故だか苦いものが込み上げてきた。キムは早乙女の体越しにミハルに向かって声をかけた。

「……それでどうかお願いします。意味、わかりますよね？」

意味などわからない。というよりも、いったいどうなっているのか、状況がまったく理解できなかった。

「ちよつと、キムさん？」

早乙女はキムに詰め寄ろうとしたが、SPによってあっさりと引き剥がされた。抵抗する早乙女の手から、雑誌が落ちる。SPは早乙女を拘束して、公園の出口に向かって歩き出した。

「ちよつと、待てつて！」

早乙女が喚いている。大男に引きずられてゆく彼をぼんやりと見送っていると、キムが足元に落ちた雑誌を拾い上げた。

「……ごめんなさいね。驚かれたでしょう？」

ミハルは焦点の定まらぬ目でキムを見た。彼女が、意外に背の高いことに気付く。キムはミハルを見下ろしながら雑誌のページを開いて見せた。そこには、ラブホテルに入ってゆく二人がバッチリ写っていた。

「これは？」

ミハルは問いかけるようにキムを見た。逆に彼女が問う。

「これ、あなたとケイですよね？」

ミハルは頷いた。隠すようなことではない、と思う。でも、なぜ？

ミハルの心に答えるかのように、キムは雑誌のページに目を落としながら言った。

「確かにケイは芸能人ではありません。プライベートは拘束できない。でも、彼はプロゴルファーです。彼には、彼を支援してくれているスポンサーという大事なパトロンが居るのです。だから、こういったマイナスイメージは、とても困るんです」

「あ、あたしは知らなかった……」

そうだ、今なら早乙女の立場はわかっている。でも、この写真を撮られたときは知らなかったのだ。ミハルはハッとして手元を見た。厚みのある四角い束感は、まぎれもなくお金だろう。だから、これを……？

衝撃はなかったが、虚しかった。ミハルは封筒をキムの手に押し戻した。

「お金なんか、いりません。私はべつに……」

「いいえ、受け取ってくださいしないと、こちらが安心できないの。……それに、もしかしたら、あなたにご迷惑をかけてしまうことになりそうだから」

そう言って、彼女は手元の雑誌に金の入った封筒を挟むと、それごとミハルの胸に押し付けてきた。

「迷惑？」

雑誌を手に問いかけるミハルを、冷やかな目で見下ろして、キムは「読みなさい」というようにアゴで示した。そのまま彼女は軍隊のようにくると回れ右をして、元来た道を大股に帰って行った。ミハルはひとり取り残されて、公園のベンチに再び座り込んだ。今しがたの一幕を思い返すと、ふいに震えが襲ってきた。それが、なんのための震えなのかわからない。それでも、最後にキムの見せた冷やかな眼差しが、抜けない楔のようにミハルの心に鋭い痛みを打ち込んだ。同性だからこそ、その視線に込められた、揶揄するような侮蔑、嘲り、嫌悪などの感情がひしひしと伝わってきた。

大切ナ「ケイ」ニ、汚ラワシイ手デ、サワラナイデ。

キムの目は確かにそう言っていた。彼女に言われなくても、ミハルはそうするつもりだった。もう、早乙女と会わないようにしようとしていたのに。自分はバカでもないし、子供でもない。だから自分の口から彼に「ありがとう」と「さようなら」をきちんと言いたかったのだ。まさにそう言おうとしていたのに。ミハルは膝に置いた雑誌に目を落とした。金の入った封筒がはさまったページを読んだ。

『イケメン王子、お忍び帰国で深夜デート。まさかのお相手は美人ホステス』

いったい誰が撮ったのだろうか？ 自分の職業まで書かれていることに、寒気を覚えた。でも、たしかにこれではマイナスイメージだろう。ミハルはため息をついた。あの時の自分は、暴漢に襲われた後だった。それで気が動転して早乙女を頼ったのだ。結局ホテルでは、やることはやってしまったわけだが、そもそもホテルに入ったのには、それなりに理由があった。それをデートなどと書かれて、弁解もできないなんて。それでも、冷静に記事を読める自分自身に少々驚く。

『彼女の肩を抱き、仲良くチェックインする王子』と書かれた写真に目を凝らす。写真を見ていると、あの夜のことが思い出された。こうして写真になってしまうと、それはまさに夢の一夜だったのだと、あきらめに似た感情が支配した。自分は、王子様に愛されて夢を見たシンデレラだった。そして、夢が醒めて小汚いシンデレラは成すすべもなく身を引く。

「だって、私はガラスの靴を置いてこなかったし……」

ミハルは何気なく続きを読み進めた。イケメン王子のプロフィールに続いて、あのゴルフ練習場で『レスンスプロごっこ』をしていたことがコミカルな文章で書かれており、オバちゃんたちのコメントも載せられていた。こうしてみると、本当に早乙女が有名人なのだということと同時に、ずっと見張られていたのだなと、少々気の毒に思った。が、次の文章で、ミハルの顔から一気に血の気が引い

ていった。なんとそこには、ミハルが店のママにも隠していた事実が公然と書かれていたのだった。

『お相手の女性は、家族が関東拘置所に留置されているとの情報も寄せられており、記者としては王子のあまりの悪趣味に天誅を加えるつもりで記事にしたしだいです。王子の行く末を見守る記者の愛情ととっていただけたらよいのですが』

ミハルは震える指先で苦勞しながら雑誌を閉じた。札束の入った封筒ごと雑誌を胸に抱えると、ふらりとベンチから立ち上がった。力の入らない足元で、公園の石畳を踏んで一歩、また一歩と歩く。だんだんと息苦しくなつて、はあはあと大きく口を開けて呼吸をした。早く、部屋に帰りたいかった。息苦しさで混乱で、涙がぶわっと溢れてきて、視界が歪んだ。涙を止めようと振り仰いだ空に、水に沈んだような昼の月が、ほの白く浮かび上がって見えた。

ミハルの事情があきらかになる。そのとき早乙女は？

9

翌日、ミハルは車を運転して関東拘置所に行った。そこには、ミハルの実弟が収監されている。罪状は殺人。しかし、弟は逮捕時から容疑を否認しつづけていた。彼は一審判決を不服としており、無実を訴えて今も裁判は継続中だった。両親が亡くなってしまったから、ミハルにとって弟はたった一人の身内だ。ミハルはさすがのような思いで、裁判の行方を見守っているところだった。

国道を南下して、海沿いの道を目指す。曇天の下、春の海は鉛色に見えた。もう、何度この道を往復していることだろう。右折車が多い中、ミハルは丁字路を左折するためにウイinkerを出した。左折後、後続車が途切れた。海沿いの道は、しだいに幅を狭め、山へ向かう上り坂になっていった。道路沿いの建物も急に疎らになってこの先には弟が収容されている施設だけが建っていることを思い出させた。一日数本しか通らないバスを利用するのが時間的に困難で、ミハルは仕方なく車を買ったのだ。ミハルにとって、車での外出は決して楽しいものではなかった。

高い塀に囲まれた建物の手前にある駐車場に乗り入れたとき、壁の鉄扉が開いた。扉から出て来た人物を見て、ミハルはハッとした。制服を着た警備の男性と共に現れたのは、昨日公園で会った、早乙女のマネージャーのキムという女性だった。何故ここにいるのだろうか？ 例のゴシップ記事の真偽を確かめに、わざわざ来たのだろうか？ そうとしか考えられないが、だとしたら、失礼極まりないし、ひどく迷惑な話だ。ミハルは車を降りてドアをロックすると、キムのほうへ歩いて行った。ミハルに気付いてキムが足を止めた。「こんなところで会うなんて、あなたの知り合いもこちらにいらっしゃるのですか？」

たつぷりの嫌味を込めて、ミハルは言い放った。キムは、嫌悪の表情を隠そうともせずミハルのほうへ歩いて来た。カツカツとヒールがアスファルトをこする音が、しだいに大きくなる。彼女はとうとうミハルの目の前に立った。彼女の刺さすような眼差しに負けまいと、ミハルは精一杯の言葉を投げた。

「私に、何か言い忘れたことでも？ それとも、昨日のお金を返して欲しいですか？」

キムは明らかに怒ったようだった。彼女の色白のこめかみに青筋が立ったのを見つけて、ミハルはちよつとひるんだ。しかし、キムは淡々とこう言った。

「あの子もバカね。まったく、呆れ果てたものだわ。突然行方知れずになったと思えば、こんな女にひっかかって。これから大事なシーズンが始まるっていうのに」

ミハルは眉根を寄せた。軽蔑したような口調で言う、『こんな女』というフレーズが、やけに耳に残る。ミハルは言い返した。

「私は、自分のことはわかっています。だから、もう彼とは会わないわ。それで満足でしょう？ あなたこそ、こそこそと人の周囲を嗅ぎまわるようなマネ、しないでください」

キムは言葉に詰まったようだったが、大きく息を吐くと低い声で言った。

「……あなたが大人で、よかったわ。お金は返さなくていいわよ。なにかと物入りでしょうからね」

悔しかった。だが、弟の裁判には金がかかる。それは、失意のうちに亡くなった両親の保険金を当てても足りないほどの金額だった。昨日の金は手切れ金だが、オーナーの言葉を借りるならば、どうやって稼いだって、金は金だ。ミハルは俯くと声を絞り出すように言った。

「お金は必要です。だから、お借りしておきます。でもきつと返しますから」

ミハルは一礼すると、キムの脇をすり抜けた。背後から声がかか

る。

「ねえ、あなた」

振り向いたミハルに、キムが言った。

「ケイが、たぶんまた訪ねていくかもしれない。それでも、会わないでいてくださる、そういうことですよね？」

「それは……」

そんなに会わせたくないのなら、そちらだって彼を引き止める努力をすればいいのに。そう思ってからミハルは苦笑した。それこそ、彼と自分の問題だったなと思い直した。

「努力します」

目を伏せると、キムがふつと鼻先で笑った。

「言っておくけれど、彼は本当に子供よ。わがまま言うけれど、すぐにけるつと忘れるから、あなたもそのつもりでぴしゃりと拒絶してくださいね」

妙にわかった風な口をきくキムに、むかついた。自分と早乙女、二人のことをバカにされたような気がする。返答に困ってしまい黙っている、キムはククと笑って言った。

「彼は、あなたの中に母親を見てるのよ。だって、彼の母親もホステスだったからね」

「え？」

ミハルさんは、オレのものだよな？

出会って間もないミハルに、かなりの執着を見せていたことを思う。彼の強引なまでの独占欲と甘えたような物言いの裏には、そういう思いがあったのだと言われれば、妙に納得してしまう。

「早乙女さんのお母さんも、ホステス……」

「ええそうよ。まあ、母親も物分りのよい人だったから、もろもろのことはお金で解決しましたけどね」

何の話なのか、興味を惹いたので、ミハルは問い返した。

「お金で、解決？」

キムは含みのある表情を見せると、口元に笑みを浮かべた。

「あの子の母親は、幼い彼を捨てたくせに、プロになった途端に何度も現れたわ。たぶん、お金の無心だろうと思って、私がうまく処理したけど。だって、親子関係のそういうゴタゴタって、やっぱりマイナスイメージでしょう？」

ミハルは目を見開いた。彼を守るためとはいえ、母親までも遠ざけたのかと思うと、呆れるのを通り越して、このキムという女性になにやら空恐ろしく感じた。

なにも、そこまでしなくても……と、出掛かった言葉をようやく飲み込むと、早乙女の言葉が思い出された。

なんか、疲れちゃってさ。それで逃げ出して来たわけです……

…オレは

なんだか胸の中がぞわりとした。早くキムから離れたくて、ミハルは逃げるようにして拘置所の建物に向かって踏み出した。

分厚いガラス越しに弟と対面した。交わす言葉はいつも決まっている。「調子はどう？」ミハルが言えば、「姉さんこそ、元気にしてるの？」と、弟はいつも気遣いの言葉を口にする。ところが今日は違った。

「姉さん、なんかとても疲れているみたいだけど、大丈夫？」

ミハルはドキリとした。確かに肉体的にも精神的にもかなり痛手を負っているが、まさか弟にそれを指摘されるとは。泣くまい、そう思っているのに、唇が震えて目の奥がじんじんと熱くなった。

「姉さん？」

気遣わしげに尋ねてくる弟に、ミハルは何度も頭を下げた。

「ごめん、ごめんね……」

なんで謝っているのかな、と心のうちで考えて、その答えにたどりつく。こんな優しい弟が、殺人を犯すはずはない。そう、信じていたはずの自分が、心のどこかで彼のことを信じきれないのだと気付いた。弟の事を雑誌で公表されてひどく慌てたことがそれを裏付けている。弟の無実を信じて裁判をしているというのに、自分

自身が彼を疑っているということに気付いて、ミハルは衝撃を受けた。早乙女のことにしてもそうだ。自分から別れを言い出そうと思つた裏には、彼の気持ちを信じきれない部分があつたからだ。

早乙女の立場がどうのと気にするとき、自分は弟のことを完全に犯罪者あつかいしてしまつていて、そんな犯罪者の家族である事実を早乙女が知つた時、なんと言われるか。それが怖くてたまらないのだ。容疑を否認しつづける弟を、肉親ならば信じて応援してやらなければならないと、何度も自分に言い聞かせているのに。前回会つたのはいつだったか。弟はまた少し痩せたように見えた。

「あのね、まとまつたお金ができたから、もうちよつとえらい弁護士さんに、あなたのことを相談してみようと思つただけよ」

「え？」弟は、険しい顔でこちらを見つめた。

「もう一度、きちんと調べてもらつて、きつと無実を勝ち取つてあげるからね」

ミハルは涙を拭いて、懸命に笑顔を作つた。半分以上あきらめていくせに、自分はいつたいどんな顔をして言っているのだろうか？弟は「ありがとう」と言つたが、同時に「ムリをしないでね」と寂しげに笑つた。

マンションの地下駐車場に車を停めてエレベータで自宅のある階まで上がった。開いたドアから顔を出して通路を見渡すと、予想通りというべきなのか、早乙女が居た。

部屋の前で壁に寄りかかつていた彼は、ミハルの姿を認めると初めて会つたときのように口角を片方だけ上げてニツと笑つた。何だか大型犬に似ている気がする。彼の背後で見えない尻尾がぱたぱたと揺れているようだった。

「おかえり」

天真爛漫な笑顔に、ミハルは思わず苦笑した。彼は近づいてくると、弄んでいた自分の携帯を、ミハルの顔の前でちらちらと振つた。ミハルはなるべく落ち着いた声を出すように努力した。

「運転中はいつも電源を切っておくことにしているのよ」

ふーん、と彼は言い、キーを取り出してドアをあけようとしているミハルの背後に立った。ミハルはふうと息を吐いた。

「もう、会わないって言ったと思うけど？」

振り向いて見上げると、彼は高い位置から見下ろして言った。

「いいえ。くわしい話はまたにしよう、そう言った気がする」

再びにまっと笑われて、なんだか緊張感がぐずぐずになってしまふ。ミハルは肩をすくめると彼を自宅に招き入れた。

玄関に入ってドアが閉まるなり、早乙女はミハルを背中から抱きしめた。長い指先でミハルのアゴをとらえて、強引に唇を重ねる。

「……んんっ……」

無理矢理な体勢に、ミハルはふさがれた口の中で抗議の声をあげた。こんなことのために部屋にあげたわけではないのだ。それをわからせるために、ヒールのかかとで早乙女の足を踏んだ。彼は「うっ」と顔をしかめてミハルを解放すると、おとなしくなった。

早乙女をリビングに座らせると、ミハルはクローゼットから数冊のノートと共にスクラップブックを引っ張り出してテーブルに広げた。彼は無言でそれらを引き寄せると、黒い表紙をめくり、挟んである新聞記事を読んだ。

『2008年4月3日未明、横菅市に住む鈴木さん宅の離れで火事があり、焼け跡から鈴木さんの長男で無職の治夫さんとみられる男性の遺体が発見された。遺体には数ヶ所の刺し傷があり、警察では殺人と事故の両面から調査をすすめている』

次のページには、翌日の日付の記事があった。

『警察は、治夫さんの事件を殺人と断定。事件の前夜に治夫さんと口論をしていたという男性の身柄を確保した』

ミハルは彼の手からスクラップブックを取り上げると、パタンと閉じた。忘れたいのに、忘れることが許されない事件だった。

「あの火事が起こる前の夜、わたしは見たの。弟が、殺された鈴木治夫という男性を、刃物を持って追いかけてゆくのを」

早乙女の目が大きく見開かれた。ミハルは彼の目を真つ直ぐに見つめた。視線がからみあった先に、ミハル自身が居る。このまま彼にすがってしまおうか、そんな思いがふと胸をよぎる。経済的にも人間的にも豊かな早乙女なら……。

ミハルは自分の考えを必死に振り払った。あの事件から今まで、他人と深く関わらずに生きてきた。けれど、早乙女はいつの間にかミハルのそばに踏み込んでいた。ほんのひと時でも陽だまりのような温もりをくれた。その彼を利用しようとするなんて、いったい自分は何ておろかなのだろう。

早乙女に、あの夜のことから全部、きちんと話しておこう。これは、決別のための儀式なのだから。

なんか、けっこう長編になってしまいました。うまく収束させることができるだ

10

その夜は、絹糸のような雨が降っていた。街路灯の明かりの中で、満開の桜がぼうつと白っぽく滲んでいた。ひと気のない住宅街は、まだ夜の9時にもなっていないというのに、シンと静まり返っていた。

後をつけられている、そう気付いたとき、自宅はもうすぐそこだった。ここ数日、誰かに見られている、そんな嫌な感じがしていたミハルは、角を曲がるとすぐに家に向かってダッシュした。

「あ！」

暗い路地から伸ばされた手が、ミハルの腕をぐいと引いた。そのまま路地に連れ込まれ、ミハルはパニックに陥った。

「いやっ」声はかすれて、喉に張り付く。

「騒ぐと殺す」くぐもった男の声がした。目の前にかざされたナイフの残忍な輝きに、彼女の体が凍りつく。押し倒されてのしかかられたとき、助けが来た。

「姉さん！」

弟の声がして、ミハルは呪縛から解き放たれた。のしかかる男を思いつきり突き飛ばすと、弟が不審者を取り押さえようとした。雨に濡れた路地裏で、弟と見知らぬ男がもみ合うのを、ミハルは声も出せずに見つめていた。

ミハルを襲った男が、弟を殴り倒すと路地から逃げ出した。

「待て！ このやろう！」

弟は犯人を追って路地を出てゆく。その手に、犯人が持っていたナイフが握られていたのをミハルは見た。

弟はなかなか帰って来なかったので、心配になったミハルは警察に通報した。自分がレイプされかけたことを話し、弟の行方を捜し

て欲しいと頼んだのだ。警察官はすぐにパトカーを出してあちこち調べてくれた。そんな中で、明け方弟が帰って来た。彼の衣服は血がついていて、足にひどい傷を負っていた。犯人を追いかけていたときにつかんでいたナイフは持っていなかった。ミハルは救急車を呼び、弟が帰ってきたことを警察に知らせた。

病院で手当を受けた弟は、足の腱を断ち切られており、もう正常に歩くことが出来ないと言われた。そんな弟の元に現れた警察官は、話もろくに聞こうとはせず、あろうことかいきなり弟を逮捕したのだ。

「なんで？」

弟はまるで予想をしていなかったように、大きく目を見開いた。

「鈴木治夫という人物を知っているね。彼を刺しただろう。刃物を手に追い掛け回していたそうじゃないか。目撃証言もある」

弟の顔色がみるみる土気色になった。警察官が畳み掛けるように言った。

「さっき、鈴木さん宅の一部が燃えた。焼け跡から彼の遺体が発見された。死体を始末するために、放火までしたな？」

弟は、腕をつかもうとした警察官を振り払うと怒鳴った。

「殺していない！ 火事なんて、知らない。たしかに争って、傷つけたかもしれない。でも、見てくれ！ 俺のほうがやられたんだ」

帰宅が遅れたのは、歩くことが困難だったからだ、彼は何度も言った。でも、彼の供述を誰も信じてくれなかった。弟は「殺してなんかいらない」と、何度も言った。それに、殺された男は婦女暴行の前科があった。そんなやつのために……。

弟は私のためにあいつを追いかけて、それで……

事件以来、ミハルは自分なりに弟の無実を証明しようと奔走したけれど、調べれば調べるほどに、ミハル自身も彼がやったのかそうでないのか、まったく自信が持てなくなってきた。あまりにも状況証拠が揃いすぎていたからだ。

弟のことで悲嘆にくれながら、父と母は昨年、相次いで他界した。

やってないって、言ってるじゃない。親なのに、どうして信じてあげないの？

病床の父親に、そう何度もミハルは繰り返した。裁判をすれば、弟の無実を証明できるかもしれないと思った。けれど、現実は厳しかった。裁判には多額の金がかかる。それは、両親の残してくれた保険金でも払えないほどに高額だった。

ミハルは何とか勤め口を探そうと試みた。しかし、殺人者の家族がいるとわかると、どこもすぐに解雇されてしまった。隠しても隠しても、どこからともなく情報は漏れる。

「だから私は、この身ひとつで稼げるホステスになったの」

ミハルは話を締めくくると、大きく息を吸い込んだ。過去のことでも全部話した今、きちんと言うべきことを言わなければならない。

「今の店は辞めなければならぬかもしれない。でも、私はこの先も仕事を探すつもりだし、それはたぶん水商売だと思う。あなたの言葉は嬉しかったけど、モチロン日本を離れるつもりなんてないし……。だから、その、あなたの言葉を、初めから本気になんかしていなかったから。だから……」

「一方的だな」

無然とした声で早乙女が言った。彼を見ると、怒っているのがひと目でわかった。眉間にシワを寄せ、口をとがらせて。

言っておくけれど、彼は本当に子供よ。

キムの言葉が嫌でもミハルの心に甦ってくる。そして、たぶん彼は子供扱いされるのが一番嫌いなのだろうと直感が告げていた。だから、あえてここは、きつく言うところなのかもしれない。心を鬼にして、別れを告げるのだ。嫌われても構わない。彼の子供な部分を揶揄して、怒らせて、ここからたたき出せばいい。

「私はあなたのママじゃないわ」

彼の眉間のシワが深くなる。黙っている彼に、ミハルは早口でしゃべった。言いたくないことを言うのが苦しくて、声がわずかにかすれる。

「キムさんから聞いたのよ。あなただって、本当に私が好きなわけではないでしょう？ 誰の代わりかもわかってるから、安心してちようだい。……まあ、年に一回ぐらいは甘えに来てもいいから」

「どういう意味だ？」

「そういう意味よ」

彼の切れ長の目が細められた。その手がミハルに向かって伸びる。ぶたれる？

ミハルはギクリとして身構えたが、彼の手は、彼女の前に置いてあるスクラップブックを取った。再び開いてぽつりと言う。

「ひとりで何ができると思ってるの？」

「え？」

「本気で弟さんの無実を信じているのなら、どうしてひとりで何とかしようなんて思うんですか？」

早乙女は新聞記事のあとに閉じられた裁判のメモを読んでいるようだった。

「次の公判までに真犯人がつかまるか、弟さんの無実を証明できる確実な証拠が出ない限り、有罪は確定したも同然です。時間がないのに、あなたはいつたい何を迷っているの？」

「迷ってる……って」

「オレを利用すればよかったじゃないですか。頼ってくれたら、オレは……」

ミハルは血液が一気に下がってゆくのを感じた。言葉を探していると、早乙女がミハルの手をそつと握ってきた。温かな手のひらは、指の付け根の辺りが堅くなっている。ミハルは膝の上で握られた手を見た。それは、毎日毎日クラブを振り続けた手のひらだった。華やかな笑顔の陰で、一人で黙々とクラブを振る早乙女の姿が目の前に見えるようだった。さつき、ほんの一瞬でも彼に頼ろうと考えたことが恥ずかしい。プロゴルファー・早乙女ケイの名前のもとになれば、いくらでも優秀な弁護士と調査団を集められる、などと都合のよいことを考えた。それは、かれの努力と名誉を著しく汚す行為

だ。ミハルは彼の手のひらを愛しげに撫でた。

「あなたがこの手で世界を相手に一人で戦っているのに、母親代わりの私が一人でなんとかできなくて、どうするのよ」

「は、母親って……！」

早乙女は手を引つ込めると、耳まで真っ赤になった。こんなに動揺しているのを見たのは初めてだ。ミハルはクスツと笑った。途端に床に押し倒されて口づけられた。

「ママにこんなことするやつは、変態だ。オレは変態じゃない」

キスの合間に赤い顔の早乙女が怒ったように言う。ミハルは笑みを浮かべると、彼の顔の輪郭をたどった。出逢ってからめまぐるしい記憶が一気に溢れ出すと、まだいくらか経っていないのに、自分の中で彼の存在が信じられないほどに大きくなっていたのを知る。噛み付くようなキスが優しい愛撫に変わる。首筋に落とされた唇が、甘くささやく。

「今度はオレが守るから……」

彼の優しさに溺れそうになる。大きな手のひらがミハルの胸を揉みしだき、吐息で求めてくる。ミハルの中が彼一色に染まってゆく。脳裏に浮かぶのは青空と緑の芝の風景。そのどれもが美しく、色鮮やかだった。ミハルは彼の背中を撫でながら目を閉じる。

私は大丈夫。私だって、きっと最後まで戦える。

「ミハルさん……オレ……もう」

切なげに言つて、早乙女は昂ぶった体を押し付けてくる。ミハルは硬く閉じていた両膝の力をゆっくりと抜いた。

もう、甘えたりしない。だから……。これが、最後だから……

ミハルは濃い目の化粧をして、夕闇の中を歩いていた。キツイ香水のせいか、道行く人が数人振り向いた。途中、駅前商店街の入口で花屋に入り、店の名前で金原に見舞いの花を宅急便で贈った。本当なら病室まで訪ねてゆくべきなのだが、奥さんの手前、遠慮しておく方がいいだろうと判断した。それにもう、金原に会うこともな

いだろう。

照明が灯り始めた繁華街の人混みに、レンガ造りのビルが見える。クラブエレガントも、今夜で見納めになるだろう。

昨夜遅くオーナーから連絡があり、解雇を言い渡された。理由はあえて尋ねなかった。今夜が最後のご奉仕だから、来てくれたお客には、うんとサービスしよう。そう考えて、頭のすみに早乙女のこととが浮かんだ。ゆうべが最後の夜になるはずだったのに、別れの言葉を告げる前に彼はミハルの部屋から居なくなっていた。キムの指定するゴルフ場で、早朝から練習ラウンドをする、という書置きだけを残して。きちんと別れていないから、自分はまだ早乙女のものなのだろうか？

仕事とはいえ、お客にサービスしてやったら、きっと彼はふくれっ面をするのかな……。そんな風に彼の事を考えただけで、幸せな気持ちになる。

目元に浮かんだ甘い表情を、ミハルは瞬時に引つ込めた。

「きちんとする」と、キムに約束した。彼を余計な中傷から遠ざけるという誓いは、キムに言われたからではなく、ミハル自身が望んだことでもある。なのに、こんな気持ちを抱えていてどうする。ミハルは己を叱咤するようにごく小さく声にする。

「あごを上げて、胸を張れ。堂々と」

言いながら、背筋を伸ばす。ホステス・ミハルは店に来る男たちみんなのもの。甘く香り、愛でて酔わせる夜の華なのだから。

店の裏口から入って、オーナーの居る事務室に顔を出すと、すでにママが来ていた。オーナーの事務机に寄りかかっていたママは、ミハルを見ると、気の毒そうに言った。

「ミハルちゃん、あの、なんて言えばいいのかしら……」

途中で口をつぐんで、責めるようにオーナーのほうへ視線をちらちら送った。オーナーはママの様子をまったく無視して言った。

「ミハルちゃん、悪いね。電話で言ったとおりだ。うちは一応客商売だからね」

「わかってます」

「まあ、ワケアリだとは思ってたんだけど、まさか殺人の……」

そこまで言って、彼はようやくママの放つ殺気に気付いて黙った。彼はミハルを手招きすると、数枚の書類を手渡してそれぞれにサインするように言った。

「給料の前借り分だけど、あれはいいから」

「え？」

ミハルは目を丸くした。金にうるさいオーナーの言葉とは思えない。

「退職金とお餞別がわりでチャラにする」

彼のとなりでママが大きく頷いた。きっと、彼女がとりなししてくれたのかもしれない。

ミハルは一礼すると事務室を出た。

宵の口を回り、店はいつも以上に賑わっていた。後輩の力オリたちが、ミハルのさよならパーティということにしてくれたようで、彼女のお得意さんたちに内緒で声をかけてくれたのだった。店に続々とミハル宛の花が届けられ、フロアの中央にプレゼントが積み上げられた。フロア全体がパーティ会場となつて、ミハルの常連も、そうでないお客も、一緒になつて飲んで騒ぐ。

「ミハルちゃん、幸せになつてくれよな」

「別れたら、いつでも復帰して。待ってるからさ」

酔つ払った客が、次々にミハルのグラスにシャンパンを注いでゆく。表向きは寿退職ということになっているから、ミハルは笑顔を絶やさず、丁寧に対応した。

パーティも後半に入つて、ほろ酔い気分になりはじめたころ、ママがミハルを呼んだ。ミハルはカウンターに立ち寄つて、水の入ったグラスをつかむとひと息に飲み干した。ママはミハルを待って、彼女をVIP専用の個室へと連れて行った。ミハルの常連というわけではないが、エレガントの顧客には有名人も居るから、その中の

一人が見えたのかもしれない。そう思って、ミハルは乱れた髪を撫で付けて個室の扉を開いた。扉の向こうにサングラスの人物を認めて、ミハルはギョツとした。酔いが一気に醒めてゆく。サングラスの人物は、革張りのソファからゆっくり立ち上がると、口元を歪めてニツと笑った。

「よう、辞めるんだって？」

いったい誰から聞いたのだろうか。ミハルは彼の名前を呼んだ。

「松平さん……」

あのゴルフ対決のときの暴力団幹部・松平が居たのだ。彼は艶のある白いシャツに黒っぽいジャケットを羽織っている。広く開けた胸元から、胸毛とともに喜平のゴールドネックレスがのぞいていた。ミハルは用心深く室内に入った。背後からママがついてこようとするのを見て、松平が言った。

「悪いけど、二人で話をさせてもらいたいんだが」

松平は丸腰をアピールするように、両手を耳の高さに挙げて、ひらひらと振って見せた。彼の前にあるテーブルに、真っ赤な薔薇の花束を見つけたミハルは眉根を寄せたが、とりあえず背後のママに頷いて見せた。こんなところで乱暴されたりするとも思えない。

ママがドアを閉めて出てゆくと、室内は静かになった。自分自身から立ち昇る香水とアルコールの匂いに顔をしかめながら、ミハルは松平の方へ歩いて行った。彼は再びソファに腰を下ろすと、ミハルに向かって花束の方へアゴをしゃくった。

「こ、これ、とつとけ」

ぶっきらばうに言う彼の表情は見えないが、ひよつとしたら照れているのかもしれない。首の辺りが真っ赤になっていた。ミハルはようやく安心すると、彼の向かい側に腰掛けて花束を膝にかかえた。「綺麗ですね。ありがとございます」

どんなときでも、花をもらうのは嬉しいものだ。ミハルは丁寧に頭を下げた。二人の間に沈黙が流れる。松平は落ち着かない様子で貧乏ゆすりをしていたが、おもむろに口を開いた。

「あいつ、プロじゃん？」

「え、ああ……」

早乙女のことだとすぐにわかった。この前の勝負にイチヤモンをつけにきたのだろうか。ミハルは膝の上の花束に目を落とした。文句を言いに来たのなら、こんな花は贈らないだろうと、すぐに思い直した。

「スクープっていう雑誌で見たんだけど、その、あいつと結婚すんだろ？ よ、よかったじゃねえの」

「あ、ええ、まあ」

ミハルは言葉を濁して曖昧に笑った。スクープという雑誌は、キムがミハルに手渡した例の週刊誌だ。ミハルの弟のことが書かれていたが、松平はそこまで読んだのだろうか？

まさかそれをネタに、彼に何かするつもりでは？ ミハルはにわかに緊張してきた。松平の出方を伺うように黙っていると、彼が意外なことを言い出した。

「あんたの、あのホールインワンは、本当にお見事だったよ」

「え？」ミハルはキョトンとして彼を見た。松平は照れたように笑いながら言った。

「いや、あの時はその……あんまり驚いたもんだから、途中で勝負を降りちまつたけど、帰ってからあんたに拍手のひとつもしてやるべきだったなと……」

ミハルは、今度は心からの微笑を浮かべた。あの日の出来事は、まるで遠い昔のように懐かしくて楽しい思い出になっている。そのことを言つと、松平は声をあげて笑った。ミハルもつられて笑う。どうやら根は悪い人間ではなさそうで、ホッとした。和やかな空気の中で松平が言った。

「それでだ、あんたにお祝いがわりと言っちゃなんだが、ちょっと気になる情報を持ってきてやったんだ」

彼はジャケットの内ポケットから紙切れを引っ張り出した。見てみると、そこには二人の男性が映った写真がコピーされていた。エ

レベータの防犯カメラの画像ではないかと思われたが、二人のうちの一人は、忘れたくても忘れることのできない顔であった。

「この人、殺された鈴木治夫、さん……ですよね？」

松平が頷く。ミハルをレイプしようとして弟が殺した、ということになっている、鈴木治夫という男が映っていた。

「でも、どうしてこれを？」

訝るミハルに松平は言った。

「日付、見てみる」

写真の隅に、防犯カメラの日付と時間が出ている。

「あ……」

それは、鈴木治夫の住む自宅の離れが火事になる、ほんの一時間ほど前の画像だった。一緒に映っている男性は、弟ではない。ということ、弟と争ったあと、鈴木は自宅でないところへ立ち寄っているということだ。警察の調べでは、弟が鈴木 of 自宅から1キロほど離れた公園で足を切りつけられ、その後自宅に逃げ帰った鈴木治夫を追跡し、殺害して彼の家の離れに死体を遺棄、証拠隠滅のために放火した、ということになっていた。確かに弟は鈴木 of 自宅を探して、足をひきずりながら近辺をうろついたと証言しており、弟の血痕も発見されていたが、放火と殺人は全面的に否定していた。逆に、この血痕が彼を追いつめていたのだ。

「こ、これは……？」

「出所は聞くな。警察に提出すれば、たぶんそちらで調べてくれる。県警のマル暴担当の御崎みさきっていう刑事に渡せば話が早い」

「マル暴の……御崎？」

松平は頷くと言った。

「この鈴木治夫ってやつは、オレらの間じゃ結構有名でね。まあ、詳しいことは知らないほうがあんなのためだ」

考え込むように紙切れを見つめていると、松平が明るいトーンの声で言った。

「とにかくこれは、あんなの弟の事件で使えるはずだ。真犯人の手

「がかりになると思うぜ」

「そうだ。弟と争ったあと、鈴木 of 足取りが正確にわかれれば、死亡時刻も特定できて、弟の無実が証明できるかもしれない。」

「あの、この写真のもう一人の人物は……？」

「なおも問いかけるミハルを、松平は人差し指を一本立てて制したあとに言った。」

「それも聞くな。警察に任せろ」

「そう言っていると、松平は立ち上がった。」

「あの、松平さん」

「ミハルは花束と資料を握りしめた。なんと言っ てよいかわからない。まさかと思うが、見返りを求められたらどうしよう、などという思いがちらりと頭を掠める。すると松平は察したように言った。」

「これは、あんどき勝負を放棄した侘びだ。オレはこう見えても、借りは必ず返す男なんだよ」

最終話

11

ミハルは拘置所のガラス越しに弟と向かい合っていた。

「姉さん、ありがと。さっき、弁護士さんが来たんだ」

弟の言葉に、ミハルは涙を拭きながらうなずく。松平の情報は、ミハルの弟の事件を、急展開に導いた。警察の再捜査が始まり、事件当日の被害者の行動が明らかになるにつれ、真犯人の存在が浮かび上がってきたのだ。

「よかった。本当に、よかった……」

拭いても、また透明な涙がミハルの頬を伝う。弟が苦笑しながら言う。

「姉さん、泣かないで」

「うん。……早く帰って来られるといいね」

「そうだね。帰りたい」

顔を上げると、弟はどこか遠くを見るような表情をしていた。

先日のはずだった弟の裁判は、期日が延期されていた。弁護士が言うには、真犯人につながる有力な情報がある以上、裁判で無罪を主張するよりも、真犯人の逮捕を待ったほうがいいということだった。

マスコミはこのことを大きく取り上げ、ミハルの弟の事件を誤認逮捕ではないかと騒ぎ立て始めたので、どうやら警察は真犯人を検挙したあとに、弟に対する謝罪会見をするという流れを望んでいるようだった。ミハルとしては不服だが仕方が無い。今は、黙って待つしかない。

弟のことも、彼のことも……

面会を終えたミハルは、車を飛ばして自宅に帰った。夕方のスポーツニュースで早乙女の姿が映るかもしれないのだ。

弟のことは嬉しい騒ぎであつたが、ことが慌ただしく動き始めると、キムはミハルから早乙女をあからさまに遠ざけた。ミハルのほうから電話やメールはしないと決めて、それを守っているにもかかわらず、キムはミハルにけん制の電話を何度もかけてきた。

「本当に会ってないわよね？」

電話口でミハルは沈黙する。早乙女のほうからときどき電話やメールがあり、それに短い応答をした。それすらもいけなかったのだろうか。

キムは、早乙女の出場するゴルフの試合を会場で観覧することをミハルに禁じた。ミハルは黙ってそれに従った。現在ミハルはスポーツ番組やゴルフ中継が始まると、テレビにかじりつく日々を送っている。

早乙女ケイは、シーズンが始まるとすぐに注目された。ルックスと人当たりのよさに加えて、その実力も高く評価されていた。テレビに登場する回数が増えるにしたがつて、彼からの電話とメールの件数は減ってゆく。自然消滅の兆候は、お互いにとって都合とわかつているはずなのに、ミハルは悶々とする日々を送っていた。そんな中、ミハルの元に一通の手紙が届いた。差出人は無記名だったが、中を開けたミハルは、すぐに誰からのものかわかった。

中には一枚のチケットが入っていた。

夏の太陽がきらつく中、湿気を含んだ大気がミハルの白い肌に汗の粒を浮かせる。18番グリーンを臨む形で作られた観覧席は満席だった。その最前列にミハルは座っている。わずか五人ほど隔てた並びには、キムの姿もある。目が合い、お互いを認識しているはずなのに、キムは文句を言つてはこなかった。もしかしたら無視されているのかもしれない。ミハルはベースボールキャップを目深に被り直し、ミニタオルで首筋の汗をぬぐう。足元の芝からの照り返しで、頬が熱い。

周囲から歓声が上がリ、ミハルは視線を遠方にやった。大ギヤラ

リーを引き連れて、早乙女のパーティが18番ホールのティーグラウンドに移動してきたようだった。ドッグレグのコースなので、彼の姿はコース中ほどにある木立にさえぎられていて、ここからは見ることができない。本当なら、彼に付いて18ホール全てを回りたかったが、ミハルはキムとの約束を優先させた。彼に会うなという約束はまだ生きている。ただ、観覧チケットを送ってくれた早乙女の気持ちにも応えなかった。

だから私はこの18番グリーンであなたを待つ。

グリーンサイドの観覧席で待つミハルの耳に、誰かが携帯のワンセグでテレビ中継を見ている音声が届いた。

『さあ、日本プロゴルフ選手権最終日、最終組が18番ホールにやってまいりました。初日からトップに立つ、ベテランの片山信也をついに期待の新人・早乙女ケイが捉えました。前日からの猛チャージで、今日も16番、17番と連続バーディを決めて、とうとうトップに並びました』

18番はパー4のミドルホール。一番手は早乙女だった。固唾を呑んで見つめるギャラリーの耳に、キンという金属音が響く。ワンセグ放送のアナウンサーが、興奮した声をあげる。

『早乙女、第一打はセオリーどおりのフェアウェイ左サイドだ』

『いや、いい位置につけましたね。彼は初日からずっと、このホールパーでしたが、今日のピン位置からすると、十分バーディを狙えますよ』

解説の男性が絶賛しているうちに、二人目の打球が飛んできた。

早乙女よりも5ヤードほどオーバードライブしてきた。たぶん、飛ばし屋の異名をもつ片山のボールだろう。三人目がティーショットを打ち終わると、フェアウェイ上をベテランの片山と早乙女が肩を並べて歩いてくるのが見えた。ミハルは声援に応える早乙女を、眩しげに見つめた。

第二打目を早乙女が美しいフォームでショットした。打球は高々と上がり、一直線にピンに向かってきた。大ギャラリーが総立ちに

なる。ピンのすぐ手前でバウンドし、そのまま入ってしまうかに見えたが、バックスピンがかかって後退した打球は、ピタリと止まった。その距離、ピンからおよそ十メートルという位置だ。それでも十分バーディが狙えるということで大拍手が巻き起こった。片山もいいショットを見せて、バーディ圏内につけてきた。試合はいよいよクライマックスだ。

ミハルは手元のチケットをぎゅっと握りしめた。うらに早乙女の文字で走り書きがしてある。

『最終日、18番ホールの観覧席で待っていて欲しい。必ずそこで決める。 ケイ』

かなりキザな文章だと思ったが、この試合の前におこなわれた三試合を、すべて二位という好成績で通過している彼の言葉には、自信とやる気が満ちていた。それに、日本プロゴルフ選手権は、他の大会とは意味合いが違うのだと、ゴルフ雑誌を読んでミハルは初めて知った。この試合で勝てば、十年間のシード権がもらえるのだ。予選を戦うことなく本戦に出場することができる。プロなら咽喉から手が出るほどに欲しいタイトルなのだ。

グリーン上に最終組が姿を見せた。野外スタジアムのように18番グリーンを囲んで扇形に設置された観覧席から、割れんばかりの拍手に迎えられ、早乙女はいつもより一回り大きく見えた。久しぶりに間近で見た彼の姿にドキドキする。小さく手を挙げてみたが、彼は集中しているようでまったくこちらを見なかった。

片山のバーディトライになった。ベテランで昨年度の賞金王である彼は、余裕の表情を見せてラインを読む。これを入れれば、後から打つ早乙女に対してかなりのプレッシャーをかけることができるだろう。片山は上りのラインにつけており、早乙女は難しい下りラインだ。外す確率としては、早乙女の方がかなり多い。

片山がアドレスすると、時が止まったようにあたりがシンとなった。

お願い、外してと、ミハルは祈るように目を閉じた。

カッン……。まっすぐに球が転がる、転がる、転がる……。
オオオオオオ

ギャラリーが一斉に息を吐いた。球はカップ手前でピタリと止まっていた。片山は悔しげに地団駄を踏むと、パーでホールアウトした。ピン手前に3打目を寄せていたもう一人が空気を読んでか先にホールアウトし、残るは早乙女のバーデイトライだった。

キャディと共に何度もラインを読む早乙女の背中から、緊張感が伝わってくる。これを入れれば優勝。外してパーなら優勝争いのサドンデスだ。早乙女としては決めてしまいたい大事なパットだった。早乙女はグリーン上でボールを前にして、天を仰ぐように大きく深呼吸をした。ミハルも彼に合わせて大きく息を吸い込む。

……と、彼がいきなりミハルのほうを向いた。目と目が合ったとき、彼はなんと、ニコツと白い歯を見せたのだ。ミハルの心臓がドクンと跳ねる。青空の下で、ミハルと早乙女を中心に、ギャラリーのざわめきがさざ波のように広がった。

何してるの？ もっと集中してよ！

こちらのほうが心配になってしまふ。いったいなんてことするのかと、心臓がちぢみ上がりそうだ。早乙女はミハルだけを見つめながら小さく、でも、しっかりとうなずいた。チケットの裏にあったメッセージが、ミハルの頭の中いっぱい、彼の声で聞こえてきた。

必ずそこで決める。

本当に早乙女の予想通り、勝負の行方が18番ホールに持ち込まれたことに気づき、ミハルの両腕が栗立った。

早乙女はミハルに背を向けると、ごく自然体でアドレスした。その背中から、このパットだけに集中していることが伝わってきた。ミハルが息を詰める。まだ周囲がざわめいているにもかかわらず、早乙女が打った。

カッン……。白球がグリーン上に残像を残して転がる。右にゆるいカーブを描いて、ボールはカップを目指す。ざわめきが消え、ミハルは祈ることすら忘れてしまった。まるでスローモーションのよ

うに、球がカップに差し掛かり、くるりと縁で回る……。

カコーン……。

静寂の中、白い球が視界から消えた。

おおおおおお！

どつと歓声が上がリ、止まっていた時が一拳に動き出した。早乙女がグリーン上でキャディとハイタッチをしているのが、ミハルの目にはまるで夢の中の出来事のように見えた。

ケイ！ ケイ！ ケイ！

いつのまにこんなに応援団が出来たのだろうか。『ケイコール』が爆発したように響く中、早乙女がバイザーを取って、何度も何度もギャラリーにお辞儀をする。優勝を争った片山氏と握手を交わす早乙女を見ているうちに、ミハルは感極まって涙が溢れてきた。帽子のつばで顔を隠し、ミニタオルで目元を拭っていると、急に周囲がざわついた。

ふつと顔を上げると、目の前に早乙女が立っていた。

「え……？」

汗だくの彼は、清々しい笑みを浮かべて、ミハルの前に手を差し出した。反射的にその手を取ると、ぐいと引っ張られて観覧席から引きずり出された。彼らの周りで一斉にカメラのフラッシュが焚かれる。

何が起きたのかまったくわからず、呆然としてみると、とうとうグリーン上まで連れ出されてしまい、いきなり肩を抱かれてキスされた。優勝が決まったときよりも大きな歓声が18番グリーンを包む。ミハルから唇を離すと、早乙女が言った。

「ミハルさん、オレたち結婚しよう」

ミハルの目が大きく見開かれる。周囲をとりまく大ギャラリーも、歓声も、何もかもが消え失せて、世界中に二人きりになってしまったような錯覚に陥る。

「必ずここで決める、そう書いたでしょう？」

午後の陽射しをバックに、日に焼けた顔で笑う、早乙女だけしか

目に映らない。

結婚って……。ええ？

やっと事態を把握しはじめたミハルの耳に、周囲の音声が戻ってきた。警備のボランティアに遮られたキムが、群集の中から喚き散らしているのがキンキン聞こえる。ミハルが振り向こうとすると、早乙女は彼女の頬に手を添えて、その顔をそっと自分のほうへ向かせた。

「プロポーズのときは、必ず18番グリーン上で、って、そう決めていたんだ」

ミハルはぼんやりと彼の顔を見上げた。切れ長の瞳に映っているのは、やっぱり慣れた自分だ。それでもなんだか、フワフワとして実感がわかない。早乙女はクス……と笑うと、ミハルの手をしっかりと握ったまま、もう一度ギャラリーに大きく手を振った。笑顔のギャラリーの中に、キムだけが苦虫を噛み潰したように腕組みをしている。彼女の顔を見ているうちに、ミハルは実感がじわじわと湧いてきた。そして恥ずかしいことに、顔が一気に赤面する。

「決める、って……。勝負のことでしょう？ 普通」

「プロポーズだって、オレにとっては大勝負さ」

そう言いつつも、早乙女は初めて会ったときのように口の端を片方上げて、自信たっぷりにニヤリと笑った。

大歓声が大きな拍手に変わったとき、ミハルは安堵の吐息を漏らして、ぐったりと早乙女の肩にもたれかかった。

午後四時を回り、緑のフェアウェイに心地良い風が吹き始めている。翌日のスポーツ紙は、彼の国内ツアー初優勝を決めた写真よりも、先ほどのキスシーンがでかでかと載るだろう。この先も落ち着かない日々が続くことが予想され、ミハルは何とも言えぬ思いで小さく溜息をついたのだった。

優勝祝賀会は、主役がビール一杯で酔いつぶれたため、早々にお開きになった。早乙女はSPのマイケルに背負われて、ホテルのジ

ユニアスリートに担ぎ込まれた。

「まったく、ブランド物のジャケットがしわだらけだし。しっかりしなさい、ケイ！」

ベッドに大の字になってしまった早乙女を、いつになく厳しい口調でキムが叱咤する。

ミハルはパーティードレスのすそをひらめかせながら早乙女の脱ぎ散らした靴をひろったり濡れタオルを持ってきて額に当てたりと忙しく動き回る。店では酔っ払いの介抱など日常茶飯事だから手馴れたものである。そんなミハルの姿を見ても、キムは何も言わない。18番グリーンでのプロポーズが抜群の効果を発揮して、誰もがミハルをすでに早乙女夫人として扱ってくれた。彼女にパーティードレスを用意し、メイクアップまで気を回してくれたのはキムだったので、ミハルは心底驚いた。

「ああもう、まだ会場の収集がついてないわ！ スポンサーさんたちの対応はどうするのよ、まったく！」

キムはぐったりしている早乙女を苦々しげに見ながら言う。その視線がミハルに向けられた。

「ミハルさん」

改まった口調にどきりとする。思わず背筋を伸ばして見つめ返すと、キムが思いがけないことを言った。

「今夜はここに泊まってください。ケイのこと、どうぞよろしくお願いします」

深々と頭を下げられて、ミハルは面食らった。だが、「こちらこそ……」というミハルの返事は、キムによってさえぎられた。

「言っておきますけどね、ケイのシーズンはこれで終わりじゃないのよ。むしろ始まりなんですからね！」

キムは顔を寄せ、ミハルに向かって酒臭い息を吐きながら、クギを刺すように言い放った。何かひとこと言い返したかったけれど、こんな日ぐらいはずっと笑顔でいようと決めて、ミハルはキムを丁重に扱ってお引取りいただくことに成功した。

キングサイズのベッドに、正装のまま、額に濡れタオルを当てた早乙女が横たわっているのを眺める。それにしても、こんなに酒が弱いなんて驚きだった。どうりで彼女の勤める店に興味を持たなかったわけだと納得した。

何だかまだ飲み足りないミハルは、部屋に備え付けの冷蔵庫からシャンパンの小瓶を取り出し、グラスに注いだ。シャンパンの気泡が、間接照明に照らされてプチプチとオレンジにはじける。早乙女の眠るベッドの端に腰掛けて、ミハルはひとり静かに幸せを噛みしめた。グラスを見つめ、一人で乾杯しようとしたとき、彼が「うん」と唸って寝返りをうつた。タオルが滑り落ち、彼は薄く目を開けた。眠たげな目がミハルを見て満足気に細められる。

「ミハルさん、もう、何も心配事はないよね？」

ミハルは頷くと、シャンパングラスをちよつと挙げて見せる。早乙女はほとんど寝言のように、ぼそぼそと言った。

「……弟さんのことみたいな隠し事も、ないよね？」

ミハルは笑みを浮かべたまま、静かに彼を見下ろした。早乙女が目を閉じると、やがて規則正しい寝息が聞こえてきた。ミハルはシャンパンをひと口飲んで呟いた。

「ごめん……。まだあなたに隠していることがあるの。たいしたことじゃないけれど……」

パールピンクの口元に笑みをたたえ、ミハルは心の中でささやく。実はミハルっていうのは仕事の源氏名なのよ。女性は秘密があるほうが、神秘的だって、言うじゃない？

シンデレラだって、王子にその素性を最後まで隠していたのだから。

「でも、私の王子さまだけには教えてあげる」

ミハルは幸せそうに眠る早乙女の耳に唇を寄せて、そつと囁いた。「私の本名はね……」

(了)

最終話（後書き）

ここまで甘くつづっておきながら、本名は健太郎です、なんてカミングアウトなオチがついたら怒りますよね？ 大丈夫です。そんなことはありません・笑

長いものをお読みくださいましたどうもありがとうございました。書きながら、かなりの試行錯誤とひとりごとを繰り返しつつ（サブタイトル、改めて見直すと、ものすごくウザいですね。あれじゃあ単なるボヤキだ・汗）最後は必ずハッピーエンドというハーレクインの掟を守り、なんとか完結することができました。拙い文章で、読みにくい部分やつじつまの合わない箇所などあったかと思えます。今後の精進のために、ぜひご意見ご感想をいただけたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。本当に、ありがとうございます
た！！

冴木 昴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3671w/>

プリンセスは芝生の上

2011年9月9日12時02分発行